

全国同人雑誌最優秀賞

第17回 まほろば賞 発表

二〇二一年からまほろば賞は全国同人雑誌協会と文芸思潮が主催することになりました。今後もこの形で進めさせていただきますので、どうぞよろしく願います。

第一七回新全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」選考会は、二〇二三年七月九日にハドル・スペース自由が丘において、三田誠広氏、中上紀氏、小浜清志氏、五十嵐勉「文芸思潮」編集長の四名の選考委員によって慎重に審議が行なわれました。作品ごとに各選考委員が深く批評し、熱い議論が交わされました。厳正な審査の結果、左記のように決定いたしましたので、ここに選評とともに発表させていただきます。

また全国からの読者の投票と寄付による読者賞の投票および内容の結果も併せてここに掲載させていただきます。

一昨年から、「まほろば賞」は受賞作品には、賞状と賞金三十万円（賞金は主に寄付によるものです。また二人同時受賞の場合は、恐れ入りますが、一人二十万円とさせていただきます）および記念トロフィーを贈らせていただく

ことになりました。河林満賞にもそれぞれ賞状と賞金十万円と記念品を、また読者賞には投票賞金と優秀賞賞金五万円および記念品を贈らせていただきます。優秀賞にも記念品と賞金五万円を贈らせていただきます。

今後も全国の同人雑誌の中から優れた作品が生まれることを祈念し、たくさんの方の同人雑誌の作品が全国同人協会・全国同人雑誌振興会及び文芸思潮に寄せられてくることを期待しております。

また、どうぞ作品の推薦にもいっそう多数の方が御参加くださるようお願いいたします。また積極的に読者賞への投票に加わっていただき、ぜひ皆様自らの手でこの賞を盛り上げ、育てていただきたいと思います。全国の同人雑誌諸氏の御参加と御支持を切に願います。次第です。

またこの結果及び選評とその感想・批評の動画、また優秀作品はインターネット「文芸思潮」ホームページでも発表される予定です。どうぞ御覧ください。

第17回全国同人雑誌最優秀賞

まほろば賞

「エリザベトを選んで」

〔白鴉〕33号

蒔田あお

特別賞

「浜辺のリズ」

〔黄色い潜水艦〕75号

藤本あずさ

河林満賞

「青山墓地の桜」

〔槇〕45号

萩原紫香

五十嵐勉賞

「血の湯」

〔繫〕3号

寺本親平

読者賞

「見返り」

〔季刊作家〕100号

佐藤文平

「枯野」

〔季刊作家〕100号

祖父江次郎

優秀賞

「白詰草」

〔季刊午前〕60号 西田宣子

まほろば賞賞金は、木内是壽氏、故蘭藍子氏、三田村博史氏、故原石寛氏、夏目日美子氏、前岡光明氏、今田真理子氏、二宮英郷氏、堀井清氏、西島雅博氏、高橋惟文氏、勝又浩氏、越山しづか氏、「北斗」などの御寄付によるものです。ここに厚く御礼申し上げます。また「狐火」「安藝文学」「べん」「海」「文芸中部」など文芸思潮同人誌団体会員の御協力にも厚く御礼申し上げます。

選評



みた まさひろ
1948 大阪生まれ
早稲田大学文学部卒
77「僕って何」で芥川賞受賞
作品はほかに「いちご同盟」
「空海」「親鸞」など
最近の本「遠き春の日々」
「少年空海アインシュタイン時
空を超える」「天海」「善鸞」
日本文藝家協会副理事長
武蔵野大学名誉教授

同人雑誌の充実ぶり

三田誠広

どの候補作も文章が安定していて作品としてのレベルが高く、昨今の同人誌の充実ぶりを実感できた。掲載順に感想を書く。「白詰草」（西田宣子）は二組の高齢者夫婦の日常を丹念に描いた佳品で、手並みが鮮やかで過不足がない。片方の妻と他方の夫が絵画を描く点で接点があるのだが、芸術小説という感じではなく、淡淡とした日常が描かれる。画家の妻が病気になるったり、孫の結婚の話が出てくる場面もあるのだが、それもありふれた日常風景にすぎない。小説としての盛り上がりには欠けるのだが、こういう

小説があってもいいと感じさせる。

候補作の中で異色と感じられたのは「血の湯」（寺本親平）で、平家琵琶や説教節を思わせる幻想の世界に読む者をいざなう不思議な作品だ。ストーリーのない散文詩的な展開で、独特の語り口で恐ろしいことが語られる。その文体の強度には驚かされるし、ユニークであるということは評価されなければならない。ただユニークすぎて理解が及ばないところがあることも確かだ。五十嵐勉さんの強い推奨があったが、他の選考委員の賛同は得られなかったし、よく自身も強くは推せなかった。語り手が抱えている業のようなものもつと描かれていればと惜しまれる。

次の二作は同じ同人誌の掲載作で、妻のいない高齢者男性が二人ずつ出てくるという点でも共通している。ほくも今年、後期高齢者になった。まだ妻は健在だが、もし一人きりになったらこういう状態になるのだろうか、身につまされる思いで読み進んだ。女性の方が長生きするので、男性の高齢者が一人取り残されるというのは少数派だろうが、それだけに悲惨さが際立つように思われる。二作とも男性高齢者の一人暮らしのわびしさが細部に渡って描き出されていて、逃れがたいリアリティーをもって読者に迫っていく。「見返り」（佐藤文平）はテンポよくプロットが展開する秀作で、書き手の技術力の確かさが感じられる。最後に到って主人公の妻の過去が明かされるという仕掛け

があつて、そこが読みどころでもあるのだが、やや通俗的なオチになってしまった。「枯野」（祖父江次郎）は野良猫を飼う話や、競輪場の寂しい風景なども描かれるのだが、プロットというほどのものではなく、老人二人の哀れな末路が淡々と描かれる。救いのない独居老人のありのままの現実がつきつけられて息が詰まるようだ。けっして楽しい作品ではないが、これが純文学だと思わせる訴求力がある。

河林満賞を受けた「青山墓地の桜」（萩原紫香）は終戦直後の米兵の現地妻と、近所の少女の交流を描いたもので、おそらくその少女は書き手自身と重なるのだろう。世間から白眼視される立場の現地妻の女性も、英語ができるくらいだから育ちのよい人なのだろう。終戦直後の就職難の時代には、女性の仕事も限られていて、教養がありながら米兵相手のホステスや現地妻になる女性も少なくなかったはずだ。大人たちからは批判の対象となる現地妻の女性も、偏見のない少女の目には素敵なお姉さんと感じられる。そんなありのままの姿を少女の視点で素直に描いてみせた書き手の筆致に好感がもてる。それだけにそのお姉さんが胎児を宿したまま自殺を遂げる結末には痛切なものがある。受賞に相応しい見事な作品だ。終戦直後の東京の民家のようすが細部にわたってきつちりと描かれていて、歴史的な証言という点でも高く評価できる作品だ。

特別賞となった「浜辺のリズ」（藤本あずさ）は短い作

品で、一読しただけでは印象のうすいエッセーふうの作品と感じられたのだが、丹念に読み返すと細部が輝き始める。津波で飼い主を失った犬を保護して、老人を癒すセラピー犬としての訓練を受けさせるという導入部は、ただの犬の話ではないかと危惧されるのだが、やがて筋萎縮性側索硬化症という重病を負った女性と、犬を通じて交流するという展開になって、読者は改めてこの作品の重さに気づくことになる。言葉を活けない重病人と、物言わぬ犬との間に不思議な魂の交流のようなものが芽生えていく。そこまで読み進むと、この犬が津波という地獄を体験した生命であり、一方で身動きできないという業苦を負った患者がいて、そこに言葉を越えた何かが通じ合っていくということの不思議さが見えてくる。軽いエッセーと見えた短篇に、驚くほどの重いテーマが秘められている。

まほろば賞に輝いた「エリザベトを選んで」（蒔田あお）は冒頭の食肉加工の作業場で働くヒロインの姿がまず印象的だった。このようなオーブニングの小説は珍しいのではない。やがてこの女性の不幸な生い立ちが語られて、なぜ彼女が食肉加工に従事するようになったかが明らかにされる。ふつうの女性らしい幸福には目もくれずに地味に生きようとする彼女の生き方に共感できるし、読者のほくは傍観者にすぎないのだが、頑張って生き抜いてほしいと思わずにはいられない。だが作者はこの女性をさらに不幸な

境遇に導いていく。プロットの一つ一つがリアルに描写されているので説得力があり、読者はこの女性に寄り添って不幸な境遇を追体験していくことになる。最後にわずかな救いとして、宗教的なテーマが立ち現れるのだが、下手に描くと理屈っぽく感じられる聖書の引用が、関西弁のいきいきとした会話とともに提出されるため、読者の胸に素直に入り込んできて、深い感動をもたらす。この作品に出会えてよかったと思わずにはいられない。



こはま きよし
1950 沖縄県生まれ
劇団四季など様々な職を遍歴
87 作家中上健次に師事、マネージャーを務めるかたわら文学修行
88「風の河」で文学界新人賞を受賞
他の作品に「消える島」「後生橋」「光の群れ」「火の闇」などがある

圧倒する力量と迫力

小浜清志

受賞作となった「エリザベトを選んで」・「藤田あおの作品は他を圧倒する力量と迫力で全員一致で受賞作となった」主人公土屋珠季と来栖陽平のかんりの年齢差結婚からこの

作品は始まり、徐々にある方向へと崩れていくのであるが、その方法と表現には巧みな工夫が加えられており、自然と作品の世界へ引きずり込まれていく。

珠季が高校三年の七月に母と弟が無理心中するという事件が起きた。このことを機に珠季は罪を背負ったような生き方を選ぶ。食品会社の肉をスライスする女性労働者として暮らしている珠季は、同じような過去を持つ陽平と付き合ひ結婚式を挙げるのだが、式場の教会が重要な伏線となつてこの作品の重厚さにつながっていくのは見事である。十九才も年上である妻と夫の不釣り合いは陽平が会社をくびになってから露見する。出産から五ヶ月のある日陽平は得意先のスーパーの売り場マネージャーを殴る事件を起し、会社を解雇され三日三晩布団の中でふさぎこみそのあとふらりと家を出て一週間行方をくらませる。そこから崩壊が速度を増し珠季の病氣と相まって読むのも辛くなる展開がくり広げられる。陽平は父親という意識があまりなく珠季にもたれかかっているが、当の珠季はがんを宣告され生きる望みすら奪われようとするが、結婚式を挙げたときの教会の牧師との再会で宗教に頼っていくことで希望を見出すという結末になっている。年の差婚から不条理は広がり、坂を転げ落ちるような生活からキリスト教に救いを求めるという構図は少しあざといとは思ったけれども文章の力でここまで作りあげたのは見事である。

次に私が感銘を受けた作品は「白詰草」西田宣子である。主人公の果林は現在七十五歳で三十五才の時から毎年県展に絵を応募しつづけている。絵の対象はバラや百合ではなく地味な草や花しか興味がわかない。そして、彼女の交友関係も地味である。知り合ってから四十年になる喫茶店「夢」の店主の須美は五十代で重一さんというパートナーを得て今でも現役で店をきりもりしているが、果林の娘の千夜にいずれは店をゆずるつもりでいる。重一さんは全国的にかなり有名な画家であるが果林は絵のアドバイスを一度も受けようとせず、毎年の応募作にはシロツメクサをしきつめた「白花」というタイトルであるが、その絵の中に三人の女を描こうとしている。大切な者たちを守り、着実に人生の時を過ごす草のような女の姿を果林は描きたいと思っている。十二月の半ばになって須美が倒れたという連絡を重一さんから受ける。もう八十才になる須美であるから果林は夫と共に病院にかけつける。入院のゴタゴタの中で果林は老いをより身近かに感じ、夫とも初めて納骨の事など話し合う。最後は孫である可奈の結婚相手に二人の親が反対をしているとの相談を受ける。ともかく相手の青年と会ってみることにして「夢」で会う日時を決めるところで終わる。この作品の良さはまず誠実である。どこを見てどこに気を配ればいいのかをきちんとわきまえていて清々しい。

「見返り」佐藤文平も丁寧な筆致に好感が持てた。同期入所の三国民雄から思いがけない便りを受け取る。個人的な付き合いがあった訳でもなく、せいぜい一年一回のOB会で顔を合わせるほどの関係ではないが、上京する用があるので貴兄の都合のいい日に亡くなった奥さんに線香をあげに行きたいとのこと。桜井は亡き妻の遺影に手を合わせ手紙の内容を伝えると、なつかしいお名前ね、でも私たちを引き合わせた恩人にはちがいないから歓待してあげてねとささやかれた気がした。入所して十四、五年経験を積むと係長への昇進の話が出るが、三国は親が政治家ということとで一番のりを果たしたと上司から知らされた矢先に二人で日帰りの出張に行くことになる。その帰り道三国の運転中に自損事故を起こしてしまう。すると三国は土下座までして桜井、お前がやったことにしてくれと懇願する。係長内定を取り下げられるかもしれない三国の頼みを桜井はしぶしぶ受け入れてしまう。「その代わり、見返りは必ずきちんとさせてもらうから」と彼は言った。三国のその言葉はあてにしていなかったが、数ヶ月経って三国から手紙が届いた。それによると庶務課の細川菊恵さんから手紙でも打ち明けられたことだが、彼女は桜井との交際を希望しているとのこと。さり気なく映画にでも誘えばと答えたが、このことは彼女には内緒にしてくださいとのこと。手紙の通り映画の誘いを受ける。そして、二人の仲が深まり互いに

なくてはならない存在になる。そして三国から二通目の手紙が届いた。それによると細川菊恵から感謝の言葉があったとのこと、月下氷人のまねごとみたいなものですが、これで何とか収めてもらったら助かります、と綴られていた。見返りとはそういうことだったのかと納得する。やがて二人は結婚し子供もできたが、妻はガンで先立つ。そして、三国との再会になるが、出張帰りの事故も菊恵を紹介したのも全て三国の思いつきだったとのタネ明かしで終わる。それだけではなく、もう一工夫できなかったか残念である。「枯野」祖父江次郎も老年を描いている。武雄は妻の一周忌をすませてから猫の鳴き声を聞くようになった。玄関横のガラス戸に寂しげに猫の姿が映る。扉を開けると部屋をのぞいている。中に入れてアジの煮付けを出した。その日を境に猫は自由に出入りをするようになる描写を加えながら、老いた男の一人暮らしを淡々と描いていく。それはまさしく枯れた日々が続く枯野になるように見えてくる。スーパーへ出かけいつもの椅子で世間を眺める老人の目にも輝きはしない。だが、小堺という中学の同級生と再会してから枯野に陽差しがあたるように武雄の生活も彩りを帯びてくるが、所詮は老人同志の行動であり会話である。競輪場の出入りをするようになってから武雄と小堺の間にかつてあった溝がなくなり孤独感もうすらいでいくが、小堺の死で枯野がふたたび広がっていく淋しさが襲ってきた。

「青山墓地の桜」萩原紫香は記憶に残る作品であった。戦後にはアメリカ兵と関係をもつ女性があちこちにいた。その一人である女性と知り合った私は毎日のように遊びに行っていたが、ある日汚い言葉を浴びせてしまう。幼いがゆえの配慮を欠いた言葉の後悔は時を経て消えることなくまといつく。それから間もなくして彼女の飼っていた犬がわが家に来た。祖母が言うにはお姉さんは遠くへ行つたとの事。「私」はアメリカへ行つたものだと思ひ込んでいたが、その犬が死んだときに母から真相を知らされ、自分の吐いた言葉がどれほどお姉さんを傷つけたか後悔に苛まれる。お姉さんの自死は想像するだけで淋しい。

「浜辺のリズ」藤本あずさは、透明感のある作品である。東日本大震災の被災犬であるリズと、ALSという難病をわずらっている真由美さんと、飼われているハッピーという犬との交流を描いているが、暗い方へ流れるのではなく、むしろさわやかな展開が心地よく、作者の手柄がかい間見える気がする。

「血の湯」寺本親平は、透徹した観念の膨らみには脱帽するしかない。



いがらし つとむ
1949 山梨県生まれ
早稲田大学文学部文芸科卒
79「流瀆の島」群像新人長編小説賞
84-90 カンボジアを中心に東南アジアを取材「東南アジア通信」編集長
主著「緑の手紙」(読売新聞・NTT プリンテック「インターネット文芸」最優秀賞)・「鉄の光」「ノンちゃん、NONGCHAN」(聖丘寺院へ)「破壊者たち」

芥川賞を凌駕する充実感

五十嵐勉

第一七回まほろば賞も中身の濃い作品が揃った。全国の同人雑誌から上がってくる優秀作品の読みこたえは、最近の芥川賞作品よりもはるかに充実感があり、凌駕する内質を有している。商業文芸誌の質的凋落と、文芸出版体制の衰微を、現状としてこれらの作品の前に感じるとき、文芸創作をどのように再構築していくべきか、考え直すにはいられない。世の中にはもっと掘り出して広めるべき作品があり、共有すべき高いレベルの文学作品があることをあらためて感じた。

受賞作の蒔田あお氏の「エリザベトを選んで」は、特に重厚な作品で、運命の果てに痛に冒される緊迫感、圧倒

的な迫力を備えている。少女期、障害を抱えた息子を連れて自殺し、自分を身寄りのない者として置いていった母の追いつめられた状況が、その時点で主人公の運命を決めたと同時に、のち自分もその同じ状況に陥っていくところに、この筆者の鋭く深い構想力が示され、文学造形の非凡な掘削力を感じる。普通は少女期と結婚期、子育て期とをこのようには重ねない。しかし蒔田氏は、運命の苛烈さを描く手を緩めることなく、限界まで追い詰めていく。この

烈しい収斂性は、生粋の文学者魂を示して、煌めいている。主人公が末期の膀胱癌で死ななければならぬその緊迫性の中に、教会で主人公を導く牧師も同じ末期癌で、この世界から消えていく運命の一つの同期性のうちに、救いを強くするが、そこにしか希望がない、この希求の強さに、作品の眩しい発光がある。時間が少し飛ぶ結節部分にいくらかギクシャクした流れの淀みも感じられるが、いずれこの筆者は逆にそれを長篇の新しい手法として生かしていくような、大きな可能性が感じられる。期待できる作家だ。

特別賞の藤本あずさ氏の「浜辺のリズ」は、寝たきりの重度の障害者を、犬の世話を媒介にして訪問ヘルプするストーリーだが、すでに言葉が喋れず、キーボードでの画面表示によって意思を疎通させるだけのコミュニケーションの新しさも新鮮で、それによって逆に内面や本音が露出する側面もあり、その斬新さは確かにある。しかしその奥深

いところは、結局肉薄でさず、むしろ犬によってある生物的な共感を響かせ合うに留まっている。救われているのは、津波で飼い主や家を失い、浜辺を彷徨っている犬の姿が、身体を失って生き物としての最低の生存のなかでの障害者の孤独感に重なってくるところだが、これは筆者の底にある優しさによってしつかりした基盤を得た、一種の迂回による成功となっている。そこに幸運な結節がある。しかし作者が今後どこまでこの世界を追求していけるかは、未知数である。

作品に漲る感情の一貫性では、萩原紫香氏の「青山墓地の桜」に深い痛切さを覚えた。戦後間もなくアメリカ軍の駐留部隊の米兵と親しくなったうら若い女性の悲劇に、まだ分別のつかない子供の立場から接したことによって、いっそう犠牲になった一人の女性の姿が鮮やかに浮かび上がってくる。当時アメリカ軍の駐留した場所がよく聞かれた話、よくあったことでありながら、ここまで鮮やかに人間として浮かび上がらせた物語には初めて接した気がした。これを読むといつまでもその女性の姿と、戦後の情景が胸深く残るだろう。その意味で、意義深い文学作品となったことに、拍手を惜しまない。

寺本親平氏の「血の湯」は、近年例を見ない超リアルリズムの異界譚である。普通の描写を一切捨てて、超現実の世界に直接入っていく切り込みは、呪術・祈祷の領域まで踏

み込む根源的な世界を浮かび上がらせている。我々の血の中に潜む、修羅や奇形や悲劇の深い流動の深淵を見せてくれる。生き物としての血の渦の根源を覗かせる描写は、日常の幕を暴いて、血の業としての合流を生命帰還の還流の姿で、宇宙の中に再生させていく。こういう世界が造形できるのは、何よりも筆者が薩摩琵琶奏者であり、平家物語に息づく戦乱の血の怨みを体感しているからだだろう。泉鏡花の系譜とも言えるこれは、筆者でなければ書けない世界であり、現代こういうものが忘れ去られていく時代趨勢の中では、特に貴重としなければならない緊要性から、「五十嵐勉賞」を贈った。

読者賞の佐藤文平氏「見返り」と、同じく祖父江次郎氏「枯野」は、どちらも晩年の世界を鮮やかに描いて、人生の終わりに見えてくる生の風景を呈示している。

「見返り」は、妻が死んでの数十年ぶりに訪ねてきた同僚の告白を聞くという設定だが、その告白の内容が実は妻がその同僚の前の恋人で、政治的欲得でその彼女を捨てて、主人公に乗り換えることを勧めて縁を持たせたというショックな内容である。これは同僚も末期癌で命は長くないことを前提にした、一生を振り返る告白であるだけに、起こり得る人生最後の秘密の暴きでもある。老練で緊密な筆致は、晩年の衝撃的な告白を普遍的な生の振り返りに止揚している。読ませる文章には、高い技術を感じた。

の作品が突き付けてきていることを、感じさせる今回の選考だった。



なかがみ のり
1971 東京生まれ
ハワイ大学美術学部卒業
99「イラワジの赤い花 ミャンマーの旅」(集英社)を上梓
同年「彼女のブレンカ」(集英社)
ですばる文学賞受賞
「悪霊」(毎日新聞社)「いつか物語になるまで」(晶文社)「夢の船旅—父中上健次と熊野—」(河出書房新社)「アジア熱」(大田出版)「シャーマンが歌う夜」(水の宴)(集英社)「海の宮」(新潮社)「熊野物語」(平凡社)「天狗の回路」(筑摩書房)など著作多数

痛みと共に生きるつづひと

中上紀

西田宣子氏の「白詰草」も、画家として創作を続けてきた主人公が、老年という生を終える状況に近づいて、一つの軌跡の意味を問いかける小説である。この年になって初めて見えてくる風景が確かにある。それは老年のたわわな果実として、あらためて生を問う機会に恵まれる。その問いの前にどう答え、どう姿勢を整えるか、長い人生の終焉に臨んで、文学だけが持つ問いの深まりが、この作品にはある。他の身近な人々の人生模様に重ねてそれがさらに迫ってくる鮮やかさが、この作品の美点であろう。

同人雑誌には優れた作品がある。これらをどうたくさん読者に普遍化するか。文芸作品の表現手段や出版による流通は、現在大きな岐路に差し掛かっている。優れた作品をどのようにすれば、多くの読者が手に取り、味わえるようにすることができるか——この課題をあらためて、七篇

第一七回まほろば賞の候補作品は、いつもより多く七作品であった。選考会では、掲載順に一作一作選考委員が各自意見を述べていったが、熱く語り合ったその時同様に、掲載順に評を記すことにする。

西田宣子氏の「白詰草」では、包みこむような文章が、高齢と言われる年齢に差し掛かる主人公、そして家族や友人、周りの人々の人間模様を、絵画に描かれる花になぞらえる。花はバラやユリのように華やかでも色鮮やかでもな

く、「田の畔や道端や河川敷などの地味な花」だ。主人公はそれをへそ曲がりだと言うが、清々しいほどに立派なそのこだわりは、本作を貫く一本の軸となっている。どこにもあるような場所でひっそりと咲くシロツメクサを描く姿に、この人生はなんてことのない、どこにでもある人生なのだということが、だからこそ尊いのだということが、堂々と示される。絵の中に詰め込まれた他の登場人物たちの生き方も見逃せない。友人・須美の夫である重一は、アマチュアの彼女とは異なり、プロの画家としては華々しい人生を送ってきた。でも彼にも、屋久島の巨大杉のように描ききれないものがある。「描けるだけ誠実に書けばいい。書けるだけ誠実に書けばいい」という言葉が、小説の書き手である著者自身へのエールのように残る。

五十嵐勉賞を受賞した寺本親平氏の「血の湯」には、圧倒的な「語り」の力を感じた。読み手の心の奥底の繊細な部分に、語りかけてくるような作品だ。奇形で生まれて亡くなった子らの後を追うように死んだ妻を、男はどこまでも追っていく。さながら、日本神話で、イザナギが、蛭子神を産み火神を産んで亡くなった妻のイザナミを、黄泉の国まで追っていったように。琵琶の音色に誘われて、男はどんどん深みへと進んでいく。宿を訪れ、湯に漬かり、地底湖に吸い込まれ、岩屋へとたどり着く。それらのすべては血に塗れており、男はそこで悲惨な自身の過去と対峙

なった。そこで主人公は裕福だった小堺の破滅を目の当たりにしていく。武雄が味わっている日々の味気なさや孤独は他者とのかわりを避けて生きてきた自分自身が選び取ったものだが、だからこそ生々しく突きつけられ、人生とは、高齢になることとは、どういふことなのか改めて考えさせられる作品だった。

今回の候補作には、ベツトを飼っている主人公が多かったが、この奇妙な共通点は、何かを意味しているのだろうか。河林満賞を受賞した萩原紫香氏の「青山墓地の桜」にも、ハナという犬が登場する。本作では、洗練された都会といったイメージの今の様子からは考えもつかない、戦後の麻布界隈の姿が、幼い女の子の視点でヴィヴィッドに描かれる。それはひと言で言えば、進駐軍の兵隊たちの姿であり、生きるために彼らを頼らざるを得なかった、女性たちの姿だ。女の子は、ハナの犬友達のペスの飼い主である「お姉さん」と親しくなるが、彼女もそんな女性たちの一人。最後に待ち受ける、絶望による悲劇はショッキングであるが、当時は珍しい話ではなかったのかもしれない。「あの人も戦死したのと同じことだよ」という、女の子の祖母の言葉が突き刺さる。戦争によって一番苦しんだのは、女性や子どもなどの弱者たちだ。そのか細い声を救い上げ、物語として伝えていくことは、小説の大切な役割である。

犬が出てくるもう一つの作品は、藤本あずさ氏の「浜辺

する。やがてその血は龍に姿を変えて天へと上っていく。あの世ともこの世ともつかない世界が、おどろおどろしくも幻想的に描かれた作品だった。これでもかというほど「血」が出てくるが、決して血なまぐさはない。琵琶の音の余韻が美しい。

「高齢者」の主人公が昔を振り返る、あるいは妻が亡くなる、というパターンが、今回の候補作には多かった。高齢になるということは、あの世への扉がぼんやりとでも見えてきているということだ。故に、主人公たちは過去を振り返り、避けてきた痛みと対峙したり、愛した人との別れを思い出したりするのもかもしれない。佐藤文平氏の「見返り」で桜井が受け取った葉書に記された旧友三國からのメッセージは、まるで過去からの呼び声のようだ。妻子に愛想をつかされ、天涯孤独となった三國は、衝撃的な秘密を桜井に告げる。一方で桜井の妻菊江は、秘密を墓場まで持っていた。過去への向き合い方としては、どちらが潔いのだろう。深く考えさせられる小説だ。

祖父江次郎氏の「枯野」の武雄も、妻を亡くした高齢者だ。娘もとうに家を出、古い家屋で住み着いた迷い猫の世話をしながら細々と年金で暮らしている。することもなく、近くのスーパーに出かけて長居し、半額の弁当を買う毎日だが、ある日かつて自分をいじめていた裕福な同級生小堺と再会し、酒を飲んだり競馬へ行ったりするように

のリス」だ。主人公はセラピー犬のリスと共に、ALSという難病を持つ真由美さんの家にボランティアに行くようになるが、目しか動かすことの出来ない真由美さんの生命力が強く胸を打つ。真由美さんは「ちようのうりよく」で自身の犬であるハッピーと話が出来る、リスとも「うみで」話したと言う。不思議なのは、真由美さんは、これらのことをベッドに備え付けのパソコンの画面に、目の動きでひらがなだけを打ち込んで表した。小説にも、その言葉通りの文字しか、記されていない。なのに、その限られた文字の間から、真由美さんの声がこぼれ出てくるような気がする。それが感動となつて押し寄せてくる。リスは、震災で飼い主を亡くした犬で、ショックでひどい状態だったのを主人公が引き取った。人間が受けたのと同じ恐怖や悲しみを、あの震災で動物たちも受けた。だから、皆で一緒に幸せになろう、なるべきだ。そのようなメッセージも併せて伝わる、特別賞受賞作品である。

最後に、まほろば賞を受賞したのは蒔田あお氏の「エリザベトを選んで」である。本作には、宗教と、たくさんの過去を抱えた女性、周りの人々の生き方が、二章に分けて重層的に描かれ、考えさせられる。第一章では、母と弟を心中で失い、高校卒業後精肉工場で働く主人公の珠季は、年下の相手と結婚するにあたり牧師から〈結婚講座〉を受けるが、聖書の言葉を学ぶたびに、過去の出来事が映像の

ように立ち現れる。言葉の一つ一つを噛みしめ、深く考える彼女の様子に、読み手も自身の過去を振り返りたくなる。第二章では、子を産んだ珠季が不治の病にかかる。若すぎる故の未熟さか、父親になり切れない夫は我が子を虐待してしまう。宗教を扱っているけれども、壮大な何かというよりは、ただ叫び出したいほどの痛みから解放されるために頼る場所としてそこに在る。彼女を心配し、就職を世話した高校の先生のように。やるせなさや痛々しさ、それでも生きるといふことの、強さと弱さが伝わってくる、受賞にふさわしい作品だ。

読めば読むほど愛着が湧く力作ばかりであった。



第17回まほろば賞選考会風景 2023.7.9 自由が丘「ハドル・スペース」にて

まほろば賞

「エリザベトを選んで」

(「白鴉」33号)



蒔田あお



蒔田あお

まきた あお

1973 大阪府吹田市生まれ
滋賀県大津市在住
2000 年京都市立芸術大学大学院修了後、高校中学校などで美術科の講師として教鞭を執る
大阪文学学校で小説の作法を習い、2010 頃から小説を書き始める
現在、同人誌『白鴉』会員 同人仲間と切磋琢磨しながら執筆活動中

まほろば賞 受賞の言葉 蒔田あお

小説を書くこうと思いついたときからずっと長編志向でした。自分が書くならば、人の一生にどっぷり浸かるような読書体験をしてもらいたいです。白鴉の同人の皆さんは、そんな面倒くさい私の志向にも付き合ってくださる批評精神の高い人たちです。

しかし、最近の時短の風潮——配信に合わせたイントロの短い楽曲や、映画・ドラマの倍速視聴——に心が折れかけていました。同人誌を作っても短編の方が感想をもらいやすく、考えを改めなければと思っていたところの〈まほろば賞〉受賞の連絡でした。ありがとうございます。まだ好きなように書いていいと言ってもらえたような気がしました。



特別賞 受賞の言葉 藤本あずさ

「まほろば賞」特別賞ありますがどうございます。大変うれしく光栄に存じます。十年近く前だと思いますが、こちらの銀華文学賞に応募し、最終選考に残ったという知らせを受けたことがあります。その時は受賞には至らなかつたので、その頃からは上達したのかな、と思うと感慨深いものがあります。

小説を本格的に書き始めたのはカルチャー教室でした。その後大阪文学学校に二年間お世話になりました。最初の教室でご指導いただいた故眉村卓先生はお辞めになる前に「あなたは書けば書くほど上手くなる。これから好きなようにお書きなさい」とおっしゃいました。その言葉を胸にこれからも書き続けてまいりたいと思っております。

まほろば賞
特別賞

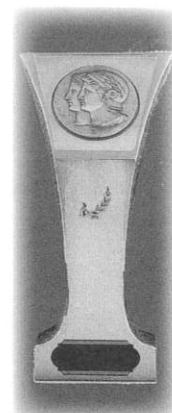
「浜辺のリズ」
（「黄色い潜水艦」75号）

藤本あずさ



藤本あずさ

ふじもと あずさ
1962 横浜生まれ
聖心女子大学外国語外国文学科卒
「黄色い潜水艦」同人
2019 「ガネーシャの娘」で新潮
新人賞最終選考
2023 春 上智大学グリーンフケア
課程入学



黄色い潜水艦
75

75



無慈悲なマリア	藤本あずさ
真の目ハレの日	島田勢津
娘の結婚	木下衣子
夏のカケラ	本手加
秋風屋ライブ	天見三郎
娘の申のすばるたちへ	宮川美津子
お気に入りの音楽と本	御橋博典
広瀬さん 追憶	島田勢津子・七千加

YELLOW SUBMARINE

まほろば賞

河林満賞

「青山墓地の桜」

〔楨45号〕



文学グループ・楳の会

河林満賞
受賞の言葉
萩原紫香

萩原紫香



萩原紫香

はぎわら しこう

1946 東京生まれ
頌栄女子学院高等科卒
専業主婦
ブログに小説を書いていま
したがYahoo!のブログが廃
止になり、昨年より千葉県
の「檣の会」同人会所属

この度は、河林満賞を頂き大変光栄に存じます。審査員の先生方に心より御礼申し上げます。特に河林満先生の「渇水」が映画化され注目を浴びている年に受賞出来たことを感謝でいっぱいです。拝読させて頂き三十年も経つ作品とおうかがいしましたが、古さを感じさせるどころか正に現代の貧困が生み出すストーリーで、リアルティに富み、重く心に残る作品だと感銘いたしました。

今回の私の作品は、どうしても書き残さなければいけないとの思いで書きました。ストーリーはフィクションですが、背景は実話です。戦後七十年以上経ち、あの当時を知っている人は年々少なくなり、私の記憶も曖昧なものになりました。ですが麻布には考えられないような環境があったことを、そして時代に翻弄されて、堕ちていくしか道がなかった彼女たちの明るさの根底にあった悲しみや虚無感を描いてみたかったです。

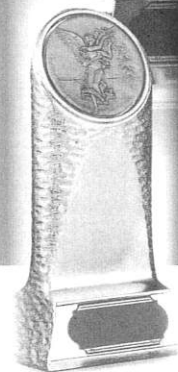
私は今までに創作を学ぶ機会もなく、自己流で書いてきました。そしてご縁があり「楨の会」に入会させて頂き、乾会長さんをはじめ皆さんに学ばせて頂いております。これからも心に残るような作品を書けるように精進していきたいと思っております。

まほろば賞

五十嵐勉賞

「血の湯」

（「繫」3号）



寺本親平



寺本親平

てらもと しんぺい

- 1943 金沢市生まれ
- 62 金沢桜丘高校卒業
- 74 文芸誌「渤海」同人
- 92 「遠州豆本の会」会員
- 2005 「卯辰」文学界上半期同人雑誌優秀作
- 同年 第33回泉鏡花記念金沢市民文学賞授賞
- 07 琵琶演奏者として「奏拳の会」を主宰 後進の指導に取り組み現在に至る
- 22 文芸誌「繫」（富山）同人

五十嵐勉賞

受賞の言葉

寺本親平

奇しくも平成二十三年に「幻燈一夜」という作品で同賞をいただいております、今回で二度目の受賞となりました。五十嵐編集長に前回の受賞作を評価されて以来、「あなたにはとんでもないものを書いてもらいたい」と励ましの言葉をいただけてきました。小生は、人間とその生活を書くのが至って苦手で、夢想的な作品へ傾きがちでしたが、小説を書くと言う行為は精神と肉体の土方作業だと思っています。しかしそのためには徹底した集中力と技術が必要なのは自明のことです。老いて手足が不自由になってから、それを補えぬと思ってしまうえば、「万事休す」です。這いつくばっても、「ご臨終です」と言われても、死神に口述筆記をさせたく、念じております。

まほろば賞

読者賞

「見返り」

（「季刊作家」100号）

佐藤文平



佐藤文平

さとう ぶんぺい

1947年生まれ
東京都足立区出身
「季刊作家」同人



読者賞

受賞の言葉

佐藤文平

この度は「読者賞」を頂き感謝します。また『季刊作家』が「奨励賞」と「百号賞」のダブル受賞となり、重ね重ねお礼を申し上げます。

山田洋次監督が彼の最新作を取り上げたテレビ番組の中で、『怪物』の是枝裕和監督に「近頃の映画は暗いものが多いね」とやや否定的な口調で話しかけるシーンがあって、返答に窮している是枝監督の様子が印象に残りました。その傾向は今回の「まほろば賞」の選考にも現れたように感じます。無論善し悪しの問題ではなく時代的な背景が反映された結果なのだろうと受け止めています。

今後とも「老驥（ろうき）（木偏付き）」に伏するも志は千里にあり」（曹操）の気概を忘れずに、犬猫のアシスト抜きでゴールを目指したいと思っています。



西田宣子

「白詰草」(「季刊午前」60号)



優秀賞

受賞の言葉

西田宣子

書くことは喜びです。毎日が輝きます。
「季刊午前」の月一回の例会での仲間たちとの励まし合いが、何よりの栄養になります。その上、同人誌の仲間たちだけでなく、思いがけない所で思いがけない方たちに読んでいただいて幸福です。今後もマイペースで描き続けたいと思います。ありがとうございます。

西田宣子

にしだ のぶこ

- 1945 年生まれ 福岡教育大学卒業
 1991 「青い魚」で福岡市市民芸術祭賞
 92 「マウス・ブルーダー」で九州芸術祭・福岡県地区優秀作
 94 同人誌「季刊午前」同人となる
 98 「チョウチンアンコウの宿命」で『文藝界』1998 年度上半期同人雑誌優秀作
 99 福岡市文学賞
 2004 「楽髪」で『文藝界』2004 年度上半期同人雑誌優秀作
 著書
 「チョウチンアンコウの宿命」(2013 梓書院)
 「おっぱい山」(2017 梓書院)
 「季刊文科セレクション②」(2019 / 7 人の共著「風の海」所収)
 ※「白詰草」は連作
 1. 「白狐」(季刊午前 59 号、主人公 35 歳、下園果林)
 2. 「風の海」(季刊文科、46 歳)
 3. 「白詰草」(季刊午前 60 号、75 歳)

読者賞について 読者から持ち点制の感想投票をいただき、その合計点数の最高点の作品に読者賞を贈ります。今回は投票金合計金額は 61200 円となりました。これ得票に従って配分し、各著者に贈らせていただきます。

全国同人雑誌振興会

まほろば賞

優秀賞

祖父江次郎

そぶえ じろう

- 1951 愛知県生まれ
 69 年高校卒業後
 2013 年まで地方公務員として就労
 92 文芸同人誌「季刊作家」同人
 2013 より 文芸同人誌「季刊作家」代表、現在に至る

このたびは、幸運にも最優秀読者賞の栄えある賞をいただき誠にありがとうございます。選考委員並びに読者の方々に感謝しております。
 これまで、五十余の小説作品を書いてまいりました。高邁な文学思想もなく、寂しい人生に少しでも潤いが得られればと我流で書き続けてきたにすぎません。
 受賞作品「枯野」については、以前から高浜虚子の「遠山に日の当たりたる枯野かな」という俳句が念頭にあって、この風景と自身の心象風景をからませた小説を書こうと企図した作品です。
 これを機に、さらに新しい作品に挑んで精進してまいりたいと考えております。

読者賞

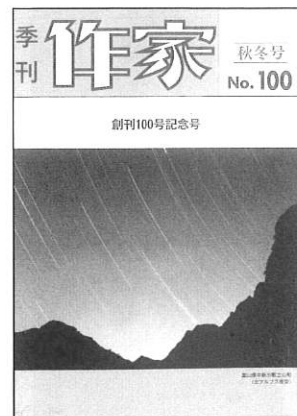
受賞の言葉

祖父江次郎

まほろば賞
読者賞

「枯野」(「季刊作家」100号)

祖父江次郎



●読者賞への御投票と賞金をお送り下さり、まことにありがとうございました。読者賞は下のよう
な結果となりましたので、ここに詳細をご報告させていただきます。

作品名 投票者	白詰草	血の湯	見返り	枯野	青山墓地 の桜	浜辺のリズ	エリザベト を選んで
木内是壽				30			
横田真紀子		20	20		20		
山田真己乃	10						10
渡辺恵理					20	10	
西田宏明			30	20		9	20
相田信子			30	30		10	
夏木宏子				20			30
外村晶子	10		20				
宮永瑛子		30		18			
渡辺 聡	10		8		30		
志村 譲		20			30	10	20
寒河江仁			10			10	18
山田まさ子	1	1	2	2		1	2
木村弥一		20					
計	31	91	120	120	100	50	100

各作品寸評

- 「白詰草」は連作なので、これだけで評価するのは無理なのでは…… (外村晶子)
- 「枯野」の文章力が素晴らしい (木内是壽)
- 「血の湯」は何か生命の根源に迫るような趣及に魅せられた。現代の日本には見られない表現は魅力。おどろおどろし世界の底に生命への深い愛がある。 (宮永瑛子)
- 「見返り」は、文章が滑らか。自然にその世界へ連れていってくれるわかりやすさがある。さりげない日常の中に人生の晩年にとんでもないことが襲ってくることを示している。誰でも起こり得ることかも。 (寒河江仁)
- 「青山墓地の桜」はよかった。米兵の愛人になる女性がとてもよく書けていて、いつまでも胸に残る。これから青山へ行ったら、この話を思い出さう。 (志村譲)
- 「浜辺のリズ」は、犬が生きていて、とてもいい。動物の心が人間にも溶け込んでくる。動物好きには、たまらない魅力。主人公の優しさが、よく伝わってくる。 (渡辺恵理)
- 「エリザベトを選んで」は、救いのない状況に、あえて救いを与えてところが、緊迫度を高めている。でも、宗教がなかったら、救われないのか。 (志村譲)

まほろば賞作品感想

今年のまほろば賞候補作は、切ないくらいテーマの作品が多かった。読者賞は「枯野」「エリザベトを選んで」のうちどちらかと思う。両作品とも書き出しから、ぐいとひきつける力量があった。

「白詰草」 西田宣子

エッセイ風の語り口の作品。たんたんとしているが洒脱であり、ことに主人公と夫とのやりとりがユーモアのセンスが感じられ、楽しい。

「元素の僕とすれ違ったとき、知らん顔して逃げるなよ」という夫の台詞は愛らしい。読者としては主人公の昔の恋人らしき、画家の峯信一郎との過去をききたいが。この小説は恋愛がメインではなく、主人公が老いて感じるさざ波のような人生観がテーマのため、恋の想い出への言及はない。

主人公の戸惑いや人生への達観は、多くの同世代女性に共感と呼ぶと思う。身近な素材から巧みに編み上げた作品。

白詰草や巨大杉がメインなので、冒頭の「草紅葉」はいらないのではないか。ここは説明的になってしまい、惜しい。

「血の湯」 寺本親平

金沢に語り部がいたのだと、わたしは独り言ちた。異形のものゝいる幻想世界が、琵琶の音にのせて語られている。想像力をもっとも掻き立てられた作品である。

浅野川にかかる橋の上を、からんからんと下駄を響かせて

歩く大柄な着物姿の男が思い浮かぶ。その後ろを異形の者たち、作中に登場する山棟蛇や蜥蜴、百足などが行列をなし、本作の言葉を使えば、「新たな血の盟を生みだし、不思議な光芒を放ちはじめ」ている。作者の琵琶楽師には常人にはみえない結果の先が見えるのではないか。

わたしがそんな想像を巡らせたのも、去年、泉鏡花の家の近く浅野川沿いを散歩したとき、「鏡花のあとに続く語り部はおらぬのか」と問いかけていたせいである。どうやらここ金沢にいたようだ。

おどろおどろしい描写が続くが、作品そのものは、天の川に浮かぶ船に水晶玉に眠る子供を連れた家族四人が乗り込み、琵琶の音に送られる所で、一枚の絵のように集約される。綺麗に収束されることをよしとするか、もうすこし不安定に終わるかを選ぶかは、好みの問題であらう。

「見返り」 佐藤文平

軽快な語り口である。松本清張を思わせる日常の中にひそむ人の悪意がテーマである。こわい、と感じたのは、わたしだけではあるまい。夫婦の秘密が死後に知られることはたまにあるので、現実的な出来事でもある。

同僚を陥れた三国は一方的な男であり、本来は墓にもっていかねばならない話を妻を失った元同僚に聞かせるのである。自分の気持ちをラクにするための告白である。自慢しなかったのかも知れない。同僚にアキた自分の女を押し付けたうえ、隠し通す良心もない。身勝手な男である。この

世に妻の過去など聞きたいものがあるだろうが。

聞かされた主人公は何も言い返せず、まことに情けない。読者としては腹立たしいが、同時にこうも感じた。騙した相手の気持ちにもほだされるような、この善意の人の情けなさ、作品に淡いペーソスを感じさせている、と。

余談だがわたしの父も、三国のようなことをやったのである。主人公に代わって殴ってやりたい。

作品の展開は演劇的であり、土下座のシーンも活気がある。小さな小屋の二人芝居で演じても似合いそう。

「青山墓地の桜」 萩原紫香

戦後の麻布を舞台に、米兵の愛人女性になっていた少女が主人公である。クッキーもくれるやさしいお姉さんについて意地悪をしよう、少女らしい感覚が繊細に書かれている。素晴らしいと思ったのは、吊るしたネクタイが「地面すれすれに垂れて」という表現である。このすれすれという形容詞が、このお姉さんが人生をすれすれに生きてきたとも取れるし、もう少し何か助けがあれば生きていかれたのかもしれないと思う主人公の少女の悔恨とも重なる。

甘やかでデリケートな語り口がこの作者の持ち味である。一九四六年生まれということで、この時代の少女ではなく、前の世代への果敢な挑戦と透明感のある色を応援したい。

「浜辺のリズ」 藤本あずさ

犬の反応を表すところに面白い表現が目についた。ハッピーが戻ってきて吠える場面。「私がオーケー出してやった

聖書の引用は少し多いかもしれない。ここも好みの別れるところであろう。

「枯野」 祖父江次郎

この作品もまた数行読んで、入賞と思わせた。文学性の高い作品である。ああ、だけど、祖父江さん、こんなにも民生委員を目的にしないで。元民生委員としては、作中の民生委員のタイプがいけないこともないが少数なので、忸怩たる思いにとらわれた。

枯野どころか、おおいに人生に未練のある主人公である。妻亡きあと、運動もかねてスーパーのベンチに座っている。わたしは常々、スーパーで座っている老け切っていない男たちが、時折ちらりとわたしの買った物袋を羨ましそうに見やると、不思議に思っていた。葱や大根ののぞいた袋である。その視線の意味をこの作品は教えてくれた。

表現では「イチヨウ畑がまるで骨だけになった老人たちの群れのように」という所が、ユーモアがある。その直後の太陽光のパネルも現代的な描写である。

尿意は少し多いかもしれない。

青森からきた出稼ぎの利那主義について描いた部分で「付けで飲むのも珍しくなかった」とある。まるでツケで飲むのが悪いことのように。ツケは庶民はあたり前、昔は普通の人は酒でも醤油でもツケでしょうが、と言いつ返しなくなった。しかしそんな細かい不満は吹き飛ばすほどの高次元の作品である。

んだから」というふうに犬が話しかけたとある。

主人公は、犬が好きで、ALSの患者さんの犬をボランティアで世話している。「気位の高い犬」は、主人公と飼い主の会話の意味を理解している。主人公の飼いだりズもまた人間の会話を解する。主人公がご主人の悪口など言うと、吠えるのである。

だが、問題発言もある夫についてはそれ以上の掘り下げはなく、主人公も結局聞き流す。難病という重い素材である。わたしがこの作品で気に入っているのは、犬も人間もいきものとして同等に扱われている点である。絵の中の裾の濡れたマリアを眺めて、愛犬の出自を思い浮かべる。心やさしい書き手である。作品全体は明るく、作風にも好感が持てる。

「エリザベトを選んで」 蒔田あお

最初の数行でこれは入賞するだろうと思った。小説らしい作りである。自殺した母と弟、過去を抱えた主人公はダメ男の陽平を好きになる。「人間らしい感情」を宿らせてくれた陽平もまた家出した母親のため両親の愛情を受けずに育った。ともに機能不全家族に育ち、典型的な依存と逆依存の関係性が描かれる。いきいきとした大阪弁が、リアリティをもたらし、した。

主人公は末期癌となり、赤ちゃんを抱えて切迫したとき、夫は頼りにならない。子供を児童施設に預けなければならぬ。この境涯を支えているのは、昔から面倒を見てくれてアトバイスをくれていた。先生や牧師、聖書である。

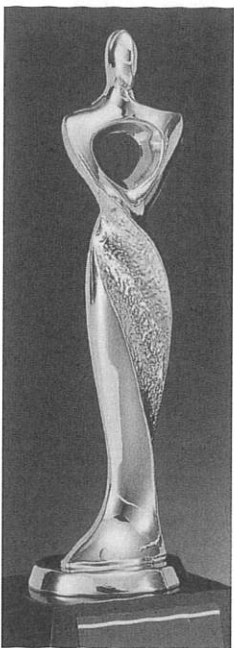
河林満賞の移設について

河林満文学賞は、二〇〇八年一月十九日脳出血で急逝した作家・河林満を偲び、その文学への情熱と創作にかける志を遺す意を込めて、御遺族の寄付を基に、二〇〇八年十二月十日に創設されたものです。故河林満の文学への熱情と響き合う、優れた小説作品・創作活動への顕彰とさせていただきます。

贈賞作品はこれまで銀華文学賞に応募される小説作品を対象にしましたが、銀華文学賞の一時中断以後まほろば賞のなかに移されることになりました。同人雑誌の優秀な作品に贈賞され、受賞者には賞状、記念品、賞金十万円が授与されます。(二〇二二年改訂)

この賞によって、たゆまず小説創作に情熱を燃やす方々に光を当てることができましたら幸いです。

作家集団「塊」／文芸思潮



浜辺のリズ

藤本あずさ

その日、わたしは車で真由美さんの家に向かっていた。六月のはじめで少し曇っていたが時折日が差していた。道路は渋滞していた。信号が青になってもその先がつかえているのか全く進まない。真由美さんの家までは歩いていけば二十分ほどだが、この分だともっとかかりそうだ。交差点の右側から来たトラックが無理に右折して完全に道を塞いでしまい、周りから一斉にクラクションを鳴らされている。

「大丈夫かな。間に合うかな」

ため息をつきながら左の助手席で丸くなっているリズにふれる。こげ茶色のリズの毛並みはなめらかで気持ちいい。

の気なしに連れて行つたしつけ教室の先生に「セラピー犬」を目指してみても、とすすめられたのだ。

セラピー犬の資格を取るためには飼い主も一緒にテストを受けなければならない。教室で訓練を積んでから当日を迎えたが、学生時代の試験の時のように緊張してお腹が痛くなった。リズは「伏せ」や「待て」というコマンドは得意だったが、「ヒール」という飼い主と一緒に歩くことが苦手だった。飼い主の前に出すぎてもいけないし、遅れてもだめ。何より飼い主の方を常に見る姿勢、アイコンタクトが要求される。足が短く地面に近いせいか、リズの視線はいつも下向きで、訓練の時もそれを何度も指摘された。注意をひくために名前を呼んだり、リードを少し引いたりするのだが、リズはあまり反応しなかった。短い足を小刻みに動かし、ただひたすら歩く姿は全き無の境地に入っているようにも見えた。

リズはぎりぎりの点数でなんとか合格し、わたしと一緒に介護施設やホスピス病棟を訪問するようになった。見知らぬ人の腕に抱かれても、どこを撫でられてもリズはほとんど無反応だった。唯一ごほうびのドッグビスケットをもらう時だけかすかに尾を振る。いつも伏し目がちで白いまつげが小さな影を作っている。リズにとってこの活動はあまり楽しいものではないのかもしれない。

しかしわたしにとっては飼い主冥利に尽きる活動だった。

い。撫でると気持ち少し落ち着く。リズは一瞬頭を起こしてわたしを見るが、すぐに腹の部分に長い鼻をうずめ元の体勢に戻る。リズはミニチュアダックスフントという犬種で推定八歳になる。推定というのは保護犬だったために正確な年齢がわからなかったからだ。歯の状態や毛並みなどから診察した獣医が大体五歳くらいじゃないかと言った。うちにきてもう三年になる。ダックスフントは元々は狩猟犬でウサギの穴に入れるようにという理由の品種改良で生まれた犬種だ。そのため獲物を見つけると飼い主に吠えて知らせる習性があり、よく吠える傾向があるが、リズはほとんど吠えない。何かに興奮することも少なく、それで何

「ペットを飼う」というのは個人の趣味の範疇だ。「家族の一員」だの「我が子のようなだ」とかいってもよしせんそれは飼い主個人の中で完結する。しかし他の人々とふれあい、心に癒しを与えることができる、というのは立派な社会貢献である。自分の犬が人の役に立っているという小さな誇りと自己満足のためにわたしは活動を続けていた。

真由美さんの家には予定時間を五分くらい過ぎて着いた。家の前には介護事業所の車と病院の車が二台びたりくっついて横付けされている。両側にも家が建ち並んでいるのもうこれ以上駐車するのは無理だ。わたしは近くの公園の横に車を停めてリズを下ろし、小走りて真由美さんの家に向かった。少しむしむしした空気がたちこめていた。空を見上げてみる。小さな雲のかげらたちが青空一面覆い尽くすように広がっていた。

「こんにちば」

引き戸を開けるとすぐにハッピーが駆け寄ってくる。同じミニチュアダックスだが、ハッピーはクリーム色の毛並みでリズに比べると鼻が少し短い。ウエットティッシュで足を拭いてリズを上がり框にのせると、ハッピーはいつものように入念にリズをチェックする。まず顎のあたりを嗅ぎ、それから尻尾のあたりをフンフンと嗅ぐ。リズはさねるがまじじつとしている。一分くらい嗅ぎまわってから「よ

し、次は」というように初めてわたしの顔を見る。わたしのことはそんなにチェックしない。靴下やジーンパンの裾を少し嗅いだだけですぐに身をひるがえす。「入ってよし」というサインだ。

玄関をあがってすぐ右側に真由美さんの居室がある。いつもは開いているドアが閉まっているので、わたしとリズはドアの前で少し待っていた。

「あ、今ちょっと取り込んでから待ってて」

ドアが少し開いて介護士の山村さんが顔を出して言うのに頷いた。遅れて着いたのが気になっていたもので、少しほっとした。前にもこんなことがあった。その時は排泄ケアをするから外に出ていて、と言われた。待っていると一度は廊下の奥に行ったハッピーが戻ってきて一度だけ吠えた。「あたしがOK出してやったんだからサッサと上がりなさいよ」

と言っているみたいで思わず笑ってしまった。しゃがんでハッピーの目を見ながら「おいで」と言ってみる。途端に眉はないけれど眉間にしわを寄せたみたいな顔になる。

「気安くするんじゃないわよ」

ハッピーはくぎを刺すようにもう一度吠えた。

「ひかるさん、入って」

戸が開いて居室に入ると、真由美さんが角度のついたベッドの上でこちらを向いていた。ストライプの前開きの

真由美さんはリズを見てから再びプラスチック板に視線を移す。真由美さんの目は休むことなく動いている。

「リズちゃんって上品な顔立ちよね。名前も女優さんみたい」

ハッピーにリードをつけているそばで看護師の宗木さんが言う。

「ああ、そうですね。確かエリザベス・テラーがそう呼ばれてましたよね」

「ひかるさんがつけたんじゃないの？ 誰が名前つけたの？ お子さん？」

「いえ、うち、子どもいないんで」

わたしは曖昧に笑いながら「じゃあ行こうか？ ハッピー」と話しかけるが、ハッピーはまたもや「あんたに言われる筋合いはないわ」と言わんばかりにふん、とあからさまに顔をそむける。やれやれ、とんだ女王様なこと、と心の中でつぶやきながらわたしは玄関で靴を履いた。

でもハッピーがいなければわたしはここにはいなかっただろう。真由美さんの家にボランティアに行くことになったきっかけを作ったのはこの気位の高い犬だった。半年前、リズを連れてホスピス病棟を訪問した時、病院ボランティアの女性が声をかけて来た。

「あのね、あなたと同じダックスを飼ってる人がいるんだけど」

ブラウスを着て、下半身には薄いピンク地のタオルケットが掛けてある。十畳ほどの広さの部屋で、ベッドの向こうにテーブルとキッチンがある。

山村さんが真由美さんの視線の先にある透明なプラスチック板の上に表示されたひらがなを読み取りながら言う。「きてくださってありがとうございます」

「いいえ、どういたしまして。お加減はいかがですか？」

「だいじょうぶ」

「お散歩行けそうですか？」

「はい」

「じゃあハッピーちゃんにもリードつけますね」

真由美さんのベッドのそばの壁にかけてある赤い花のアクセサリーのついたリードに手を伸ばす。壁には一枚、絵がかかっている。水色のひだのよった衣に青い瞳の聖母マリアが手を合わせて祈っている絵だ。赤や青、緑色にきらめく星々が王冠のように頭のまわりに浮いている。が、マリアの表情は冷たく取り澄ましていてその目はうつろだ。きれいだが優しさやあたたかみが感じられない、そんな絵だった。

山村さんがまたプラスチック板を見ながら言う。

「りずちゃんがみたい」

わたしはリズを真由美さんの目の高さに抱えあげた。

「かわいい」

その人の話はこうだった。ALSの女性でダックスを飼っている人がいる。とにかく犬が大好きで発病前は保護犬ボランティアをしていたこともある。時々外へ散歩に行くのだが、犬をうまく扱える人がいないので困っている。犬が好きな人、飼っている人にボランティアに来てもらえないか、という話だった。

「今は私が行ってるんだけどね、わんちゃん全然いうことを聞いてくれないの。リードつけても引つ張つたらすぐ抵抗してね。おやつ見せてもだめだし、どうしたらいいのかわからなくて」

「いいですよ。伺います」

わたしは深く考えず即答した。

ALS。筋萎縮性側索硬化症。

こういう病気が世の中にあるということは知っていた。テレビのドキュメンタリー番組かなにかでベッドに横たわり、喉に人工呼吸器を装着した患者が介護者の掲げるプラスチック板のひらがなを目でたどる様子も見たことがあった。にもかかわらず、真由美さんに初めて会った時、わたしは激しく動揺した。その場ではかるうじて耐えたが、帰りの車の中でこみあげてきて道に寄せて停めた車内で泣いた。自分と同じ四十代の女性だったこともショックだったし、知識だけで病気をことをわかったような気になっていた自分の幼さを憎みさえした。

わたしは実際何も知らなかった。眼球以外は指一本すら自分の意志では動かすことができない、ということがどういうことなのか。どんなに願っても真由美さんは自分の飼い犬を腕に抱くことも撫でることもできない。声を出しておしゃべりすることもできない。普通に見えて、聞こえて、ものごとを考えることはできないのに、である。それはまるで手足を縛られ、さるぐつわを噛まされているかのようなそう、終わりのなき拷問のように見えた。

真由美さん自身がどう感じているかはわからない。けれど自分には荷が重すぎる。ボランテアは断ろうと思っていた矢先に山村さんから電話をもらった。「真由美さん、とても喜んでいましたよ」というその言葉で気持ちが揺らいだ。今思うとあれは訪問を続けてほしい山村さんの作戦だったのかもしれない。でもとにかくわたしはその時、悩んだあげくに訪問を続けるという決断をした。

来た時は晴れていたのに外に出ると雲行きが少々怪しくなっていた。山村さんともう一人の介護士の女性が折り畳み式のストレッチャーを外で組み立てる。それから三人がかりで真由美さんと人工呼吸器を運び、そつとストレッチャーに横たえる。頭の後ろにタオルを当ててプラスチック板を見せ、「もう少し上がいい?」「もう少し右ね」などと高さや位置を微調整する。もうひとりがタオルケットを

中におしろい花が咲いていた。二頭とも雌なので雄犬のように足を上げて放尿したりはしない。少しがんで用を足すのだが、何しろ足が短いので小か大かの見極めが難しい。でも二頭連れて散歩させるのは思っていたほど難しくはなかった。以前しつけ教室の先生が「犬は群れで生活する生き物だから本当は多頭飼いが正解なんですよ」と言っていたことを思い出す。

「あ、わんわん!」

二歳くらいの子どもが犬を見て公園から飛び出て来た。あとを追ってきた母親の顔色が真由美さんの姿を見てもみる変わる。

「すみません」

母親は子どもの手を強くひきながら去っていった。その気持ちはわかる。見てはいけなかったのだ、ときつとあの母親は思っている。真由美さんのような人のことをじろじろ見ては失礼だと。きつとそう思っている。そして少し恐怖も感じている。よくわからないものは怖い。

そうじゃないんですよ。真由美さんはALSという病氣なだけです。普通に「こんにち。なんか曇ってきましたねえ」なんて言ってくれたらいいんですよ。そういう言葉を含めてのみ込んでわたしは大きめの声で、

「はいはい、またね」

と子どもに向かって手を振った。子どもは手をひかれな

胸下あたりからかける。

「じゃあ行きましょうか。ひかるさん、ゆっくりね」

宗木さんの言葉にうなずき、ハッピーとリズが真由美さんの視界に入るように少し前を歩く。ハッピーは最初は嫌がって首をふったりして抵抗するが、何度かリードをひくと「仕方ないわね」というように歩き始める。それもリズよりも必ず前を歩こうとする。リズの方はそんなハッピーの様子にまるで頓着していない。いつものように「無の境地」で伏し目がちに四本の足をせわしなく動かしている。一番初めのお散歩の時、ハッピーは頑として歩かなかった。「あんたみたいな人には絶対に従わない」という強い意志を目に宿っていた。それで次の時にリズを連れて行き、一緒に歩く練習をした。リズのことはお気に召したようで「この子とだったら歩いてやってもいいわ」と折れてくれた。一行は真由美さんの家から三百メートルほどのところにある公園を目指して歩いた。公園は滑り台やブランコなどの遊具がある場所は平地なのだが、残り半分は元々小高い丘だった地形を生かして背の高い木がうっそうと茂る森になっている。森の中に道が作られているのだが、舗装もされていないのでわたし達は公園のまわりをぐるりと一周する。ゆっくり歩いて二十分くらいの散歩コースだ。

ハッピーは公園の柵からはみ出た下草の匂いを嗅ぐために時々立ち止まる。リズも同じところの匂いを嗅ぐ。柵の

がら、少しだけ首をひねって反応した。

もうすぐ一周というところでぽつぽつと雨が降ってきた。

「お天気もつと思っただけだな」

「ちょっとだけ急ぐね。揺れるけどごめんね」

山村さんたちは幅の狭いストレッチャーから真由美さんが落ちてしまわないように両側をガードしながら、小さな神輿を担ぐように息を合わせて少し速足で進む。わたしもしつこく草の匂いを嗅いでいるハッピーのリードを少し強めに引いた。ハッピーは不満そうに上目遣いでわたしを睨んだ。

雨がひどくならないうちに無事に家に戻り、ハッピーとリズの体を拭いて水を飲ませていると山村さんの携帯が鳴った。山村さんは「そうなんです」「はいはい」と受け答えをしていたが通話を終えると少し曇った顔で、「ご主人、渋滞に巻き込まれちゃったみたいでちょっと遅れますって」

真由美さんのご主人には二回くらい会ったことがある。色が白くほっそりした体形で物静かな人だ。詳しく事情を聞いたことはないが、山村さんたちが訪問している間は息抜きに外出することになっているようだった。逆に言えばその時以外はずっと家にいて真由美さんを見守っているのだろうか。仕事をしているのかどうかも知らなかった。山村さんは宗木さんとなにやら声を落として相談していたが、

それが終わるとわたしのところに来た。

「ひかるさん、この後予定ある？」

「いえ、ないですけど」

わたしは週に三回、訪問ヘルパーの仕事をしていたが、この日は仕事のない日だった。

「ほんとはだめなことなんだけどね。お願いがあるんだけど」

山村さんは言いにくそうに切り出した。山村さんたちは次の訪問先の予定があり、もう出発しなければならぬのだが、真由美さんをひとりにはできない。真由美さんのご主人はもうすぐ帰ってくると話していたのでそれまで真由美さんのそばにいてくれないか、というのである。

「だめかしら？」

「いいですよ」

一抹の不安はあったが少しの時間なら、と思ってわたしは承諾した。

「ごめんなさいね。そんなことはないと思うんだけど万が一のことがあったらすぐ私の携帯に連絡してね」

わたしの仕事のことを山村さんは知っている。もしかしたらそれでわたしになら頼めると思ったのかもしれない。山村さんたちは真由美さんの人工呼吸器などをチェックしてからバタバタと出ていった。たちまち部屋は静寂に包まれた。聞こえるのはサーツという外の雨の音とシュツ

シュツと規則正しい感覚で動く人工呼吸器の音だけだった。真由美さんはベッドに備え付けてあるパソコンにぼつぼつと字を打ち込んでいる。目の動きで文字入力が可能で機能ががついているが、プラスチック板で伝えるよりは時間がかかる。

わたしは緊張していた。画面に浮き上がる文字を恐れていた。できれば見たくなかった。

（死にたいの。人工呼吸器外してください）

もしそんなのが現れたらどうしよう、とドキドキしていた。そんな風に言われたらなんと云えばいいのだろうか。考えただけで震えがくる。しかし画面に現れたのは、

（こーひーでものんでください）

あやうく座っていた椅子から滑り落ちそうになった。ほっとしたと同時に自分のばかげた妄想に呆れた。テレビドラマの見すぎだ。わたしは頭をかいだ。

以前、奥のキッチンでご主人がコーヒーを作ってくれたことがある。その時に「僕がいけない時も自由に飲んでください」と言われたことがあった。真由美さんはそれを知って言ってくれたのだろう。でもわたしは首を振った。

「大丈夫です。ご主人、帰られるまでなので」

（たぶん、おそくなる）

その次に浮かび上がった文字にわたしは少し驚いた。

（ばちんこ まけると おそいの）

ちやうの。『文句言うのか』って」

その時ふいにハッピーが吠えた。わたしは驚いて振り向いたが、吠えた理由はわからなかった。

（はつびーは しゅじんのこと すきな の だからおこっている）

「悪口だってわかったんですね。すごいなあ」

わたしは感心してハッピーを見た。ハッピーは「どうだ」という顔で尻尾を振った。真由美さんのご主人はきつと優しい人なのだろう。ハッピーはそれを知っている。ベッドの向かいの壁に引き出し付きのチェストがおいてあって、その上には結婚式の写真が飾ってある。ウェディングドレス姿の真由美さんと白いタキシードを着て少し照れくさそうなご主人が写っている。

画面に再び文字が現れた。

（りずちゃんはおこること ある）

「どうかしら。怒っていてもわからないかも。あまり興奮することもないから」

（どうやって ひかるさんちに きたの）

「リズですか？ ええと実は……」

わたしは少し迷ってから打ち明けた。

「リズはね、あの大震災の被災犬なんです。飼主の人ははっきりわからないんですけど、多分お亡くなりになっていて……保護されて施設にいたんですよ。震災から二年く

「ああ、そういうことなんですか」

道が渋滞しているというのは嘘なのか。そして真由美さんはそれを見抜いているのだ。

（しゅじんは いいひと でもはらたつ）

小さい「やゆよ」や「つ」が入力しにくいらしいが意味はわかった。「腹立つ」という言葉に親近感がわいた。

「そうですね。わたしもね、ありますよ。主人に腹立つこと。例えばね、買い物に行って荷物もってくれるのはいいんですけど、それをね、帰ったら玄関にバンと置いて、それっきりなの。冷凍食品とかお刺身とか入っても知らん顔。

せめて冷蔵庫の前まで持って行ってくればいいのに。あとトイレでね、トイレットペーパー使いきってもそのままなの。取り換えてくれないし紙芯も捨ててくれない。あとから入るわたしが困るってこと全然想像してない。ちょっと考えればわかることでしょう？ 腹立ちますねえ」

べらべらしゃべりながらも、わたしは軽い自己嫌悪に陥っていた。何を言っているんだろう。わたしは病气じゃないのに。わたしは手も足も口も動くのに。それなのにこんなくだらない愚痴を言っている真由美さん、呆れているんじゃないか。でも画面に現れたのは、

（わかる）

わたしはその文字を見てほっとした。

「男の人ってほんと鈍感ですよ。でも言うへとへそ曲げ

らいたった頃です。そういう子たちが保護されているって
いうのがある時ネットで見たんですけど、心に引くかっ
て何日たっても忘れられなくて。それで主人に相談したら
『いいよ』って言うてくれたんで、わたし、ひとりで宮城
県まで行ったんです。でもその時はリズを引き取るとは決
めていなくて」

わたしは少し息をついてから続けた。

「わたしも主人も犬種とかにこだわりなかったんで、どの
子でもいいって言うてたんです。ただ住んでるマンション
の規定が五キロまでの小型犬だったからそれは伝えてあり
ました。施設のボランティアさんを見てから決めてくれ
らしいって、そう言うてくれたんですけど……」

小さなブレハブの中に置かれたたぐさんのケージ。犬の
吠え声とケージをかきむしる姿は今も忘れられない。「出
してくれ」「ここから出してくれ」と叫んでいるように思
えた。全部の子を出してやりたい。引き取ってやりたい。
でもそれはできない。夫とは一頭だけの約束だった。胸が
張り裂けそうだった。いつまでたってもわたしは選べな
かった。どうしてもできなかった。それでボランティアさ
んに尋ねた。

「この中で最後まで残りそうなのはいますか？」

ボランティアさんが指さしたのがリズだった。リズは
ケージの床に顎をつけたまま微動だにしていなかった。そ

の目はうつろでどこも見ていないように見えた。

「病気ですか？」

その問いにボランティアさんは首を振った。

「どこも悪くはないんです。多分精神的にショックを受け
たんだと思います。なにしろ強い揺れで驚いて心臓が止
まった子もいたらしいですから。その上飼い主さんともは
ぐれてしまつて。食欲もなくて痩せてしまつたんです。こ
の子は首輪に名札がついていたんですよ」

ボランティアさんはケージから出して腕に抱き、首輪を
見せてくれた。赤い首輪に金属のハート型の小さなプレ
ーが付いていてそこに「LIZ」という刻印があった。そ
れを見た時、この名前ごと、この子を引き取ろうと決めた。
初めて腕に抱いた時、リズは小刻みに震えていた。

「大丈夫、もう大丈夫だよ」

わたしは痩せてぐつぐつした背中をなでながら何度も繰
り返した。リズの抱えている恐怖、悲しみ、孤独はわたし
が想像するよりずっと大きかっただろう。小さな体でよく
耐えたね、えらかったね。これからはわたしがあなたを守
るから。一緒に帰ろう。一緒に幸せになろう。その時心
の中でかけた言葉を思い出す。

(よかつた　ほんとに　よかつた)

「でもね、本当にこれで良かったのか、いまだにわたしに
はわからないんです」

わたしは誰にも言ったことのない本心を真由美さんに打
ち明けた。

「犬はね、飼い主のことを決して忘れないですって。リ
ズもきっとそうです。いつもいつも寂しそうな顔をしてま
す。会いたいんだろうなって、元の飼い主さんに会いた
いんだろうなってそう思うんです」

(りずちゃん　しあわせよ　わたし　わかる)

「そうですか？」

(いぬのきもちがわかる　ちようのうりよく)

「超能力ですか？　真由美さん、すごい」

(びようきになつてから　わかるようになった)

超能力なんて普段は信じていなかったが、ただの思いこ
みだとは思えなかった。真由美さんは重い病氣と引き換え
に犬と気持ちを通わせることができる能力を得た。もし神
様がいるなら、それはほんのひとかけらの慈悲なのではな
いか。

(はつぴーは　りずちゃんが好き　ひかるさんも好き)

「そうですか。うれしいわ」

ハッピーを見るとどこか照れくさそうにしていってわたし
は思わず笑ってしまった。

(ゆめで　りずちゃんと　うみではなした)

「海で」という言葉にぎくりとした。リズが保護された
のは海のそばだったという。津波にさらわれた飼い主を捜

していたのかもしれないとボランティアさんは言っていた。
(ひかるさんが好き　いつしよにおでかけ　たのしい　そ
う　はなした)

おん！　という鳴き声に反応して体がびくりとふるえた。
ハッピーの声ではない。もつと野太い声。振り向くとリズ
が尾を振りながらまっすぐわたしを見ていた。わたしは声
も出なかった。リズはステップを踏むように短い前足を交
互に上げ下げしながらもう一度「おん！」と吠えた。それ
はあたかも「本当よ！」と言っているかのようだった。

その晩、わたしはいつになく気持ちが高ぶっていた。誰
かに聞いてほしくて帰宅した夫をつかまえて真由美さんの
この話をした。けれど夫の返答を聞いて急速に気が抜けて
しぼんでしまった

「そりゃあ妄想だろ？　そんな風に妄想しなきゃやってら
れないもんな。そんなひどい病氣、救われないだろ」

夫はスマホをいじりながらわたしの方を見もしないで
言った。喉がいがいがして言葉が出てこない。妄想なんか
じゃない。本当のことだよ。わたしにはわかったの。でも
それらの言葉が夫の心には届くとは思えなかった。言葉が
話せるのに通じないもどかしさや情けなさで、わたしは
いっぺんに憂鬱な気分になった。

「どう思う？」

床に腹ばいになってリズの目線になって聞いてみる。リズはわたしの方をちらと見たが、すぐに床に視線を戻す。すっきりいつものリズだった。

「あの時はしゃべりそうだったのにね」

わたしはリズの頭をそっと撫でながら言った。夫との溝は年々深くなるような気がする。なんでも理詰めで考え、自分の興味のあることにしかまともに反応しない。折角話題をふっても大体いつも今日のように適当にあしらわれるだけで心が通じない。共感できなくてもせめて受け止めてほしいのに。真由美さんと会話ができてわたしはうれしかった。その気持ちだけでもわかってほしかったのに。

「いい人ではあるんだけどな」

そう言うってから真由美さんも同じようなことを言っていたのを思い出して苦笑した。夫は真面目だし穏やかで、わたしに手をあげたことだって一度もない。でも腹が立つ時は立つのだ。真由美さんと同感だ。もっというろいろ話をしたい。きつと夫よりわかりあえるんじゃないか。わたしはわけもなくそう思った。

「大体救われないってなによ？ 救われるってなによ？」

夫の言葉の最後が特に気に入らなかった。真由美さんは病氣だから救われないのか。治ったら救われるのか。地震で死んだ人たちは救われなくて生き残った人たちは救われたのか。自分たちはどうなのか。地震にもあわず、病氣で

逆だから最初はちょっと大変だけど。慣れれば大丈夫よ。やってみよう。

わたしが頷くと山村さんは、

「じゃあ今度特訓しましょう」

「大丈夫？ 山村さん厳しいわよ。しごかれるわよ？」

と宗木さんが笑い、わたしもつられて笑った。真由美さんの方を見たが、わたし達の方は見ていなかった。真由美さんは壁のマリアの絵を見ていた。心なしか少し潤んだような瞳で一心に見つめている。心の中で祈りをささげているのかもしれない。

その時、ふと絵の中のマリアの衣の裾が水に浸かっていることに気づいた。はっとしてよく見ると背景に波も描かれている。ああ、ここは浜辺だったのか。もしかしたらリズも保護された時、こんな場所にいたのかもしれない。短い足を潮水で濡らしながらリズは何を見ていたのだろう。この絵のマリアのようにただじっと虚空を見つめていたんじゃないだろうか。なぜかそんな気がした。

今年最初の蟬の声が窓の外から聞こえてきた。

ないから救われているのか。

「そんなわけないじゃない」

そう呟くわたしの横でリズは目を閉じたまま、全身をふくらませてからふうっと深いため息をついた。

次に真由美さんを訪問したのはひと月後のことだった。よく晴れていた。その前の数日は大雨だったので暑さもそれほどではなかった。梅雨明けが近いと朝のニュースで言っていた。

道路は相変わらず渋滞していた。交差点の手前の薬局から出ようとしている車がいってドライバーとふと目が合った。おない年くらいの女性だった。その時、前の車が動き出したのでハンドルの前に手を出して合図すると、女性は何度も頭を下げながらわたしの車の前に入り、二回ハザードランプを点滅させた。なんだかあたたかい気持ちになつて、ちらとリズの方を見ると、リズは耳のあたりを後ろ脚で数回かいてから大あくびをした。

真由美さんは今日は水色のシャツを着ていた。わたしはいつものようにプラスチック板を掲げている山村さんに聞いた。

「山村さん、それ難しいですか？」

「これ？ そうね、裏側から見るとひらがなの向きが全部



ふじもと あずさ

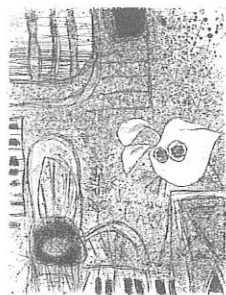
藤本あずさ

1962 横浜生まれ
聖心女子大学外国語外国文学科卒
「黄色い潜水艦」同人
2019 「ガネーシャの娘」で新潮新人賞最終選考
2023 春 上智大学グリーンケア課程入学



黄色い潜水艦

75



無慈悲なマリア
妻の日ハレの日
娘の結婚
夏のカケラ
萩茶屋ライブ
嵐のHINOKIのすばるたちへ
お気に入りの音楽と本
広岡一さん 追悼

藤本あずさ
島田勢津子
木下衣代
本千加子
天見三郎
宮川英美子
御館博光
島田勢津子・本千加子

YELLOW SUBMARINE

「黄色い潜水艦」75号より転載

黄色い潜水艦 兵庫県

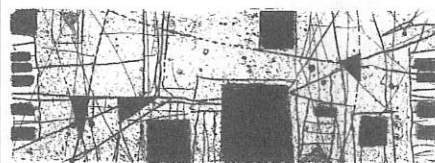
作家川崎彰彦が創刊

一九八四(昭和五九)年、作家川崎彰彦が創刊。以後三九年、現在七五号。川崎が大阪文学学校(以下文校)の事務局やチューターをしていたクラスの周辺でメンバーを集めて創刊された『燃える河馬』(七〇年・八二年)の後続誌として出された。八九年、川崎が二度目の脳内出血で倒れ身体不自由になったので一三号から二〇号までを同人が補助しつつ発行。二一号から三〇号は松廣勇・平井義英。松廣氏が病没のため以後島田・三輪正道が編集を引き継いだ。

島田は、川崎の同人誌評を機に三号から参加した。川崎と文校で熱い季節を過ごした同人たちの輪に入るのには臆するものがあつたが、何人か顔見知りもいて縁と繋がりを頼りに飛び込んでいった。

『黄色い潜水艦』は以前とは違う趣で発行されていた。川崎は『河馬』の同人たちの自由気ままな才能を愛しながらも、編集者としては年一回の締め切りも守られないことに業を煮やしていたのだ。『潜水艦』は年二回発行を厳守するとし、出せないものは見切り発車という方針に変えたのである。新たに文校機関誌で活躍の愛知哲、大阪文学

黄色い潜水艦



『風の神の祭』
『わが風土抄』とノア前史
スイスのラッパ
CINEMA
『くるりのこと』
高見克彦さん追悼特集

編集 純平
発行 島田三郎
島田三郎

YELLOW SUBMARINE 50

学校賞を受賞した四宮秀二(のちに通教部のチューター)や谷口緑らの参加もあった。

川崎の身辺の問題や健康状態さえ良ければ、雑誌はもつと発展してもおかしくないメンバーだった。川崎はその頃、学生アパートで筆一本の暮らしに不如意を抱えていた。一度脳出血で倒れたが酒は手離さない。すでに右手は使えなくなり左手で執筆。葉書のやり取りにも時間を費やしただろうし、十分なコミュニケーションは取れなかった。もともとシャイで、酒が入らなければ会話は苦手だったのか電話もなかった。自分のスタイルを確立していた人は別だが、私も含めて新同人たちは作品に対するアドバイスもな



22.5 久しぶりに奈良大和郡山で集合

く、手探り状態の中で書けなくなっていた。

意気盛んだった頃を知らないのが残念である。文校の教室で合評会があり、そこで批評を聞くのが唯一の勉強の場だった。四国から来ていた四宮や、新人の谷口の顔もあった。彼女のことを川崎は後に「ちゃんと育てられなかった」と悔いていた。合評後は飲み会へと突入。谷町の「すかんぽ」だったと思うが、以前からのメンバーも顔を出してさながら同窓会の雰囲気だ。とにかく酒量がすごい。酒が入ると聞きたくない言葉も出てくる。慣れないうちは何を言われるか怖い気がした。

やがて三輪正道が川崎ファンとして合流してきて、当時はまだ四十代だった私たちに三十一号からの編集が任せられた。その川崎の器の大きさに守られて発行を続けられたのだと思う。いつも権力とか権威、俗っぽさは程遠い所にいた方だった。怒られたことは一度もない。

私は行き詰ったまま編集者だから仕方なく書き続けている。まさか師匠に原稿を催促する日が来るとは。同人は皆私たちより先輩で年上だった。せいぜい締め切り前に電話をかけて、やりとりするくらい。合評では忌憚のない意見を言うようにしたが、出来ることは少なかった。三輪は校正を担当して何かと協力があった。名刺と雑誌を抱えて、一緒にあちこち配って歩いたものだ。

川崎は車椅子になっても一本指でワープロを叩き続けて作



川崎彰彦のお墓の前で「夜がらす忌」お花見があるので毎春お参り

品を発表。著書も刊行されたが、長い闘病の時間が二〇一〇年に終わる。以後亡くなった二月ではなく四月に『夜がらす忌』（代表昨『夜がらすの記』に因）として、有志で公募参り。生前からあったお花見を兼ねて郡山城に集まっている。同人だけでなく川崎の読者、縁のある方の集いだ。紆余曲折はありながらも、とにかく年に二回は発行してきた。三輪亡き後は画面編集者として天見三郎の力も大きい。私は合評会場のことなど雑用係であったが、発送、会計も担当者がいて助けられた。校正刷りが届いた時の嬉しさ、それを各自に分けて原稿とともに同人に発送する。一日でも早く届けたいと、逸る気持ちで昼休みに郵便局に走った。雑誌が届いた時の高揚感。指定した色が上手く行ったのか、ミスはないだろうか。そんな思いは色褪せずに、七三号まで四三冊を出して、年一回の発行に切り替えた。頼りにしてきた長老の広岡一も亡くなり、創刊号からの同人は宮川美美子だけになった。

ここ数年は知友の会や、私が大阪文学学校のチューターをさせて頂いているので卒業後に参加の人も出てきて、若い世代の活気が雑誌にも良い影響を与えてくれていると思う。新人、藤本あずさの転載も有難く、励みにさせて頂きたい。

（写真は写っていない同人もいるし、読者や仲間も写っています）
（島田勢津子）

同人紹介（会員も数名）

天見三郎 第6回神戸ナビール文学賞受賞
木下衣代 第12回 神戸エルマール文学賞 佳作賞受賞
島田勢津子 第3回 神戸エルマール文学賞 佳作賞受賞
御館博光 批評誌『流砂』に執筆
宮川美美子『民主文学』に転載。著書『リレハンメル灯の本千加子』『みずぐき賞』を受賞。著書に『水輪の記憶』
藤本あずさ「新潮新人賞」最終選考



「黄色い潜水艦」

発行人 宮川美美子 制作 天見三郎
編集人・連絡先 島田勢津子
setu926yama@gmail.com
〒665・0852 兵庫県宝塚市
売布4丁目3・30・3314



第7回健友館文学賞大賞受賞!

「彼らは何を語りたかったのか」

タイ・カンボジア国境の難民村。許された希望で風靡げになった数多くの死体が数息していた。

健友館

カンボジア難民の悲劇を描く
本体価格 1,700 円
御注文はアジア文化社まで



「源氏物語」に託された宿望!

幼くして安倍晴明の弟子となり卓抜な能力を身に着けた香子。無式部・皇后彰子と時応じて機政の回復と莊園整理を目指し、四人の娘を四代の天皇の中宮とし皇子を天皇に擢る権勢を握る藤原家長と繰り返される宿願の機軸。

書き下ろし
長篇小説

2024年NHK大河ドラマ「光る君へ」関連本!

エリザベトを選んで

蒔田あお

第一章

1

脂肪で覆われた肉塊を、男たちが冷凍庫へ運びはじめる。土屋珠季はミートスライサーを動かしながら、トレイの束から残りを目測した。就業時間終了十五分前。十七時まで仕事している女性は珠季と同僚の佳子だけで、あとはすべて男性従業員だ。丸源食品株式会社で働く女性のほとんどがパートタイマーで、昼休憩に入ると同時に退勤してしまう。ミートスライサーの後片付けは、ここ十年以上、珠季の仕事になっている。

「今晚、先輩らと飲みに行ってくるわ」

「わかった」

珠季はそつげなく返事をする、布巾を持って隣の調理台に移動した。陽平は水を撒いたところをデッキブラシで擦りはじめる。二人の様子を見ていた佳子が、珠季の傍らへやってきた。

「土屋さんて、仕事中はバリバリ陽平くんと距離置くなあ」

佳子は台に布巾を滑らせながら、珠季の持つ布巾を小突いてくる。

「公私混同するのが嫌なだけ。長年あんたを見てて、そうせなあかんと思っただけや」

佳子は入社して十二年になるが、ここの社員と二回結婚して二回別れている。結婚にまで至らなかった恋愛も周囲にダダ漏れ状態だったが、社内で噂になるのを楽しんでいるところがあった。

「着替え済んだら応接室に来てって、工場長が」

珠季は眉を大げさにひそめて、工場長との不倫を自分から匂わせてどうする、と無言で釘を刺した。

佳子は上目遣いに珠季を見る。「土屋さん、ほんま、最近綺麗になりはったわ」

珠季はコートとマフラーを小脇に抱え、応接室へ向かった。更衣室でスマホをいじって時間を潰したので、社内に

精肉トレイがパレットごと運ばれたあと、清掃作業がはじまった。

珠季が調理台をアルコール消毒していると、上の階から来栖陽平がデッキブラシを持って下りてきた。細身だが肩幅がやたらと広く、エプロンを巻いた腰から肩にかけて逆三角形になっている。この会社の男たちが長年勤務していると布袋さんさながらに腹が出てくるので、陽平の骨ばったシルエットを見るにつけ、珠季は誇らしい気持ちになる。

陽平は着けていたマスクを顎に引っ掛け、珠季に話しかけてきた。

は管理職以外ほとんど残っていない。

「土屋珠季です」

名乗ってから応接室のドアをノックすると、「どうぞ。なかへ入って」と工場長ではない野太い声が返ってきた。

ドアをあけると、窓際に工場長が立っていた。手前の茶色いソファに社長が座っている。社長に会うのは数カ月ぶりのことだった。十年来おなじみの青のビンストライプのスーツを着ている。以前見たときよりも、髪が薄くなったように思える。

「源田社長。ご無沙汰しております」

「土屋くん、聞いたで。あんたもとうとう結婚するねんな」

工場長がにやにやしながら、社長の隣に腰掛けた。前に乗り出して、珠季を指差す。

「うちは一生独りで生きていきますー、て息巻いてた土屋くんがやで、若手のイケメンをいつの間にか捕まえたってんで、ワシ、腰抜かしてしまいましたわ。十九歳も年下でっせー」

大声でしゃべる工場長に珠季は毎回辟易していたが、社長の手前、嫌味のひとつも返すことができない。

珠季が無言で立ち尽くしていると、社長が「二人で話したいんで、あんたは出とってくれる？」と工場長に命じた。工場長が退室すると、社長は「とりあえず、座り」と珠

季に腰掛けるよう促した。

「あの人から聞いてんけど、あんた、結婚式せえへんねんてな」

「失礼します」珠季はおずおずと、社長の差し向かいに腰掛ける。「いやもう、お恥ずかしい限りなんです。今でさえ、冷やかされてばかりなのに、式挙げるやなんて、とんでもないです」

「なんで？ あんたも相手の子も初婚やる。うちの社員の前だけで挙げたら、今さら恥ずかしいも糞もないやんか」

「私が見なさんの前で、白無垢とか純白ドレスを着るっちゅうのが恥ずかしいんです。もう四十になるんで」

「そんなになるかあ。うちに来たときは十八やったもんなあ」

「お陰様で、まともな人生送らせてもらってます」

「大塚先生には報告したか？ 高校の、担任の」

珠季は大きくかぶりを振った。「いえ。せんとこかなって思ってたくらいで」

「それは礼儀に反するで。あんたの人生を一番心配しとった方やで」

「そうですね。最近は何賀状出すくらいしか挨拶してませんし、ちゃんと報告させてもらいます」

社長はうんうんとうなずきながら背広の内ポケットから白い封筒を抜き出した。ローテーブルの上を指先で滑らせ

「珠季、ごめんなさい」

そのあとすぐ刑事に自宅へ連れ戻された。家宅捜査はじまっていて、めったに会わない叔母が来ており、その場に立ち会っていた。

「姉さんと正利に会えた？」

「お母さんに触ろうとしたら、あかんって言われた」

「司法解剖が済んでからでないと、触れることもできひんのよ」

「お母さんが書いた遺書を見せてもらった。裕子さんの字で間違いないですかって訊かれた」

「自殺に見せかけた犯罪ってこともあり得るからね」

数日後、二人の遺体が死体検案書と共に自宅へ帰ってきた。死因は自殺。車内で練炭が焚かれていて、地元の人に発見されたときには、燃焼開始から二時間以上経過していたらしい。正利の体内からは睡眠薬が検出された、のとこのだった。

珠季に差し出す。

「花嫁衣装代として、これ使ってくれ。遠慮は要らんで。社長命令や」

封筒の厚みからして十万円ほど入っていそうだった。珠季は肩と首を収縮させ、封筒を指先で突き返す。

「こっちにご恩があるだけなのに、さらにいただく訳には参りません。それなりに自前で体裁は整えますから大丈夫です」

「ほな、これは相手の子にやるわ。二十そこそこやったら給料も安いし、体裁整えたくてもキツイやろ」

珠季は繰り返し頭をさげ、恐縮している体で応接室をあとにした。日本人の結婚は身内の願望や体裁が表立って面倒臭いと聞いてはいたけれども、身内のいない自分や陽平にも多少はあるのだな、とため息をついた。

生徒会活動に勤しんでいた珠季の元に担任の大塚がやってきたのは、高校三年生の七月のことだった。完全下校まであと三十分だったが、身支度してすぐに出来るようにと告げられた。母と弟が、とある山中で意識不明の状態で見えなかったという。

警察署で、珠季は二人の遺体と対面することになった。顔にかかった白い布が警察の人間によって取り払われる。珠季は二人とも眠っているようにしか見え、思わず手を

きた。弟・正利はじつとしていられない性分で、小学生のころから授業中に立ち歩き、教室を抜け出すといった問題行動を繰り返し、そのたびに裕子は学校から呼び出されていた。また、正利は思ったことをすぐ口に出す。自分のことは棚にあげて他人には厳しく、級友と衝突することもしばしばあった。

裕子はただただ正利に振り回されていた。練炭自殺は、倒産に追い込まれていた家業と子育てに疲弊しきった裕子の衝動的な行動だとみなされた。

この二週間前、正利が中学校の美術の時間に彫刻刀を持って教室内を歩き回っていたところ、誤って級友の腕に刺すという事件を起こしていた。故意ではなかったことと、その日のうちに裕子が正利を連れて被害者の家へ赴き謝罪したことから、大きな揉め事には発展しなかった。しかし二日前にも、正利は別の事件を起こしていた。

体育での水泳の授業中、女子生徒の下着が盗難に遭った。正利は授業を見学していた唯一の男子生徒で、授業後に別室で聞き取り調査を受けることになったが、やっていないと主張した。その日の晩、息子から聞き取り調査の話を聞いた裕子は憤慨し、夜遅くにもかかわらず担任に電話をかけた。

うちの子はそそかしい面がありますし、学校にはたびたびご迷惑をかけています。だからといって、性犯罪の容

疑までかけるのはおかしいんじゃないですか。同年代の子より、中身が幼いってことは先生もよくご存知じゃないですか。あの子は性的な興味なんて、まったく芽生えておりませんから。

裕子は日ごろの鬱憤を晴らすかのように、ねちねちと一時間以上抗議した。裕子が電話口で話す内容から、弟の中学校で何があったのか、珠季は察した。そして、抗議の電話が済んだあと、珠季は裕子を自室へ招き、ある懸念を口にした。

「正利は、性的なことに興味がないことないで。むしろ最近、酷いと思う」

珠季は、ある日脱衣所で脱いだ下着が洗濯物として干されていないことに気づき、家じゅうを調べたことがあったと告白した。さきほどまで顔を紅潮させていた裕子の頬が、どどん青ざめていった。

「それで、あんたの下着は出てきたん？」

「出てきた。正利の勉強机の鍵がかかる抽斗に入ってた。

私、鍵の場所は昔から知ってたし確認した」

そのあとすぐに、裕子は正利の部屋へ入っていった。激しい物音のあと、二人の声が聞こえてきた。怒声。慟哭。声を荒げているのは裕子のほうだった。いったんは容疑を否認した正利だったから、机の抽斗から見知らぬ女性用下着が出てきて、申し開きもできなかったのだろう。

て、バイク通勤している陽平は、そこで飲んだあとと転がり込んでくるのだ。

珠季が洗い物をしていると、ズッザッザと階段を駆けあがってくる足音がした。陽平だとすぐわかる。ポケットに手をつ込み、やや猫背な姿勢で、軽ジョウギングするように歩くのだ。ブー、ブー、ブーと長めにブザーを押してくる。「はい。すぐ出るから」と珠季が叫んでも、ドアを開けるまで押し続ける。

ドアを開けるや否や、陽平は珠季に抱きついてきた。「タマちゃん。会いたかったー」

「待つて待つて、ドア閉めて」と珠季が訴えると、陽平は片足をうしろに伸ばし、甲に引っ掛けて手前へ蹴るように閉めた。そして、珠季に回した腕をさらに強く締めつけてくる。

「俺、帰りしな、タマちゃんタマちゃんって言うってん」

珠季は抱きしめられながら、目尻が下がり、とろけそうな表情になっていることを自覚する。身体を支えている芯が熱を帯び、赤くなっていただれ落ち、皮膚の内側から瑞々しく生まれ変わっていくのがわかる。会社での陽平は甘える素振りなんてまったく見せないが、二人きりの空間になると途端に幼児に豹変する。

陽平との距離が縮まったのは、会社の駐輪場で、陽平のバイクの停め方を珠季が注意したことがきっかけだった。陽平は、仕事ぶりは雑だがサボっている者がいると所構わ

珠季は高校生になってから、自分の感情をかき乱されぬよう、母と弟のやり取りを静観するようになっていた。弟は弟、私は私だと。自分の下着が盗まれたことを裕子に教えたのも、身内としてというよりは、女性としての正義を貫きたかったからかもしれない。

葬式から一月ほどは、珠季は自宅で暮していたが、大塚の計らいで、児童養護施設から高校へ通うことになった。一度、叔母が会いに来て、住んでいた家と会社は他人の手に渡ったことを教えてくれた。パブルが弾けて、銀行は弱い者を切り捨てて、貸したものを回収することしか考えてないと憤っていたが、珠季は自分の罪が少し軽くなった気がしたのだった。

丸源食品株式会社は、身内を失った珠季が高校卒業後から世話になってきた会社だ。入社して三年ほどは、担任の大塚がときどき様子を見に来たので、珠季に起こった不幸を知る人間も多かった。今となつては社長など一部の上層部しかそのことを知らない。パートも正社員も、業務に入れば、白い作業服にキャップ、エプロンに長靴姿になってしまふ。珠季が独身の古株であることすら、この会社では目立たずにきていたのだ。

陽平は夜の九時過ぎに珠季のアパートへやってきた。丸源食品社員の行きつけの居酒屋が徒歩十分のところにあつ

ず非難するような、自分が見えていない若者だった。珠季が指摘するとムツとしたので、目上の人間にその態度はないだろうと説教する流れになったが、陽平はあとで素直に謝ってきた。「本気で怒られて嬉しかった」と言われた。「また、俺があかんことしたら言うてほしい」とも。それから仕事で、気になる点があれば指摘をし、見本として丁寧なやつてみせたりすると、だんだん珠季に懐いてきた。そんな状態が半年ほど続いたのち、好きだと告白されたのだった。最初は冗談半分に受け止めていた珠季だったが、彼の生い立ちを聞くと合点がいった。六歳のときに母親が家を出ていき、父親は日中、祖父母に息子を預けて勤めに出ていたが、やがて別の女性と結婚し、陽平は祖父母に預けられたまま青年になっていた。気の毒な孫に対して、祖父母は腫れ物に触るよう接してきたのだろう。大人から真剣に怒られる経験がないまま、陽平は生きてきたのだった。

陽平が自分に求めているのは親から受けられなかった愛情であることは百も承知だった。が、四十になるまで誰一人として内側に入れてこなかったため、いったん外れてしまった籬はもう元には戻せない。人の、男性の温もりは想像以上に心地がよく、珠季は普通の、男女の恋愛や結婚でなくとも全然構わないと、その場、そのときの感情に身を任せるようになっていた。

陽平が唇を吸ってきた。舌同士で確かめる肉厚とザラッ

とした質感。体温と分泌液の生々しい交換。何度求められても素敵だった。はじめて陽平とキスしたとき、自分は家電製品か何かになりかけていて、あと少しで手遅れになっていた、助かった、と思った。血がめぐり生き返ったような、人間らしい感情が宿ったような感覚があった。離れた唇が糸を引いていく。そんな淫らな有り様を受け入れていくのが性行為なのだと、珠季は一つ一つ学習していく。

「全然、飲んでへんやん」

「うん。早くタマちゃんそこ行きたかったし」

陽平がアルコールを控えてまでやり遂げようとしていることは、きっと今日も無理だと想像する。体が上へ上へと逃げていき、痛い、やめて、と自分は懇願するだろう。申し訳なささと恥ずかしさで立場が逆転してしまう前に、言っておかなければと珠季は退勤前の出来事を打ち明けた。

「今日、社長に言われてん。結婚式挙げるって。結婚式の資金にしろって、お金渡されそうになった」

「俺はなんでもええよ。タマちゃんがしたいようにしよ」

「ネットでいろいろ調べてんけど、ウエディングプランナーに企画してもらったりするのは嫌や」

陽平が再びキスしてきた。「冷凍のうどんか何かない？」

俺、飲んでもいいひんけど、食べてもいいひんねん」

飲み会のあと、陽平は自宅で食べ直すことが多い。それ

なりに食べてはいるのだが、人が大勢いるところでは食べた気がしないのだと言う。珠季は数分で素うどんを用意した。美味しそうに食べる陽平を見て、自分には気を許しているのだと満たされた気持ちになる。

空になったどんぶり鉢を前にして、珠季は陽平の膝に座った。ちよつとちよつと今乗られるとうどんが逆流する、と陽平は笑う。構わず珠季は食卓に置いていたスマホを引き寄せ、陽平に見えるようにじりじりはじめる。あらかじめチェックしておいたサイトを開け、挙式のためだけに造られた教会はやめようとか、身内だけでやるとしても教会にはこだわろうとか、案を出してみる。陽平は胸やら腰を触ってくるだけで、ろくに画面を見ようとしない。

「北摂晴ヶ丘教会っていう有名建築家がデザインした教会があるねんけど、ここはどうやる。コンクリートでできたモダンな建物で、建物全体が十字架の形しとって」

「ええよ」

「ここ、普通の教会やねん。式は挙げさせてもらえるけど、何回か結婚講座での受けなあかんねんて。日曜日の礼拝も何回か行つたほうがええねんて」

「えーっ」陽平は軽くのけ反り、珠季の顔を煙たげに見た。

「それ、めっちゃ面倒くさいやん」

「本来、教会で式を挙げるのって、そういうものかなって思う」

師が陽平を駐輪場まで案内していた。黒い詰襟の服を身につけた牧師は、陽平の影みたいに立っている。

「珠季さん。ここへ来られるのははじめてですか？」

牧師の声はブザー音のように異質だった。機械の振動を喉の動きで変化させたような、人の声とは明らかに異なる音声。その声を自然に受け入れている体で、珠季は笑顔をつくった。

「写真では拝見していたのですが、来たのは今日がはじめてです。こんな住宅地のなかにひっそりとある教会だったんですね」

「ええ、もっと大きい教会だと思われている方は多いですよ」牧師はうしろを指差して、「結婚講座は隣の日曜学校でさせてもらいますけど、宜しいですか？」と声のポリュウムをあげた。

狭い敷地に二つの建物を両立させるためなのか、コンクリート壁の隙間は人ひとり通れるほどで、そこを縫うようにして三人は日曜学校へと移動した。厳かな印象の礼拝堂とはうってかわって、日曜学校は床も会衆席もメープル色の板材が使われ、温かく穏やかな雰囲気包まれている。会衆席の一つに聖書やプリント類が置いてあり、そこへ座るよう牧師は案内した。

「お二人を最初見たとき、親子かなと思いました」

「そりゃそうですよね。私、彼より十九も年上なんです」

「俺、キリスト教徒ちゃうし。そもそも宗教信じてないし」
「私のしたいようにさせてくれるって言うたやん」
「そやけど」
「明日、とりあえず電話して聞いてみる。それから真剣に考えて」

2

コンクリート壁伝いになかへ進んでいくと、自然光に照らされた祭壇が目飛び込んできた。三角形の敷地の礼拝堂。鋭角にすばまっていく祭壇の空間が、上からの光でやたらと眩い。祭壇の下手には牧師が立つところ、説教席がある。礼拝堂のなかを見回してみた。会衆席も床板も黒い板材で、光を印象深くしている。振り返るとパイプオルガンが鈍く光っていた。

珠季は祭壇までの中央通路を歩いていった。ヴァージンロードになるこの通路。端まで来て見上げる。巨大な十字型の吹き抜けは、十字架の正面だけがガラス張りで、そこから採光しているのだった。住宅街にある小さな教会だが、世界中の建築家が見学に訪れるという。

「タマちゃん！」入口から陽平が現れた。「日曜学校のほうへ来てって」

陽平のバイクでここへやってきたのだが、掘込という牧

珠季が自嘲気味に言う、「年の差というよりも」と牧師は二人を交互に眺めた。「珠季さんが陽平さんに話している様子がね、母親と息子みたいだったんです。見た目や実年齢はあまり関係ありません。ここには、いろんなカッブルが式を挙げに来られます。最高で三十五歳差つていうのがありましたよ。国籍が違うカッブルも結構おります」牧師がノートを開き、珠季と陽平は新しいページにそれぞれ、氏名、生年月日、住所を書かされた。牧師の手下にある分厚い聖書の下に、「結婚講座一日目」と題したプリントが用意されている。一日目ということは、二日目もあるということだ。珠季は抵抗なかったが、陽平が痺れを切らせてしまうことは容易に想像できた。

「今日は、結婚講座一日目ということで」牧師がプリントを二人に渡し、読み上げていく。

イエスはこれらの言葉を語り終えると、ガリラヤを去り、ヨルダン川の向こう側のユダヤ地方に行かれた。大勢の群衆が従った。イエスはそこで人々の病気をいやされた。

フアリサイ派の人々が近寄り、イエスを試そうとして、「何か理由があれば、夫が妻を離縁することは、律法に適っているでしょうか」と言った。イエスはお答えになった。「あなたたちは読んだことがないのか。創造

主は初めから人を男と女とお造りになった。」そして、こうも言われた。「それゆえ、人は父母を離れてその妻と結ばれ、二人は一体となる。だから、二人はもはや別々ではなく、一体である。従って、神が結び合わせてくださったものを、人は離してはならない。」

(マタイによる福音書 十九章一〜六節)

「陽平さん、珠季さん。結婚するということは一体となることで、神が結び合わせてくださるものなのです。この教会で式を挙げるからには、お互いの手を離さないでいてくださいね」

珠季と陽平は「はい」と力強く答える。机の下で陽平が珠季の手を握ってきた。珠季はぎゅっと握り返す。

それから牧師は抑揚のない電子音声で、神について説いていった。手を繋いでいるので、陽平の貧乏ゆすりや小刻みに伝わってくる。牧師は陽平と差しで座っているのので、膝がぶつからないかと珠季はひやひやした。

最後に『コリントの信徒への手紙——十三章』のプリントを渡された。この一節について、次の結婚講座までに考えてくるよう宿題を出された。

愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない。礼を失せず、自分の利益を求めず、

だった。

メニューを広げたとき、一番シンブルなラーメンを珠季は指差した。「チャーシューは嫌いか?」と大塚。好きだと答えると、彼はチャーシュー麺の大盛りと普通を一杯ずつ頼んだ。珠季が無然としていると、「施設に帰ってからも飯食べなあかんの?」と聞いてきた。

「いえ。バイトの日は賄い食べて帰りますし、問題ないです」

珠季は二つコップを並べて、水滴のついたボットから水を注いだ。

「ありがとさん。なあ、土屋。今日行った会社やったら、どこがええ? 僕は最初に行ったオムライスの専門店がええと思ってんだけど」

従業員の女性の割合が一番高い会社であった。全国に何店舗かあるようで、見せてもらった社員の表彰式や研修会の写真から、和気藹々とした職場であることは珠季も感じ取っていた。だからこそ選択肢にはなかった。

麺を食べ終え、スープをどうしようかと考えていると「無理に飲まんでもええねんで」と大塚は言ってきた。

「先生。先生からは私ってどう見えてますか?」

「どうって? 真面目な生徒やと思ってるけど」

「——真面目な生徒やから、こういうことが起きると思いますか?」

人と深く関わらず、誰も傷つけずに生きていきたい。誰からも愛を求めないし、自分も愛することはない、と思うようになった高校時代を珠季は振り返る。

八月の蒸し暑い最中、大塚と一緒に事業所見学に行った。その日は丸源食品も含めて三社まわり、最後の会社を出たときには空が藤色に染まっていた。帰宅ラッシュのなか、駅の券売機へ向かおうとする珠季の肩を大塚が叩いた。「土屋。ラーメンでも食べていくか」

駅近くにラーメン屋があった。「今日、電車賃しか持つてきてないです」と珠季が言う、「先生の奢りに決まってるやんか」と大塚は笑う。バイトがあると言おうとしたが、大塚はラーメン屋のほうへ歩きはじめていた。大塚は生徒の話にじっくり耳を傾ける教員だったが、肉親を失ったからの珠季には強引に物事を進めようとする。珠季に引け目を感じさせる隙を与えないほど、即決し行動に移すの

大塚は数秒考えていたが、「土屋の身の上に起こったことは、性格とは関係ないやろう」と言った。

「関係ないことないです。私は、真面目の皮をかぶった悪魔です」

「悪魔」と言葉にしてみると、抑えていたものが溢れてきて喉がぐっと締め付けられる。コップの水に手を伸ばす。そう、自分は悪魔だ。《真面目》は自分を護る仮面であって、人に囁みつく牙を隠すこともできる。本来、自分は優しくない人間なのだ。貧乏が嫌だった。八つ当たりしてくる母親が嫌だった。八つ当たりされるような隙を見せるものかと思つてきた。裕子は出て行つた父親の悪口を一緒に言つて言つてあげると、口が滑らかになつた。簡単に同志になれる人の悪口。だんだんそれも自分を貶めていくだけのように思えてきて、その話題になると自室に籠るようになった。自分もつと高潔に生きていたい人間なんだと一線を引きたかつたのだ。だから勉強を頑張る。生徒会活動を頑張る。正しくないことは正しくないと声を上げることをためらわれない。裕子を追い詰めたのは、直前のあの出来事だけではない。

「なあ、土屋。今は、何でも何でつて考えがちやろうし、自分のせいにしたほうが楽やと思うのかもしらんけど、ちゃうで。先生をもつと頼つてくれてもええんやで」

「ありがとうございます。でも先生が私の先生でいるのも、

大塚のコップに水を注いだ。「どうやって乗り越えたんですか？」

「——宗教や」

「え？」

「芸能人とかも結構入つて新興宗教や。自分が選んだというより、そのときのタイミングでそれに会つたというか。なんでもよかつた訳やないけど、軸になる何かがないと乗り越えられなかつた。それはハッキリしてる」大塚は水を一口飲んで、周囲を見回した。「そろそろ出よか。話が長なるさかい」

ラーメン屋を出たあと、珠季と大塚は電車に乗らずに二駅ほど歩いた。宗教の勧誘がはじまるのかと思つていたが、大塚はその新興宗教の名前は出さなかつた。

「人間って空洞のまま成長していくと思うねん」大塚は抽象的な持論を訥々と話しはじめる。「大学時代な、僕はバイトと体育会系のサークルで満たされとつたけど、二十人？ いや十人に一人くらいかな、そんな風に流されて生きていってもええのかつて思ひよるんやな、そういうやつは心理学とかにはまつてな、下宿に籠もりだして、病んで留年して大学を辞めていった。自分を見つめ直して空洞であることに気付いたら、心が保たへんようになるんやろな」

「はあ」

この話の着地点はどこにあるのだらうと思ひながらも珠

あと半年ほどしかありませんよ」

「卒業してから僕は土屋の先生やで」

「——そんなん言うても、二、三年の話でしょ。ずっと、てことないでしょ。でも、私がいろいろ思い返して苦しくなるのは、たぶん一生続いてく。死ぬまでずっと」

大塚はメニユースタンドをじつと見つめていた。自分のこういうところが裕子を追い詰めたのだ、と珠季は思う。大人が答えない窮する場面をつくつてしまふのは昔からで、責任負えないことを軽々しく口にしてしまつていいんですか、と問い質したい気持ちが湧いてくるのだった。

「僕は先生や、僕に頼つたらええとか言うてるけど、ほんまは普通の、むしろ弱い人間やつたりする。悪夢を思い出してどうにもできひんこと、僕にもあるよ。新卒のとき、公立の中学校でいきなり担任やることになつてな、学級崩壊引き起こしてしもた。友だち感覚で、ある女子生徒の癖を指摘してたらな、傷ついたつて親が訴えてきた。女子生徒同志結託して僕の授業ボイコットしたり、手におえへんようにもなつた。一年でその学校は辞めることになつたけど、別の学校へ行つても教壇に立つのが怖くなつてな。滝汗かいて無意識にガタガタ震えてくるねんで。生徒の顔が全部同じに見えてくるし、あんだだけやりたかつた職業なのに、自分には無理やねんなど挫折しかけた」

「先生はそこから」珠季はポットに手を伸ばし、空になつ

季は相槌を打つ。

「どの時代の人間も、基本中身は空洞なんやと思うよ。僕の親の世代やつたら安保闘争があつてな、学生たちが国の体制に怒りを感じて生きていた。怒りで空洞を埋めて生きていた時代やつてん、そのときは」

「先生は、空洞を宗教の教えで埋めたということですか？」
「そうや。自分のしでかしたことで生き辛くなつてしもたから、正しい心の在り方を示してくれるもんが欲しかつたらんやろけど、そのときそのとき、人間は空洞を満たしながら生きてるんやで。誰かを悪者にして疎外するのも、お国のために死ねたら本望だと戦場へ行くのも、結局は一緒や」

大塚の喩え話が、いかにも社会科の教員だなあと珠季は思う。

「はじめや正義感で空洞を満たすのも有りつてことですか？」

「そうは言うてへんねんけどな。土屋はいま、自分のせいで肉親を失つたと思ひはじめてる。でも、その考えに苛まれながら生きていくつて絶対に潰れてしまふと思うねんだつて、人間の自身は空洞やねんから。できれば別の何かで満たそうとして欲しいな。僕はな、土屋の就職先に空洞を満たせる何かがあればええと願つてるんや」

「それがオムライス屋ということですか？」

「店内も制服も綺麗で福利厚生もしっかりしとったし、具体的なステップアップがあるように見えたんやけど」

「先生、私、オムライス屋は向いてないと思います」

「今日行ったところがピンと来なかったんなら、もう一回求人情報見てみるか」

「二つ目に行った精肉加工会社、丸源食品にします」

「あそこでええんか？ 女性社員はほとんどおらんかったやろ」

「キャップ被ってマスクしたら、男も女も関係ないでしょ」

「でもなあ。表向き性別関係なく募集はしとつても、男しか採用せえへん会社もあるで。あそこは肉の塊運んだりパレット操作したりで、肉体労働が多いんとちゃうか」

「心の空洞に気付かへんくらい、身体を酷使した作業をひたすらやりたいんです。誰ともしやべりたくないし、ステップアップもしたくない」

「何で？」

「人と関わって、あのとき自分がああ言ったからあの人を傷つけたとか思うのが嫌なんです。ずっと静かに、誰にも迷惑かけずに生きていたい」

「それは逃げや。あ、いや、自分から宗教に逃げたって話をしたのに、何を言うてるんやろやうな僕は。どうも教師って職業は、上からものを言うてしまいがちやわ。土屋が今はそうしたいんやったらそうし」

「愛について、お二人は何を感じましたか？」

「最後がようわからなかったです」と陽平は宿題のプリントを出す。「完璧なもの、部分的なものの違いが、わかるような、わからんような」

教師は、陽平が置いたプリントの隣に大学ノートを広げた。

「日本語で言う〈愛〉という言葉ですが、キリスト教ではニュアンスによって言い方が異なります」

教師は万年筆でさらさらとノートにメモ書きする。最初に綴ったのが〈愛〉という単語。そこから三本矢印を付けて、その先に〈エロス〉〈フィリア〉〈アガペー〉と書き足した。「陽平さん。この〈エロス〉という言葉ですが、どんな愛かわかりますか？」

教師からの質問に、陽平は横にいる珠季にちらちらと視線を送った。「エッチなこと？ スケベ心で合ってますか？」

知性の足りない若者全開で答える陽平だったが、珠季も意味的にはほぼ同じと捉えて少し恥じ入る。教師はプザー音のような笑い声を立てた。

「そういう意味も含まれていますが、ここではもっと広義な意味だと捉えてください。お二人とも、お互いにどういうところに惹かれて、結婚を決意されたのですか？」

教師はまず、陽平に手を差し向ける。それを受けて、陽

このあと大塚は言ったのだ。
「人の考えは変わっていくし、もし変えなくなったら、最初の考えに縛られることはないねんで」

珠季は『コリントの信徒への手紙——十三章』を読んで、今から実践すべきは凝り固まった自分の考えを変えることだと思った。高校時代からの生きる方針を解き放つときが来たのかもしれない。

誰かと共に生きていく選択をしたからには〈愛〉にまつわる耐性が必要になってくるということ。陽平がいくら子どもっぽい青年であっても、忍耐強く、自分の利益を求めずに信じ続ける。それを今からやっていく。信仰とはほど遠い理由で決めた結婚式の会場だったが、これも人と共に生きる人生の一つの段階に差し掛かったということ。珠季はそう解釈した。

二回目の結婚講座も、堀込教師は日曜学校で聖書やプリントを用意して待っていた。珠季が「よろしくお願いします」と挨拶すると、横にいた陽平もべこりと頭を下げた。教師は「コリントの信徒への手紙——十三章」を読んだ

「はい」と二人は声を揃えた。学校の三者懇談に訪れた保護者と子どもみただと珠季は思う。

平は珠季の顔から腰のあたりまで眺め回した。

「彼女、俺のこと、いつでも気にかけてくれとて。それでかな、好きやーって思うようになりました」

「ほう」教師は身を乗り出す。

「俺、六歳のときに母親と別れたんですけど、口うるさくあれこれ言われてた印象だけが残ってて。彼女、えっと、タマちゃんと出会ったとき、うろ覚えの母親の印象と重なったんです」

「珠季さんは、あなたにとって母親代わりとも言えるんですね」

「わかりません。母親ってどんなものなのか、そもそもよく知らないんで」

教師は、教会の隣に自宅があり、そこで猫を飼っている話を唐突にはじめた。その猫はもともと野良猫で、信徒さんから巡り巡って教師の家にやってきたのだと言う。

「ペペと名付けましたが、うちに来たとき、もうこんなに大きかったんです」と両手で炊飯器ぐらいの大きさを示す。

「一歳、いや、それ以上だったかもしれない。そんなに大きいと、人間に懐きやしません。ただ、お腹が空くと、餌を欲しさに擦り寄っては来ます。そうした生理的欲求で相手を求めること、下心ありきの愛、これがエロスです」

教師は二人の顔を見て、理解したかどうか窺っている。

「飼いはじめて数年はそんな感じだったのですが、二年前、

私が咽頭がんで入院しましてね。それで今、こんな声になっているわけですが、一カ月ぶりに家に戻ってきたとき、ペペがニャーと啼いて寄ってきました。足許をスリスリして離れない。猫なんて薄情だから、私のことなど忘れただろうと思っていたのですが、ちゃんと覚えていてくれました。ペペにとつて私は飼い主であり、身内になっていたんです。ペペの愛は、エロスからフィリアに進化していたんです」

「なるほど」と呟きながら、珠季は自分自身をかえりみる。陽平の自分への愛は、母親代わりと言うならば、フィリアかもしれない。自分とは言えば、寂しさを埋める存在として陽平を求めている。陽平の優れた容姿が盾になり、世間から受けてきた憐れみを跳ね返してくれてもいる。これはまさにエロスなのだろう。だからといって何が悪い、と思う自分がいる。世のなかの女性のほとんどが、そういう理由で結婚しているのではないのか。

牧師が、珠季はどうなのかと聞いてきた。珠季は少し思案して、陽平の話に合わせるように、弟の話を持ち出した。「私には弟がいました。私が高校三年のときに亡くなりまして」

牧師は黙ってうなずく。

「生前、弟にもっとこうしてあげたかった、ああしてあげたかった、という想いが今もあります。彼に口うるさく接

してしまふのも——」

「ふむ」

牧師は珠季の目をじいーつと覗き込んでくる。珠季はすべて見透かされている気がして、「そのせいかもしれません」と自信なさげにまとめた。

「エロスは欲求が満たされなければ潰れてしまふ愛です。それに比べれば親愛、友愛の意であるフィリアのほうが強い。お互いの信頼関係があれば続く愛です。相手を裏切らなければ、自分も裏切られることはありません」

牧師が力強く言い切ると、陽平はゆっさゆっさと身体を前後に揺らした。横顔が満足そうだった。

陽平はたびたび睦言として、「俺の前から消えん」といて「ずっと傍におつて」と口にする。それが陽平の純粹な欲望だとしたら、選択肢の少ない女を捕まえておくことが手っ取り早い方法だったのかもしれない。そう分析すると自分たちはエロスだけで繋がっている、と珠季は思う。

「牧師さん、アガペーとはどんな愛ですか」

「アガペーは自己犠牲の愛、相手に見返りを求めない愛のことです。キリスト教では、この愛の実行を教えています。結婚講座二日目の今回は、お二人の愛が現状ではどの段階なのか、自己をかえりみる機会として三つの愛について触れました」

結婚講座がいったん終了になったあと、挙式を何月頃に

するかという話になった。会社の繁忙期である三月を避け、しかし寒過ぎず、暑過ぎない時期となると、ゴールデンウィーク明けの五月末から六月にかけてと選択肢は狭まっていく。

この日は堀込牧師が、珠季にある宿題を出した。ヴァージンロードを誰と歩くか、ということである。通常は花嫁の父親がエスコートする形で祭壇へ向かっていく。血縁者に縁のない珠季にとっては、宗教上のしきたりも高すぎる壁なのだった。

3

結びあげてかちかちに固めた頭髪を気にしながら、珠季はタクシーから降りた。運転手が先回りして、うしろのトランクの半分ほど占めていた衣装箱をおろし、珠季に手渡す。

北摂晴ヶ丘教会の日曜学校の建物は、すでに扉が開いていた。なかへ入ると、陽平の声が頭上から聞こえてきた。

誰かと談笑している。二階に上がってみると、金髪男が視界に飛び込んできた。近所の不良少年が侵入してきたのかと思ったが、なんとそれは陽平で、元高校の担任・大塚とタメ口でしゃべっていた。陽平が未だパーカー姿なのに対し、大塚はすでに燕尾服を着込んでいる。ヴァージンロー

ドのエスコート役として珠季から頼んでいた。年齢は五十手前、腹も出て貫禄十分、父親役として申し分ない。

「タマちゃんおはよう。あー、髪結って綺麗になってるう」

陽平が甘えた声で感嘆しながら珠季に近寄ってくる。そのうしろで大塚が軽く会釈してきた。珠季は深々と頭を下げる。

「大塚先生、こんな早うに来てくださって、ありがとうございます。陽平くん、その頭、どないしたん？」

「見ての通りやけど。昨日の晩染めた」

陽平は満足気に襟足を触る。

「なんでそんなことするんよ」

「あかんかったん？」

ここまでTPOがわからない子だったのか。昨夜、陽平と一緒に過ごさなかったことが悔やまれた。結婚式と言えども参列するのは丸源食品の社員だから、生温かく見守ってくれるだろうとは思ふものの、時間を巻き戻せるなら巻き戻したかった。

「陽平くん、まだ着替えへんの？ 世話役の人が来たら、私ここでウエディングドレスの着付けはじめで」

「タキシードな、さつき着ようとしてんけど、サスペンダーがないことに気いついてさ」

「なんで？ 三日前に陽平くんの部屋で試着したあと、一式ケースに入れたやん。見てたやろ？」

「昨日、もっかい着てみてん。それでやと思う」
陽平はあつげらんと答える。

「責任持つて自分で最後は確認せな」

「タマちゃんが、昨日、俺んち来てくれへんから悪いねや」
階下から、六十代くらいの見知らぬ女性がやってきた。

珠季が「世話役の方ですか？」と尋ねると、「堀込です。
牧師のワイフです」とにこやかに返してくる。

「これは失礼しました」と珠季が慌てふためくと、女性は
「いいんですよ、はじめましてですから。えっと、新郎さ
んはこちらにはいらつしやらない？」と二階全体をきよ
きよと見回した。

「新郎、ここにいます」

陽平が前へ突き出すように右手を上げた。

「あら、お若い方なのね」女性の目は陽平の頭に釘付けに
なっている。「サスペンダーがあつたんだけど、うちで着
替えられたらどうかかと。新婦さん、もうすぐここで着替
えなさるから」

「あ、助かります」

陽平はタキシードのケース一式を持ち上げ、「じゃ、俺、
行ってくるわ」と珠季と大塚に言った。

陽平を階段の下まで見届け、ふと顔をあげると、腕を組
む大塚と目が合った。珠季の耳がかつと熱くなる。大塚は
こちらにゆっくり近づいてくる。

「ブーケ、持っていますか？」

世話役が横から、白バラを束ねた丸いブーケを寄越して
きた。鏡越しに、ブーケを持つ位置を確認する。腕を胸ま
であげてみる。礼拝堂を出て、空に向かってブーケを放り
投げる自分を想像した。

挙式前、日曜学校の建物内で記念撮影があつた。机や椅
子は端に寄せられていたが、引きがないのでカメラマンは
二階へ上がり、新郎新婦と参列者は一階から見上げる構図
になった。珠季も陽平も身内がほとんどいなかったので、
丸源食品の社員ばかりが新郎新婦を囲むことになり、一斉
に上を向く会社の集合写真のようだった。

礼拝堂の扉が開くと、場の空気を支配するパイプオルガ
ンの音色に包まれた。

珠季は隣にいた大塚の肘におずおずと腕を添え、ゆった
り流れる結婚行進曲に合わせて小さく一歩踏み出した。天
井までそびえ立つパイプオルガンの前まで来て、いったん
立ち止まる。向きを変えようと、礼拝堂の十字型の光に目が
吸い寄せられた。壁際の間接照明以外は、十字型の吹き抜
けからしか光がないコンクリート壁の薄暗い空間。荘厳さ
が際立つ結婚式だと珠季は思う。ベール越しに、丸源食品
の面々が視界に入ってきた。佳子をはじめ会社の同僚たち
が、スマホやコンパクトカメラを向けて、ヴァージンロー

「結婚式は何かとバタバタするで。そういうもんや」

大塚がじつとりと見つめてくる。若い頃にはあつた眼差
しの強さはなく、瞳が潤んで穏やかな印象に変わっている。
その顔をまともに見られない。

「お恥かしい限りです。彼、まったくの子どもなんで」

「子どもって、自分が結婚する相手やんか」

「そうですね」

教会の世話役がやってきた。珠季がウエディングドレス
着用の準備に入ると、大塚はきまり悪そうに「礼拝堂見て
くるわ」と言い、出ていった。

今更ながら、ヴァージンロードのエスコート役を丸源食
品の社長に頼めばよかったと珠季は思う。自分の決断に胸
を張れないとき、恩師の存在ほど嫌なものはない。肉親の
ように肯定も否定もしないが、そこに触れてこないからこ
そ、どう思われているのかと気になってしまふ。

シースルーの袖に腕を通したあと、世話役がうしろから
パールネックレスを胸元に渡してきた。顎を引き、姿見に
向かつて自分の一番好きな顔の角度をつくってみる。自信
のないデコルテはレース地で隠すことにしたが、十分に美
しい。一生着ることはないと思いつ込んでいた純白のウエ
ディングドレス。花嫁に仕上がっていく自分を見つめなが
ら、これまでの不幸と孤独と忍耐へのご褒美だと思うこと
にした。

ドのすぐ脇で待ち構えている。俗世間がまだ自分と繋がっ
ていることに安堵しながら、珠季は歩を進めた。

ヴァージンロードの先端に、黒いタキシードを着た陽平
が待っていた。心なしか、身体を揺らしているように見え
る。黒いマントを羽織った堀込牧師は、祭壇下手の説教台
の向こうに立っていた。

珠季が陽平の横に並ぶと、エスコート役の大塚は立ち
去った。讃美歌の斉唱がはじまる。一曲歌い終わると、堀
込牧師が聖書をを開き、〈夫婦の務め〉について語りはじめ
る。二曲目の賛美歌合唱後、堀込牧師が珠季たちのすぐ傍
までやってきた。事前の打ち合わせ通り、珠季は片膝をつ
き、姿勢を低くする。顔の前のベールを陽平がつまみ上げ、
背中側にそっとおろした。堀込牧師が指輪の箱を差し出し
てきた。

式自体は十分もかからなかった。堀込牧師による閉会
の辞のあと、新郎新婦退場の流れになった。

ヴァージンロードの近くの参列者がコンパクトカメラを
構えていた。ストロボの閃光があちこちで発生する。ひら
ひらした薄ピンクのドレスを着た佳子が、スカートのめく
れ上がるほど身を乗り出していた。珠季と目が合うと、彼
女は唇をすばめて首を捻った。キスの儀式を飛ばしたこと
を、花嫁がどう思っているのか問うているのだ。厳かに進
行していくこの教会ではキスの儀式は不必要なもので、下

世話な人間が食いつくところは、やはりそこなのかと珠季はふっと鼻で笑った。

式の終了後、形ばかりのブーケトスが行われた。ブーケを取りに行ったのが佳子一人だけで、彼女が無事手中に収めると笑いが起こった。そのあと、世話役の一声で玄関前でも記念撮影する流れになったが、外は小雨が降っていた。一瞬、珠季はウェディングドレスの裾が汚れないかと危惧したが、もう二度と着ることはないのだと、晴れやかな気持ちで濡れそぼる石畳に降り立った。

第二章

1

差し向かいに座る佳子がトートバッグから何かを出そうとしていた。にこっと微笑んだあと、タッパーを見せ、蓋を開けようとする。

「土屋さん。ひょっとして、ダイエットしてはる？」

珠季は微笑み返し、「子ども産んでから、腰回りの肉が戻らんくて」と答える。嘘だった。ここ最近、腹部が張って食堂の定食が食べきれないのだ。丸源食品の食堂は、ご飯と味噌汁はセルフでよそうことになっており、Aランチは上の棚から、Bランチは下の棚から惣菜の皿を取ってい

く。珠季はご飯を大さじ一杯程度しか盛らず、惣菜も二皿あるところを一皿しか取ってきていない。夕飯のおかずとして持ち帰るためタッパーを持参することもあるが、毎回それでは周りからそういう人として見られてしまう。

結婚して二年目に子どもを授かった。四十三歳での高齢出産。妊娠中、会社では事務に戻してもらうなどの配慮をしてもらい、八カ月目から産休に入った。そのままずっと育児休暇も取得できたのは、長年休まずに勤めてきたおかげだろう。社内で未だに旧姓で呼ばれるのは、産休を取る前までの名残である。

「バレンタインデーにみんなに配るやつ、試しに作ってみてんけど要らん？」

「私は食べへんけど、陽平くんに持って帰ってもええかな？」

「どうぞどうぞ」

タッパーにはダークチェリーが載ったチョコレートのカップケーキが四つ入っていた。こそこそと渡してくる佳子に倣い、珠季もタッパーを隣の席の座面に置いて隠す。

「これをみんなに配るん？ 今までそんなことしてたっけ？」

「フリーになったよーって宣言するためにな」

「フリー？ え？ 工場長と別れたん？」と珠季は声を潜める。

佳子は曖昧な笑みを浮かべながらうなずく。

「全然わからなかったわ。さっきも一緒に歩いてたやん」

「それぐらいはするよ。仲が悪くなったんちゃうねんから。ただ、結婚はしないってこと。向こうも早う次の相手見つけやうて言うてる」

「結婚するつもりやったことも知らなかったけど。でも、何で？」

「十一月ごろ、あの人休んどった時期あるやろ」

とりあえず珠季はうなずく。言われてみればそうだったか、ぐらいいの記憶しかない。もともと工場長への関心が薄いかもしれないが、貧血や微熱など体調の不安を抱きはじめた時期で、上司の不在にまで気が回らなかったのである。

「大腸がんの手術したんよ」

「えっ！ それも知らなかった」

「心配かけるだけやし、周りに言う必要ないからな」

「それが結婚をやめた理由なん？」

「うん。大病したら、生命保険掛けられへんやろ？」

「げん」

現金な人やなと口をついて出かけたが、珠季はとっさに飲み込んで「エロスやな」と言い直した。

「エロ？」

「エロちゃうわ。エロス。下心だけで繋がっている愛って

こと。愛にもいろいろ形があるって、結婚する前に牧師さんに教えてもらったんよ」

「彼、別れた奥さんとのあいだに子どもいるからさ」佳子はトレイの上の食器を重ねはじめる。「私と再婚するなら遺産相続がややくしなるやん。だから、彼の遺産はすべて子どもさんに入るようにして、私には生命保険掛けて受取人にするからって話で結婚を進めてたのに、がんが見つかったしまって。さっさと結婚しとけばよかったんよね」

珠季は何も言えなくなってしまう。二人の考えは計算的ではあったが、相手と子どもの将来を思いやうてのことなのかと。そう、自分たちはもう若くはなく、死んだときに残された人間のことでまで考えなければならぬ。

「それから順調に回復したんやね。手術、上手くいってよかったね」

佳子は苦笑しながらうなずいた。「息子さんが大病院で理学療法士やっててさ、そのツテで腕のいいお医者さん紹介してもらったんよね。私は身を引くべきやと思った」伏し目がちに話す佳子に見えるよう、珠季はタッパーを持ち上げて「これ、ありがと」と小声で言った。

食堂を出た二人は更衣室に戻り、午後からの就業に向かうべく着替えをはじめた。佳子はキャップを被る直前、「キャンセルの電話入れとかな」と言ってスマホをいじります。「予約していたマンモグラフィー検診のキャンセル

をしたのですが」と電話する佳子に、珠季は反応した。どうやら明後日の朝に予約を入れていたらしい。

赤ん坊に母乳を飲ませているあいだは避けていたマンモグラフィー検診だった。しかし、母乳はすでに卒業させている。マンモグラフィー検診の予約は三カ月前までいっぱいだったとするが、佳子がキャンセルしたあとすぐに電話を入れれば、その空きに予約を入れてくれるのではなからうか。

佳子が電話を切ったあと、「どこの病院？」と尋ねてみた。「私、あなたがキャンセルしたところに、マンモの予約入りたいわ」

「丸木坂総合病院。今すぐやつたらいけるんちゃう？」

「何でまた、キャンセルしたん？」と珠季は自分のスマホで「丸木坂総合病院」を検索する。

「今日から生理になってさ」

「乳房が張ってなければ問題ないみたいやけどね。まあでも、遠慮なく入れさせてもらおうわ」

珠季は電話番号のリンクをタップした。

マンモグラフィー検診の予約は午前九時半だった。

その日、珠季は時間をかけて息子の奏多^{かなた}に朝ごはんを食べさせていた。陽平はテレビ画面に出ている現時刻に目をやり、「今日はゆっくりしてんな」と言ってきた。

「九時半からマンモグラフィー検診の予約してるから、まだ時間あるねん」

「マンモグラフィー？」

「乳がん検診のこと」

陽平は「えー」と言ったとき黙り込んでしまった。そのあと食器の片付けを手伝うでもなく、幼児用のマットにへたり込み、たまたまついてきた朝ドラを観ている。あきらかに動揺していた。結果はおろか検査すらこれからだというのに。珠季が発発するとき声をかけてみたが、陽平は上の空でテレビ画面を見つめていた。

出産から五カ月経った頃、陽平は得意先のスーパーの売り場マネージャーを殴る事件を起こした。陽平は最後まで自分の正義を主張したのだが、丸源食品の社長が下した決断は陽平の解雇だった。会社から味方してもらえると信じていたのか、解雇されたことに動揺したのか、陽平は三日三晩布団のなかで塞ぎ込み、そのあとふらりと家を出て一週間行方をくらませた。帰りを待ち続けた珠季だったが、さすがに限界だと警察に捜索願を出そうとしたところで陽平は戻ってきた。雨に濡れそぼり、捨てられた仔犬みたいな風貌で、歯の根が合わずにガチガチと震えていた。どこで何をしていたのか一切言おうとしなかったが、放っておかれるとぐずぐずと泣きはじめるので、大丈夫だよ、私がついているからと慰めることしかできないのだった。それ

伝える。

『では6番の項目もへいへいに丸をしておいってください』

「はい」と答え、告知書にボールペンを走らせる。

生命保険、今のうちに入っておこうか。産休中にがん保険の代理店が送ってきたダイレクトメールがどこかにあったはず——。文房具や書類専用の三段ボックスにその封筒を保管していた。医療費のかかるがんだけでも、保険をかけておくに越したことはない。死亡保証を付けて受取人の名義を陽平にしておけば、ほかの生命保険と大差ないかもしれない。

家を出る直前、珠季は健康保険証と保険会社のダイレクトメールをバッグに入れた。

2

がん保険の代理店から電話がかかってきたのは、珠季が昼休憩に入って着替えている最中だった。

佳子が先に食堂へ行くと告げ、珠季の肩をぽんと叩く。珠季は首と肩でスマホを挟みながら、バッグから保険関係の書類を出した。

『告知書のご記入についてですが——』

更衣室の隅へ移動し、代理店からの質問に答えていく。昨春の健康診断での肺・胃腸の検査、二週間前に受けたマンモグラフィー検診でも異常が認められなかったことを

口をすすぐ。五日前にも食後気分が悪くなって嘔吐した。午後からの就業がはじまった。パートタイマーが退勤したので、二階加工室の人口密度は半分ほどになっている。積荷用エレベーターが開く。工場長がそこから荷台を押し出し、積載した青いコンテナを調理台の横へと運び込む。和牛肩ロースA4は真空パックから出されると、バンドソーで真半分になり、チョップカッターでスライスされ、そのあと包丁で整形される。袋詰めは珠季と佳子の仕事で、秤で二キログラムになるよう計ったあと、袋をシーリングしていく。それだけの作業が最近辛い。一時間ぶっ続けでやると息切れしてくる。下手すると、その場にしゃがみ込みそうになる。

土屋さんが倒れたと騒がしくなったのは、珠季が積荷用エレベーターのボタンを押したときだ。みぞおちが焼け

るように痛み、ダイイングメッセージを残すようにボタンを押した手を下へ滑らせていた。勢いで頭をエレベーターの扉にぶつけ、扉が開いたとたんエレベーターのなかへ倒れ込んだ。

佳子が駆け寄ってきた。

「土屋さん、大丈夫？」

珠季は胸の下あたりをさすってみせる。

「ごめん。ここが急に痛くなってる」

「無理せんとき。旦那に迎えに来てもらおうか？」

「大丈夫。少し休ませてもらえれば復活できるから」

珠季は自力で起き上がる。

「ふらついてるやん。熱もあるんとかやう？」

「そうやな。頭も少しぼーっとするわ」

学校給食用袋詰め出荷作業を終えたので、二階加工室では別のラインの準備がはじまった。工場長からも外で休むよう言われたので、珠季は消毒槽を抜けて従業員階段へと出た。

陽平にLINEメッセージを送ろうと更衣室からスマホを持ち出したが、いざ打とうとすると手が止まった。そのままロック画面に戻し、ポケットに突っ込む。陽平を無駄にうろたえさせたくはなかった。

一七時を過ぎ、従業員たちが更衣室へ戻ってきた。私服に着替えた若手従業員と入れ替わるように、工場長と佳子

がやってきた。

「おう。調子はどないや？ 土屋さん」

工場長は珠季を見るなり、大声で話しかけてくる。珠季は立ち上がり、頭を下げた。

「すっかり落ち着きました。ご迷惑おかけしました」

「熱は？ ぼーっとするって言ってたやろ？」と佳子が額に手を当ててくる。

「高齢出産やったら身体に無理が祟ってるんやろうなあ。

まあ、一種の更年期障害やろ」と工場長。

いつものデリカシーのない決めつけに、珠季は少し安堵する。吐き気と腹部の張りや痛み、身体の不調はほかにもあったが、大腸がんの手術をした工場長がそう言うならば《更年期障害》で間違いないのだろう。ただ単にホルモンバランスの乱れであるならば、心配しても無駄というものだ。

珠季と佳子は女子更衣室に入った。この時間まで残っている女子は二人だけだ。お互いのロッカーは離れたところにある。佳子が「今日は夜のお務めせんと早よ寝ーやー」と声をかけてくる。珠季が作業用ズボンからジーンズに履き替えていると、「脚、どないしたん？」と佳子の声之急に近くなった。素足はくるぶしが埋まるくらいにむくんでいた。掻き窺った痕がかさぶたとなって残る象牙色をした肌。ヒールなんか履けない形になっている。

「なんか知らんけど、むくんできたの」

「いつから？」

「ひと月くらい前かな」

「ぐねったん？」

「怪我じゃないよ。痛みはあるけど、そういうのじゃない」

「何が原因なん？」

「わからない。マッサージしたら治るかなと思ってるねんけど」

「病院」佳子は珠季の脚に顔を近づけた。「行ったほうがええんとちゃう？」

「何科へ行くのよ？ 怪我とかやうのに」

佳子は黙って考え込んだまま、上半身を起こしパーカーを羽織る。

「ねえ？ 皮膚科に行けばええの？」

珠季はイライラしながら聞き返した。

「いや」佳子はパーカーのフードを持ち上げながら、コートを羽織った。「私の父、そないな脚になっとったから。がんで死んだんやけどね」

珠季の乗る自転車は、ギョングユンと嫌なブレーキ音を響かせて緩い坂をくだっていた。《コーポ丸木坂》の看板の手前でサドルから降り、駐輪場の隅に自転車を停めた。頭上からかすかに幼児の泣き声が聞こえている。二階右端

の窓灯りに目をやりながら、珠季は自転車かごに収まっていたエコバッグを肩にかけた。買い物の中身は、値引きシールを貼られた惣菜の数々だ。階段手前の郵便受け、《来栖》の箱には鍵のダイヤルは設定されていない。扉を開けると、ダイレクトメールやチラシが手前に倒れてきた。それらをエコバッグに押し込んで、階段をのぼる。すぐに息があがる。二階まで行くと、幼児の泣き声はより鮮明になった。《来栖》とネームプレートが掲げられた204号室にも鍵はかかっていなかった。扉を開けたとたん、泣き声がわつと外へ流れ出る。今朝、珠季が出勤するときに施錠してきただけなので、陽平がいったん外出したということなのだろう。そのときは、奏多も連れて出てくれたのだろうか？ 胸騒ぎを押し殺しリビングに入っていくと、黄緑色のマットの上で奏多が仰向けになり、足許の積み木を蹴散らしていた。糞便の臭いが部屋じゅうにただよっている。オムツもこころなしに膨らんでいるように見えた。陽平は奏多に背を向けて、テレビゲームに打ち込んでいた。陽平の頭からヘッドホンを奪い取り自分の耳に装着すると、爆撃音が鼓膜をつんざいた。

「あ、タマちゃん」と陽平はぼんやりと珠季を見上げる。珠季はぐつと陽平を睨み付けて、ゲーム機のコンセントを引っかく。爆撃音が消え、奏多の泣き声が入ってくる。「いきなり、何すんねん！」

陽平が大声を出す。珠季はヘッドホンを首まで下ろした。「奏多が泣いてるやんか！ 気づいてへんの？」

「ここをクリアしたらオムツ取り換えるつもりやったんや」

「オムツ換えないといけないこと、わかっていてやってたの？」

陽平はテレビ画面に顔を向けたまま黙り込む。泣き声を放っておくわけにもいかないので、珠季は奏多のすぐ近くに濡れた頬を拭いたあと、トイレの前へ連れて行き、オムツを外した。三月とはいえまだまだ寒いのに、ズボンも穿かせられず裸足のままで、オムツのなかで下痢便が股から腰の辺りまでついてた。トイレトペーパーを利き手にぐるぐる巻きにして優しく拭き取ったが、奏多の痼癬は収まらず、地団駄を踏んだときにオムツ内に足を突っ込んでしまった。「あー、やつちゃったねー」と言いながら、腰と脚を持ち上げて風呂場へ連れていくと、「風呂場が汚くなるだろ！」と陽平が怒声をあげた。

奏多の臀部から脚部をシャワーで洗い流していると、陽平が玄関へ向かい、サンダルを擦る音がした。

「どこへ行くのよ！」と珠季は声を張り上げる。

「コンビニ」

ドアが乱暴に閉められる。珠季は「誰の子どもやと思ってんねん」と独りごちた。

「家事と仕事の分担見直そっか。陽平が働きに出て欲しいな。私が育児に回るから」

陽平は脱いだ衣類を脱衣所に向かって放り投げる。

「働き盛りの男子を家に縛りつけとくのもどうかと思っとしてん。それに、私もこのところ疲れやすくて。今日も仕事中に倒れた」

「何それ？ 聞いてへんで」

「電話しよかと思っただけど、奏多をしつかり見ておいて欲しいから帰ってから言うことにしてん。そしたら出て行っちゃうし」

「悪かった。ごめん」

陽平はボソリと謝ったあと、その場に立ち尽くしていた。パンツ一丁で、仔犬みたいな目で見つめられて、珠季は言葉に詰まる。

「年度末やから、有休消化せなあかんよ。そのとき、ハローワークへ行ってみたらどう？ 私が家で奏多を見ておけるし。ね」

「仕事見つかるやろか？ 俺、学ないし」

「陽平は若いやん。業種によつてはすぐに見つかるわ。外人留学生雇わな回せへん仕事もあるねんから。大丈夫や」

「考えとく」

風呂場の扉が開く音がした。陽平は思春期男子の母親への口の利き方に戻っている。私が陽平をダメにしているの

自分が勤めに出れば、陽平に父親としての自覚が出てくるかと期待していたが、実際には退行しているように思える。ゲームもさほど好きではないはずだ。二十五歳の彼には荷が重すぎるのだろうか。ゲームくらいしか逃げ場がないのだと思ひ至り、ため息が出た。

まとわりつく奏多を気にしながら、珠季は食事の準備をはじめた。鍋で煮麺をつくりながら、隣のコンロで熱したフライパンに溶き卵を流し込む。奏多は流しの横の抽斗を下から順に開けて、なかのものを引っ張り出してゆく。

「奏多、やめて。それやめて」

「やんや！」

「お願い、抽斗はやめて」その上の抽斗にも手を伸ばしてきたところで、珠季は奏多を抱き上げる。「しんどー。もうっ、しんどいつ」と声に出していた。

陽平は二十二時過ぎに帰ってきた。

珠季は奏多を風呂に入れるついでに入浴し、頭にタオルを巻いたまま奏多を寝かしつけていた。奏多がカッと目を見開き「パッパ？」と言う。手足を動かし、ベビーベッドのなかで覚醒した空気を放ちはじめ。陽平はただいまも言わず、リビングへ向かってきた。

「どこ行ってたんよ。心配するやんか」

訊ねる珠季を無視し、陽平は廊下で服を脱ぎ捨てていく。

か、と珠季は思う。今日、佳子が言い放った「がん」という単語が、QRコードにスマホをかざしたときのようにピントが合う。

「マamma、おちっこ」と奏多がぐずぐずと泣きはじめる。

珠季はオムツ越しに股のあいだに手を当て、生温かい湿り気を確認する。オムツ交換の最中に風呂場からドライヤーの風音がして、奏多はさらに火がついたように泣きだした。陽平の怒鳴り声が聞こえてくる。うるさい、とても言っているのだらう。オムツを交換したあと、珠季はダウンジャケットを羽織り、奏多を抱えて外に出た。一階へ降り、アパートを離れる。奏多が落ち着きはじめると、陽平への憤りも収まってきた。そうすると、頭にもたげてくるのは、「がん」という単語だった。

脚がむくむくことと「がん」が、いったいどう関係があるというのか？ 「がん」とは、主に内臓にできる悪性腫瘍ではないのか。脚のむくみだけではない。ここ最近の、原因不明の倦怠感も何らかの病気のサインに思える。胸の下にある奏多の頭が外側へ垂れ、珠季を前方に引っ張ってくる。背中痛みに耐えきれず、珠季は階段に腰掛けた。この子の全体重が負担だけなのだ。身体の不調とは違うのだ。珠季は迫りくる不安を、奏多の重みで上書きした。

明け方、珠季は息苦しさのあまり目を覚ました。自分が金魚になっている夢を見ていて、パクパクと水面に口だけ

出して酸素を取り入れようと必死になっていた。目覚めてもなお、息を吸おうとしても肺が僅かしか動かない圧迫感が、腹部から胸部にかけて覆っている。寝返りを打とうとしたが腹がつかえて動けない。自分の腹部を触ってギョッととした。みぞおちから臍の下までばんばんに座布団のごとく膨らんでいる。腹部の張りはずっと気になっていたが、ここまで張っていただろうか。

隣の布団で眠る陽平に腕を伸ばす。

「陽平くん」

なんとか届いた指先で彼を揺さぶった。

「陽平。苦しい。助けて」

陽平は珠季の指を手で払い、背を向けてしまう。珠季が横に体をずらし、彼の肩に手を伸ばすと、あつあつと蟬のような泣き声がベビーベッドから降ってきた。陽平が「うるさい！」と布団を被る。珠季は「助けて。陽平」と声を絞り出した。

奏多をあやすこともできず、珠季は金縛りにあつたように、気持ちだけでもがいていた。窒息すると観念した瞬間、まぶた越しに蛍光灯の光が射し込んだ。陽平が起きたのだ。珠季は「苦し、苦し」と必死に声を出す。

「タマちゃん、どないかしらん？」

陽平が珠季の顔を覗き込んできた。珠季は喉を抑え、息苦しさをアピールした。

とある。あの息苦しさは呼吸器系の問題ではなかったのか。

「息苦しさがなくなって、今は落ち着いています」

「呼吸し辛くなって軽いパニックを起こしたようですね。昨日は安定剤も打ちました」

そうか、あれはパニック症状だったのか。珠季は安堵の息をついた。

「精密検査の結果が出るのに数日かかりますが、現段階の医師の見立てをご主人にお話させてもらいました。朝食を摂られたあとで、珠季さんにもお話しておきます。よろしいですか？」

辺りを見回すと、サイドテーブルにラップのかかった病院食が置いてある。そういえば空腹だ。食欲もある。しかし、助かったと嬉喜びできないのはパイプ椅子に腰掛けた夫の仕草だった。貧乏ゆすりが激しく、膝の上の奏多が泣き出さないか目が離せない。

「お腹すいたわ。陽平くん、そのトレイ取ってくれませんか？」

はい、とトレイを寄越したときの陽平の声が掠れていた。安井という医師は、一時間後にまた来ますと言って去っていく。カーテンのなか、きよろきよろと視線の定まらない陽平と不安げな奏多を見ていると、落ち着かなかった。奏多を陽平に任せきりにするのも心配だったが、今の自分には家族を構う余裕がない。

「陽平くん。お医者さんからの話、私一人で聴くわ。朝食

「お願い、救急車呼んで」

「え？」

「息ができない。苦しい」

珠季は陽平の腕をつかみ、力の限り引っ張った。

3

救急搬送中に酸素ボンベを着けられたあとのことは、記憶が混濁している。呼吸が楽になったとたん、安心して眠くなった。搬送先の病院で医師が腹水を抜く処置をした辺りはかなりおぼろげだ。そのあとCT検査から胃カメラ検査へと、次々回された。ずっと意識が朦朧としていて、自分はベルトコンベアに流される肉塊みたいだ、と思っていた。

翌日、目覚めると病室のベッドに珠季はいた。前日のことを思い返していると、眼鏡をかけた医師と奏多を抱いた陽平がやってきた。奏多は「マツマ、みるう」などと無邪気に叫び、身体をむずむずと動かしている。陽平の目が虚ろで、奏多を落としたりしないかと珠季はひやひやした。「おはようございます、来栖さん。今、体調はいかがですか？」

穏やかな口調の医師だった。見た目は三十代半ばといったところか。ネームホルダーを見ると〈消化器内科・安井〉

も一人で食べたい。今日は奏多連れて帰ってくれる？」

「わかった。検査結果出るまで、タマちゃんここで入院やねんて。着替えは三日分持ってきてある。でも明日、また来てもらええ？」

「もちろん。今日は奏多のこと頼むね」

陽平は箸を握る珠季の手を両手で包み、自分の額に当てた。「俺を一人にせんといてな」と蚊の鳴くような声で言う。珠季は「しっかりしてよ」と言うのが精一杯だった。カーテンから出て行くときの陽平の目に、光るものがあつた。

安井医師が珠季を呼びに訪れたのは、朝食を食べ終えて三十分ほど経ってからだった。立って歩けるか確認されたあと、エレベーター近くの小部屋に案内された。デスクトップパソコンと簡易椅子だけがある一畳ほどのスペースだ。安井は「昨日受けた精密検査の結果は、後日治療方法の相談のときにお見せします」と言って、珠季に座るように促した。

「静脈血栓塞栓症が出ています。脚のむくみ、呼吸困難の症状がそれです。あと、腹水を抜かせてもらいました。これもかなり苦しかったと思います」安井は眼鏡のアームを上げて、ちらりと珠季の顔を見た。「精密検査の結果はまだですが、消化器系のがんと診断して間違いないと思います」

安井はカチャカチャとパソコンのキーボードを叩く。血

栓症の諸事例が載ったサイトを見せてきた。該当しそうなところを指し示す。

「その、血栓症というのは、がん以外でもなることはあるんですよ？」

珠季は突っかかるように尋ねる。

「そうですね。エコノミー症候群もその一つで、座りっぱなしの仕事が影響することもあります。妊娠、肥満、高齢なども原因になったりします」

「仕事はずっと立っています、基本的に。でも、先月受けた乳がん検診でも腫瘍は見つからなかったし、昨年の春に受けた胃カメラ検査でも異常は見つからなかったんですよ」

安井は口を真一文字にしたまま、数回うなずいた。

「来栖さん。腹水が溜まるというのは、がんの末期症状なんです」

「夫にも、そう伝えたんですか？」

「かなり憔悴されていたので、がんの可能性があると婉曲に伝えました」

「末期って、あとどれくらい生きられるのですか」

「そこまでは、精密検査が出ないことにはなんとも」

「そうですか」

末期。その言葉が肩にずんとおし掛かる。何か聞きたいことはありますかと問われても、声を発すると自分が崩壊

陽平は目を瞑っている。「ん？」と聞くと、陽平は首を横に振った。

「私たち十九離れてるんよ。ずっと一緒におることなんて、できひんのよ」

論すように言葉をかけたが、陽平は首肯しなかった。

それから陽平は毎日病室へやってきたが、徐々に酒臭くなっていた。最初気づいたときは二日酔い程度のものであったが、これは朝から飲んできたなと思うときもあった。精密検査の結果に基づくケアカンファレンス当日も、陽平は酒臭く、死んだ魚のような目をしてやってきた。珠季は自分に抱っこ紐を移し替え、カンファレンス室へは奏多を抱いて行くことにした。

案内されたのは以前と同じ部屋だった。担当の安井医師は珠季たち家族に腰掛けるよう促すと、PCを立ち上げてデスクトップ上にCT検査の画像を羅列した。

「来栖さんの腹部のCT画像です。これが脾臓になります。脾臓とその周辺の白く覆われている部分、これががん細胞です」

脾臓の一部にくつきりとした白い点があった。その周辺を白っぽいものが特上の霜降り肉のように覆っている。珠季は首を捻り、「この霞がかったところですか？」と尋ねた。

「そうです。腹膜播種といって、腹膜に転移しています。」

するように思われ、珠季は力なくかぶりを振った。十九歳離れた伴侶だから、自分のほうが先に死ぬことは覚悟していたことだが、それでも――。

それからの珠季は、気怠さに覆われてベッドに横たわっていた。様々な想念が湧き起こっては、涙が鼻の付け根を伝って、枕に流れ落ちていく。真つ暗闇のなかに、所在なく立っている奏多と陽平が目に見えなくなる。結婚する前までは、いつ死んでも構わないと思って生きてきた。自分らしくないことをしたから、こういうことが起きるのだ、とベッドのゲージに頭を打ちつけたくなる。人には分相応の生き方があるのだと改めて思う。

翌朝、奏多の「いやっ、いやっ」という声がして、左手が熱いと感じながら眠りから覚めた。左手を陽平が握っていた。陽平がかかる抱っこ紐のなかで奏多は宙を掻いている。陽平は珠季と目が合うと、「昨日、医者から話聞いた？」とささやいた。

「うん」

「俺、ほとんど眠られへんかった」

「心配かけてごめんね。でも、精密検査の結果が出ないと、はっきりしたことはわからないって」

陽平は珠季の手を頬に当ててため息をついた。「俺を一人にせんといて」

「一人ちゃうわ。あなたには奏多がおるん」

腹水が溜まったのは、腹膜播種が原因です」

「私は脾臓がんだったんですね。しかも転移している」

「はい」

「これから」珠季はちらりと陽平の顔を見た。陽平の目は依然とろんとして生気がなかった。「どんな治療をしなければいいのですか？」

「そうですね――。お子さんも小さいですし、ご自宅と一緒にいる時間を大切に過ごされてもいいかと思います。緩和ケア中心の訪問医療を受けるとか」

「ちょっと待ってください。緩和ケアって何ですか？治療できないってことですか？」珠季は自分でも思っている大きな声で抗った。「私はどんな辛い治療でも受けて立つつもりです。手術してください」

安井は眼鏡のアームを持ち上げ、一つ咳払いした。

「切除する手術は、もはやできないステージにあります。当病院だと、ホスピスをお薦めする段階にあるんですよ」

「ホスピス。あの、先生。私はあと、どれくらい生きられるんでしょうか」

「そうですね」安井はCT画像に再び目を向けた。「あと、三カ月くらいかと」

陽平がいきなり立ち上がった。

「ふざけんなっ」

スツールがうしろへ倒れる。陽平は邪魔だとばかりにス

ツールを蹴飛ばし、ドアを開け、出ていった。珠季は咄嗟に追いかけようとしたが、奏多が泣き出す。

「ごめんごめん。大きな音出してごめんね」

立って揺すってその場を取束させることしかできない。

安井はじっと母子を見守っている。珠季は陽平が倒したスツールを元に戻し、掛け直した。

「とりあえず、この病院では治療できないんですね。他へ移ります」

「抗がん剤治療をしていくことになるでしょうが、がん治療に特化した大病院へ移られたほうがいいかと」

カンファレンスを終えてからも、陽平はどこかへ行ったきりだった。奏多を自分の病床へ留めておくこともできず、珠季はその階のロビーや一階のカフェテリアなどで時間を潰す。スマホで〈臍臓がん〉〈腹膜播種〉〈抗がん剤治療〉

のキーワードで検索をかけては、いろんなサイトを閲覧した。〈臍臓がん〉は早期発見が難しい種類のがんであったが、

身体の不調を感じはじめてすぐに検査を受けていれば、と悔やむ。陽平が珠季のもとへ戻ってきたのは、その日のお

昼過ぎだった。

経過観察を終えたあと、転院先が決まるまで珠季はいつ

たん自宅へ帰ることになった。陽平は奏多を連れて病院まで迎えに来たが、その日も酒臭く、珠季は最初から嫌な予

感がしていた。奏多が情緒不安定だったので、帰りの電車

ぶった。「ねえ」

「もう、何も考えられへんくて。しんどい！」

「もっと自分を大切にしろ」

陽平は視線を逸らせたまま、こくつとうなずいた。

「私、部屋のなか片付けるわ。空気の入れ替えしたら、臭いもマシになるやろ。一時間ほど奏多を連れて公園にでも行つといて」

「部屋の片付けは俺がやる」

「なんで？ しんどくて、こうなったんやろ？」

「俺、オムツ取り換えるのが嫌やねん。人の大便なんて拭きたくない」

「人のって、あなたの子どもよ」

陽平はぶいとりピングに向き直ると、座卓の上やその周りのゴミを集めはじめた。振り返ると、奏多は開けっぱなしの玄関でバギーに乗せられたままになっている。珠季は

奏多のもとへ行き、「ごめんごめん」と抱き上げた。奏多の額に自分の額を当て、目を瞑る。小さな頭蓋骨から伝

わってくる体温。全幅の信頼で伸ばしてくる儂く柔らかな腕。愛らしい天使そのものだ。奏多より自分がかわい

いが哀れでなかった。顔を上げ、リビングに目を向ける。一心不乱に片付ける陽平の横顔を見ると何でもい

から捲し立てたくなってきて、鼻の穴を広げて深呼吸した。珠季はそつと玄関を出て、近所の公園へ向かった。

のなかでは、バギーを畳んだあとと珠季が奏多を膝に乗せた。

三人で自宅アパートに到着し、珠季が解錠しドアを開け

たとたん、カップ麺の汁の匂いとどぶ川のような異臭がぶ

わつと鼻腔を突いてきて、胃液が喉元まで迫り上がってきた。口を抑えて台所へ駆け込む。シンクには、カッププ

ラーメンの器やビール缶、割り箸、封を切ったパックなどが散

乱していて、珠季が手で押し除けても吐瀉物がそれらの上

にかかった。胃液しか出なくなったところで、陽平が珠季

の背中をさすってきた。水道水で吐瀉物を洗い流し、口許

を拭い顔をあげると、リビングの万年床とモノがいつぱい

載った座卓が視界に入ってきた。

「タマちゃん、大丈夫なんか？」

陽平が怯えるように声をかけてくる。

「陽平くん。この部屋、すごい臭いしてるよ」

「ああ」

陽平は俯いて大きく息を吸った。

「うちの臭いもしてる。ちゃんとオムツ換えてやってたの？」

「オムツ交換、やんなくてもうて」

「結婚する前は、ちゃんと一人暮らししてたやん。私がい

なかったの、一週間ほどやん。なんでここまで自堕落にな

るん？」

陽平は珠季から視線を外す。珠季は両腕をつかんで揺さ

振る。

十日後、北摂医科大病院から病床の空気が出たと連絡が

あった。入院の準備をしているあいだ、奏多をどこかへ預

けられないかいろいろ調べてみたのだが、ようやく言葉を

発しはじめた幼児に相応しい施設など簡単には見つからず、

若くて健康な男親も健在なので、役所に相談することも憚

られた。できることと言えば、幼児食を作って冷凍保存す

ることと、これからの成長を見越して衣類を揃えることぐ

らいだ。

衣装ケース一つを奏多専用にして、畳んだ衣類にメモを

挟みながら、陽平に説明していく。

「とりあえず、春物と夏物だけ入れておくから。よだれ掛

けも、五枚あるんだから毎日取り換えて洗ってね。病院へ

は毎日来てくれるんでしょ？ 奏多の様子を見て、どれを

着せてあげたらいいかは、そのとき言うわ」

「うん」

「オムツ交換はちゃんとやってあげてね。病院にいるとき

は私がするから」

「うん」

「幼児食は冷凍してあるけど、チンしたあと、冷ましてか

ら食べさせてやってね」

「うん」

覇気のない陽平の返事にイライラは募っていくが、深呼

吸してガミガミ言いたくなる気持ちを抑える。入院用の衣類を詰め込むべく、クローゼットの奥からボストンバッグを引っ張り出すと、奥に仕舞い込んでいた白木の箱が現れた。母と弟の位牌を保管していた箱だった。ベビーベッドを設置したときに、部屋が手狭になったので仕舞っていたのだ。

母の気持ち、わかる。

自分の限界を悟ったとき、心配の種を摘んでいって、この世の誰にも迷惑をかけないようにしよう。そう思ってた母は正利を追連れにして逝ったのだろう。私を一人置いて逝くなんてと恨みがましく思ってきたけれども、今から考えると、社会に放り出される前の、まだ学校が預かった子どもを全力で護ってくれた時期を取って狙っていたのかもしれない。家庭の問題は家庭で解決すべし、そんな突き放してくる社会なら、世間に見えるようにして死んでいくまでのこと。そういうことなの、お母さん？

柔らかいものが、珠季のくるぶしに触れた。積み木で遊んでいた奏多が、いつの間にか珠季のもとへやってきていた。「マッマ、あなた、あそぼ」と声を出しながら珠季の肩に手をかけ、立ち上がった。

奏多は珠季から離れ、よたよたと歩き出した。「マッマ、パッパ」と声を発しながら台所へ向かう。その先に陽平が立っていたが、足許を見ようともしない。奏多は流しの横

ら離れたくて、そのまま外へ出た。風に当たると、目尻から涙が滲み出てきた。奏多を追連れにして死のうと思う自分と、奏多を虐待してしまう陽平。どちらも大差ないではないか。

「ごめんごめん。ママね、奏多のことが大好きだよ」

新しい入院先では四床の部屋を充てがわれ、翌日からはじまる投薬治療に向けて、健康チェックが行われた。

奏多との時間をできるだけ持ちたかった珠季は、陽平にはパチンコ屋にでも行って気分転換してきてと金を渡し、奏多と一階中庭のテラスで過ごすことにした。テラスの向かいにシアトル系カフェのスタンドがあつて、バギーを牽いて並んでいると、「珠季さん？ 来栖珠季さん？」と聞き覚えのある人工声帯で話しかけられた。声のほうへ振り返ると、ストライプ柄の寝巻きにカーディガンを羽織った堀込牧師が立っていた。顔を合わすのは結婚式を挙げて以来だった。以前は首が隠れるくらいに顎が弛んでコロコロした印象だったのに、首に巻いた包帯から胸元にかけて皺が深く刻み込まれている。ニット帽をかぶってはいるが、眉毛はなくなり睫毛もまばらにしか生えておらず、全身の毛がないのだと想像できた。この声でなければ、牧師だと認識できないほどの変わりようだった。

「牧師さん、ご無沙汰しております。まさか、こんなとこ

まで来て、二段目の抽斗の把手を両手でつかみ、うしろへ倒れるように腰をおろした。抽斗の棚が抜ける。乾物の類が床へぶちまかれ、奏多は驚いて泣き出す。

「こらっ！」陽平は抜けた棚を遠くへやると、奏多の両腕をわしづかみ、背中を二発叩いた。

「何すんのよ！」

珠季は咄嗟に奏多を奪い取った。

「マッマ、マッマ」奏多は珠季の胸に顔を押し当てて泣きじゃくる。珠季は陽平の肩をつかんで、顔を覗き込んだ。

「陽平！ こんなちっちゃい子を叩いてどうするのよ！」

「奏多が悪いことしたからや」

陽平は口を失らせ、床にばらまかれた抽斗の中身に視線を落とす。

「奏多を叩いたのはこれがはじめて？」

「さあ」

「さあって何よ。やってるのね？ 許せない！」

珠季は奏多の衣類をめくり、痣などが残っていないか確認した。いま陽平が叩いた痕も残っていないので、外傷が残るほど酷い折檻はしていないのだろう。しかし、これは序章に過ぎないのだ。このまま自分が入院し、二人きりにさせておくと、エスカレートしていくに違いない。

「いたいーいたいー」と泣き叫ぶ奏多と額をつき合わせ「痛い痛い痛い飛んでけー」と言いながら抱き上げる。陽平か

ろでお会いするなんて」

珠季も寝巻きにカーディガン姿だった。お互い入院患者であることを認め、笑い合う。牧師はバギーのなかを覗き込み、「珠季さんと陽平さんのお子さんですか？」と聞いてきた。

「はい、あと四カ月で二歳になります」

「お名前は何？」

「かなたです。奏でるに、多い少ないの〈多〉と書いて〈奏多〉です」

「ここにいらっしゃるということは、珠季さんも厄介な病気にかかったのですな」

「はい。牧師さんも？」

「咽喉がんで声帯を取ってから、しばらく再発もなく安心してきっていたのですが、次は肺をやってしまった」

「よかつたら、あちらのテラスでゆつくりお茶しませんか？ 奏多のこと、もつとよく見てやってください」

テラスはウッドデッキになっていて、天井は雨風が吹き込まない程度にテントが張ってあった。四人がけのテーブルで向き合って座り、バギーを横につける。珠季も牧師もソイラテを注文していた。奏多には幼児用のふわふわ煎餅を与えながら、我が子の発育ぶりを披露してみせる。人見知りの激しい奏多は、菓子にはあまり手をつけず、横を向いてしまう。

「今日は、陽平さんはお仕事ですか？」

牧師の質問に、珠季は視線を落として首を振った。

「陽平は、今は仕事してないんです。十六時にこの子を迎えに来てもらいます。二人きりで過ごしたくて、外で時間を潰してもらっています」

「そうですか」

奏多が腕を上下にバタつかせ、ふわふわ煎餅の袋が床へ落ちる。音もしない軽くて白い煎餅がバギーから床へと散らばった。珠季はそれを拾い上げながら、「子育ても難しいですが、旦那の教育も難しいですね」と歌うように言った。

「しんどそうですね、珠季さん」

「何言ってるんでしょうね。牧師さんも闘病生活をされているというのに」

「大丈夫ですよ。何でも話してください。婚姻を見届けた牧師として、どんなお悩みでも相談に乘ります」

「私、今日から入院で、治療の辛さはまだ味わっていないんです。ここで弱音は吐けないですよ」

「ここで今という訳ではないですよ。もともと、私が聴ける元気のあるうちにです」

顔を上げると、堀込牧師と目が合った。牧師の柔和な微笑みに珠季はたじろぐ。この人は自分が死に近づいているというのに、どうして人の辛い話など聴く余裕があるのだ

ろう？ 彼を直視できなくて、菓子を拾い上げることに集中した。

「そろそろ病室へ戻らねばなりません」と牧師は言った。

「信徒さんが見舞いに来られるのですよ。珠季さん、私は東病棟の712号室におります。吐き出したいことがありますしたら、いつでも会いに来てください」

4

朝食のトレイを下げに来た看護師が、「旦那さん、お見えになってますよ」と言った。ここで珠季がどう答えるかが、毎日の日課となっている。

「会います。息子も一緒に」

コーンスープ二口と高野豆腐のお浸しを一つしか食べられなかったが、今日はしゃべる元気がある。看護師が去ってほどなく、陽平がバギーを押して珠季の足許へ現れた。奏多を抱き上げ、片腕と脚でバギーを畳む。珠季は奏多へ腕を伸ばしたが、怪訝そうな顔をされた。両脇を支えられながら宙を掻く姿を見て、「マツマだよ、奏多」と声をかけてみる。

「タマちゃんが髪も眉毛もなくなって、誰かわかんようになってしまったんかもな」と陽平は言った。

抗がん剤の投与は、アレルギーテストを経てから本格的

にはじまった。投与中に発熱し、悪寒に打ち震え、意識を失いかけたところで鼻に酸素の管を取り付けられた。いつの間にか眠り、強い吐き気によって目が覚め、そこからはたびたび襲ってくる吐き気と倦怠感で身体がぐたくたになった。陽平は毎日朝夕病院へ来たが、珠季が対応する元気がないときは、病床のカーテンの隙間から手を振ったり、着替えを持ち帰ってもらったりするだけに留めていたのだ。「しゃべる気力が出てきたと思ったら、毛という毛が抜けてしまうんやから」

珠季は自嘲気味に笑う。

「それでもタマちゃんが生きていてくれるだけで俺は嬉しい」

陽平はスツールに腰掛け、膝に奏多を乗せた。奏多の両手首を持ち上げ、珠季に向けて手を振らせる。奏多は「パッパ、あそび？ あそぶ？」と笑顔を見せている。自ずと珠季も笑みがこぼれた。以前のように、陽平から酒の臭いが漂ってこないことにも安堵した。

「陽平くん、ストレス溜まってない？ ずっと奏多と二人きりでしょ？」

「うん、まあ。適度に息抜きしてる」

陽平は隣の病床へ目を向けた。カーテンを隔てて、男性のしゃがれた怒声が聞こえてくる。芝田という男が入院しているのだが、いついつの新聞記事を持ってこいと妻に命

じているのだ。妻は毎日定時にやってきて、甲斐甲斐しく世話をしているのだが、芝田がイライラしているところしか珠季は見ることがなかった。もともとそういう夫婦関係なのか、身体が思い通りにいかない芝田が妻に八つ当たりしているのか。こちらまで影響を受けそうなので、珠季は気に留めず、「息抜きにゲームやってるの？」と質問を続けた。

「うん、まあ」

「それでもいいよ。奏多の傍に居るのなら」

珠季は身を乗り出して、奏多に向けて腕を伸ばした。陽平はひょいと奏多を持ち上げ、珠季の手に預けた。奏多はそっぽを向いて、珠季と目を合わそうとしない。

「ウィッグを付けたらどうかって看護師さんが勧めてくれるんだけど、本当にそうしようかな」

「このままずっと髪は生えてこないん？」

「抗がん剤治療が済んだら生えるみたいよ、また」

「そんなら帽子を被っておけば？ 奏多は照れ臭いだけやろ。俺は気にならんから」

奏多のシャツの袖口に大きな茶色い染みができていた。その袖をつまんで珠季は鼻を近づけてみる。醤油の臭いがした。醤油をかけるような食事を与えているのかと訝しんだが、袖の下から擦り傷が覗き、さらにギョツとした。袖をめくり上げると、手首の下のように、くつきりと線状の

擦り傷が皮膚に刻み込まれていた。左袖もめくってみる。左腕にも同じような擦り傷があった。

「何これ？ いつからなつたの？」

「あ、陽平は奏多へ手を伸ばす。包帯しとけばよかったな」

「そういう問題とちゃうやん。これは何なん？」

陽平は口を失らせ小首を傾げた。

「湿疹やろ。一週間くらい前からできてた」

「両腕に、しかも同じ箇所に」

「理由はわからんけど、これ以上ひどなったら皮膚科に連れてくわ」

「うん、お願い。なんか気になる」

珠季が奏多のシャツの裾をめくって皮膚の点検をはじめると、「もうええやろ」と陽平は声を荒げた。「今日、仕事の面接があるねん。もう帰らな」

陽平は奏多の背中から腕を回し、珠季から奪い取る。奏多はその腕に抗うことなく、陽平の首にすがりついた。

「私、それまで奏多を見とこうか？ 面接終えたら迎えに来てよ」

「そんな無理やろ。ここは個室とちゃうねんで。タマちゃんやって、すぐに身体しんどなるやろ」

「仕事をはじめたら奏多はどうするのよ？ ここで見ておくしかないやんか」

「何とでもなるわ」

分が嫌だった。

佳子は三時過ぎにやってきた。家族を除けば、見舞いに訪れた最初の客人だった。彼女は果汁百パーセントのミニパックのジュースを二十個ほど持つてきて、珠季が飲んでもいいし、家族にもあげてくれ、と勝手に冷蔵庫を開けてなかに入れた。

「陽平くんは？」と聞くので、「今朝、来てくれた」と答える。思わず「いつもは夕方もあるんだけど、今日はもう来ないかな」と言ってしまったので、「なーに、喧嘩でもしたん？」と佳子は聞いてきた。

「喧嘩なんかしないよ。私、まだ、そんな元気ないし」

「髪の毛、抜けちゃったよね。ウィッグ買ってきてあげようか」

珠季は照れ隠しに、つるつるの頭を撫でる。

「帽子を被ればいいんじゃないって、陽平は言うんだけど」

「あのさ、陽平くんがここへ来るとき、子どもは誰かに預けてくるのかしら？」

「連れてくるわよ。預けられる人なんていないもん」

「そうなのかい。うーん」

佳子は顎に手を当てて、意味ありげに珠季を見つめた。

「なに？」

佳子はじつと珠季の瞳を覗き込み、「私ね、弱っている人のお見舞いなんて本来なら行かないの。本人も嫌だろう

陽平がバギーを拡げ、帰り支度をはじめ。珠季が腰を動かすと、「来栖さん」と看護師の声がした。カーテンが外からジャツと引かれる。朝食の膳を下げに来た同じ看護師が、薬剤のバッグを持って現れた。

「今日も栄養剤の点滴しときましようかねえ。まだ、あまり召し上がれないみたいですから」

「はあ」

看護師は点滴装置にバッグを取り付けはじめる。珠季が左袖をまくり、仰向けになっているあいだに、陽平は奏多をバギーに乗せて帰っていった。

一眠りしたあとスマホを確認すると、LINEに佳子から連絡が入っていた。三時ごろ見舞いに行っても大丈夫かという質問だった。三時といえは仕事ではないのかと疑問に思ったが、スマホの日時を見ると日曜日になっている。珠季は「お見舞い、とても嬉しいですよ。どうぞ手ぶらで気楽に来てください。三時ね」と返信した。スマホを閉じたあと、陽平は日曜日に仕事の面接に行ったのか、とモヤモヤした気持ちで再浮上してきた。奏多の腕の擦り傷が発覚したとたんに、慌ただしく帰っていった陽平。追及したい気持ちと必死に抑えて、あのあと点滴を受けたのだ。毎日、妻のやつれた姿を見ても、生きていてくれるだけで嬉しいと言う夫。それなのに、心穏やかでいられない。そんな自

なと思うから」と言った。

「何が言いたいの？」

「あんたにね、伝えたほうがいいと思うことがあったのよ」

「陽平のこと？」

佳子は珠季を見つめたまま目を瞬かせる。

「私ね、今はフリーだから仕事帰りにあそこに寄って行くのよ」と彼女は右手でダイヤルを回す仕草をした。「パチンコ。そこで何回か見かけたのよ、陽平くん。もちろん彼一人よ。昨日見かけたとき、ドル箱がこれくらい積んであつてさ」とベッドの高さぐらいの手で示して見せる。「あんだけ当てるんなら、一時間じゃ済まないんじゃないかって、さすがに子どものことが心配になった。あんたが大変な病気だつてわかってるし、治療に専念させてあげるべきとも思ってたけど、でも、もしものことがあると嫌だから、今日は伝えに来たの」

「ありがとう」珠季は軽く何度もうなずいた。「なんか、そんな気はしていたの。今すぐ、電話して確かめてみる」

珠季が両脚をベッドから降ろしにかかる、すぐさま佳子が腕を支えた。

「電話しに行くの？ 大丈夫？」

「うん。トイレにだって自分で行けるから。エレベーターの近くに休憩所あったでしょ。あそこでしたか通話は無理なのよ」

スリッポンに足を入れ、床置きしてあるボストンバッグをまさぐる。入院時に着てきた前開きのシャツとズボンに着替え、病院内でいつも着ているガウンを羽織った。スマートフォンやら最低限の私物と、佳子がくれたジュース数本をバッグに入れる。

「何でバッグなんか持っていくの？」と佳子は尋ねる。珠季は人差し指を口に当て「しっ」と言った。佳子はそれ以上問はず、休憩所までついて来た。

陽平に電話をかけてみた。電源を切っているのか、通信会社のお決まりの文言が流れただけだった。陽平の言う通り、仕事の面接に行っているのかもしれないが、そうだとしなくても奏多は放置されていることになる。

珠季がエレベーターへ向かうとすると、「行つてとちめるの？」と佳子が訊いてきた。

「いや、奏多が家でどうなっているのか確かめる」

「そんな身体じゃ無理なんじゃない？ 家の鍵貸してくれたら、私が見てきてあげるわよ」

「これは私の家族の問題だから。私が行かなきゃだめなの」

「外出許可出してもらえないの？」佳子が先回りしてナースセンターを指差す。「え？ 素通りするの？」

珠季は人差し指を唇に当て、うなずいた。

「こんなじゃ死なないから」

一階の売店へ行く体でエレベーターに乗り込んだ。すぐ

の泣き声は、一歩一歩近づくと大きくなってゆく。

204号室は台所の換気扇が回ったままだった。インターホンを押しても陽平が出てくる気配はない。珠季は自分の鍵で玄関の扉を開いた。

「パッパ？」と奥から声がした。

「マッマだよ。奏多ごめんね」

奏多がバタバタと玄関まで駆けってくるかと思いきや来なかった。「いたい、いたい。あーあー」という叫び声に導かれて寝室まで行くと、ベビーベッドのなかで奏多が仰向けで脚をバタつかせていた。覗き込んでみて、目が点になった。奏多の両腕はベビーベッドのゲージとセロテープで繋がれていたのだ。セロテープは奏多の引く力で細く捻れて紐状になり、柔らかな皮膚に食い込んでいる。

「酷すぎる！」

珠季は三段ボックスからハサミを持ち出すと、セロテープを腕の近くで切断し、奏多を胸に抱き上げた。奏多はしゃっくりをしながら嗚咽を漏らす。

「もう大丈夫よ。テープも痛くないように取ってあげるから」

奏多を膝に乗せて、片腕ずつ絡まったセロテープを剥がしていく。落ち着きはじめて奏多の身体が依然として熱い。《熱中症》という言葉が頭をよぎる。珠季はバッグからミニパックのジュースを取り出して、ストローを挿して奏多

に手すりにつかまりたくなるのは、筋力が落ちてきているからか。一階に着いたとき、佳子は珠季の腰に腕を添えてきた。そのあと彼女は付かず離れずの距離で歩調を合わせてきたが、売店前に来て、珠季の腕をつかんだ。

「面会者専用の入場口で許可証を返してこないといけないから、ここで待ってて」

「あなたは、さっき言ってたバチンコ屋へ直行してくれる？」

珠季は佳子の手をそつと振り切る。

「私、ニット帽買ってから行くから、先にそっちへ行つて」

「買い物も付き合うよ。方角同じなんだから、一緒に行けばいい」

「本来、弱っている人のお見舞いに行かない人なんですよ？ 察して。いちいち氣遣われるのすごく嫌なの」

珠季は売店に入ってしまった。

降車したタクシーが角を曲がって見えなくなったとたん、ふつと耳に子どもの泣き声が届いた。上のほうから聞こえるその声は、奏多のものだと思われた。脚力は恐ろしく衰えていて、手すりにすがりつくようにして階段をのぼり、二階へ上がる途中から息切れしてしまい、背中で息をしながら壁伝いに204号室まで歩を進めた。断続的な子ども

の口許に運んだ。ズボン越しに伝わってくるオムツの熱も気になってきて、立たせてズボンを脱がせた。

陽平はこれを習慣化しているのか？ 下手したら奏多は熱中症で死んでしまうし、帰宅してからも、テープを剥がす作業やオムツ交換を一気に対処しなければならぬのに。それでも、一時でも現実から逃れたいというのか？ 怒りで唇が震えてくる。結局手首に巻き付いたセロテープは、ハサミを入れることでしか剥がせなかった。

使用済みのオムツをベランダのゴミ箱に捨てているとき、階下からこのアパートの大家が手を振ってきた。

「来栖さん。お顔見るの久しぶりですねー」

珠季は軽く会釈する。

「来栖さん、お宅に用があるから、今から伺います」

大家は数分後に204号室にやってきた。下ではしていなかったエプロンを装着している。これは家賃を徴収するときのお決まりのアイテムで、前付きのポケットに財布やら領収書やらを忍ばせているのだ。振込み手数料がかかるので、来栖家に限らず、このアパートでは家賃を手渡しする世帯がほとんどだった。

「うちの家賃、旦那がまだ支払いに伺っていないのでしょうか？ 私、入院しております」

「ごめんなさいね。奥さんが大変なときに、こんなこと」

「少々、お待ちください」

足許にまとわりつく奏多を抱き上げ、珠季は寝室へ向かった。三段ボックス二段目の抽斗を開ける。奥に忍ばせているクッキーの缶に、通帳や印鑑が収められている。缶の蓋を開けてみた。封筒がなくなっている。珠季が入院する直前、家賃をそこへ入れておいたはずなのだ。陽平に月末支払っておくよう頼んでいたのに、パチンコに注ぎ込んでしまったのだろうか？　とりあえず、今日じゅうに家賃を払わねばと、通帳を取り出した。残高の記帳は珠季が最後にATMを利用した日付のままになっている。珠季は大家に、今からお金を下ろしてくるので、あとで伺いますとその場を取り繕った。

奏多をバギーに乗せて、最寄りのATMへ向かった。途中、自動販売機でスポーツドリンクを購入し、哺乳瓶に移し替えて奏多に飲ませる。このあと陽平の帰宅を待ち、奏多をどう託せばいいのだろうか？　陽平のやっていることは許し難い。だからといって奏多を病院では養育できない。

平日だと列ができているATMだったが、誰もいないので、珠季は慌てることなく傍らにバギーを止め、カードを自動支払機に突っ込んだ。家賃と予備に一万円上乗せした額を引き出す。金を受け取り、ご利用明細票と通帳を見比べる。数字が合わない。十三万円がどこかで引き出されていた。陽平が家賃を使い込み、さらに生活費としていくらか引き出したとしても、この額は大きい。珠季が働きに出

ていたときは、何か支払いが発生したら、その都度陽平は報告してきた。あれは年上の妻が目光らせていたから、成立していたというのか。毎日病院へ来てメソメソしている男がそうだと思うと、珠季は吐き気をもよおしてきた。口にハンカチを当て、息を整える。余命三カ月と宣告され、それでも前向きに死んでなるものかと思ってきた。投薬治療をはじめて、苦しくても歯を食いしばって耐えてきた。しかし夫は、陽平は、どうすれば妻が治療に専念できるか考えられないのだ。

「マッマ？」と奏多が頓狂な声を出す。はっと我に帰ると、ガラス扉の向こうに人が立っていた。珠季はATMを出て、バギーをなにかば支えにして家路を辿った。

大家に家賃の支払いをしたあと、佳子からLINEの着信があった。パチンコ屋に行つてすぐには陽平の姿が見当たらなかったのだ、しばらく張つて待つていたら、いまま店してきたと。どうする？　と聞いている。珠季は「奏多は無事に助け出せたから、何もしくなくていい。どうせ注意してもふて腐れるだけだから」と返信した。スマホをバッグに入れ、バギーを押して自宅を離れる。

「マッマ、おうち？　おうち？」

奏多が顎を上げ不思議そうに聞いてきた。

「おうちには帰らないんだ」

帰るところといっても病院しか思いつかない。どこへ行

き、どうしたいのかも考えられなかった。来た道を辿っているうちに、人波に流され、駅に来て、モノレールに乗り込んだ。降車して病院へ向かつてみるものの、時間稼ぎに立ち止まって奏多に話かけるぐらいしかできない。

スマホに電話がかかってきた。病院からだった。病室から居なくなつて何時間も経つが、夕食の時間になつても戻つてこないの、安否確認することになつたと。そうか、もう夜なのかと珠季は空を見上げる。紫の鱗雲の間から赤い光が覗いている。北摂医科大病院は最上階まで見渡すには、口が開いてしまうほど背の高い建物だった。「すみません。家族と一階でお茶を飲んだり、中庭で過ごしていました。今から戻ります」と答えて電話を切る。絶望した。奏多と一緒に帰る場所はなかった。

建物に入り、エレベーターに乗り込む。消化器内科のある十階ではなく、一番上の十四階のボタンを押した。

十四階で降りたとき、家族連れ一組が乗り口で待っていた。そのなかの珠季と同じ年くらいの女性が、「土日祝は休みです」と声をかけてきた。珠季は小声で「ありがとうございます」と言い、彼らと入れ替わるようにして降りた。スカイレストランがすぐ近くにあったが、入り口に「定休日」の札を掲げている。エレベーターへ引き返す目線の先にはガラス壁があつて、その向こうに屋上のコンクリートの床が広がっていた。どこかに出入り口がないか壁

伝いに歩いたが、外へ出る経路は見つからない。空はさらに青みを強くし、明度を落としていた。凸レンズを覗いたように視界がぼやける。バギーと一緒に握りしめていたハンカチで目元を拭い、鼻をかむ。ここが自分の最後の居場所かもしれない、と思う。今日はもう、誰もここへは来ないだろう。奏多と朝まで一緒に居られるのは、ここぐらいしかない。

「来栖さん？」

名前を呼ばれて、身体がビクリと反応した。聞き覚えのある電子音声。振り返ると、スカイレストラン横の休憩所から、堀込牧師が車椅子に乗つて現れた。彼は車椅子のレバーを前へ倒し、珠季に近づいてきた。珠季はもう一度目元を拭いた。

「牧師さん、どうしてここに？」

「土日は、ここで過ごすことが、多いのです。人があまり来ませんからね。聖書を、読みます」牧師はゼーゼーと呼吸する。

「そうですか」

「泣いて、いらつしやる？」

珠季は俯いた。涙が溢れてくるので、ハンカチを目元に当てる。

「来栖さんのことは、ずっと、気になっていました。ゆっくり話を、聴かせてもらえませんか？　さあ、あちらの、

休憩所に」

休憩室で腰掛けてしばらくは、珠季は泣くことしかできなかった。気持ち収まるまで会話ははじめられない。牧師はなぜか折り紙を持っていて、かさこそと折っては奏多に渡す。奏多が「なあに？」と聞いてきたので、珠季はようやく「カエルだよ」と声を発することができた。

「牧師さん、今日はね、無断で自宅に戻っていたんです」「そうですね」

「旦那のことが信用できなくて、この子を連れてきてしまいました」

珠季はバギーから奏多を抱き上げて、膝に乗せた。

「それで、行き場がなくて、困って、泣いていらしたと」「はい。どんなに頑張っても、私はこの子が自分の足でしっかりと立てるまで生きることができない。それが辛くて悲しいんです。気がつくと、この子と一緒に死のうなて考えています。そんなことするくらいだったら、旦那に預けたほうがマシだってわかってるんですけど」

「なるほど」

牧師はさらに水色の折り紙を折りはじめる。「今度は、ヨットを、作ってあげましょう、奏多くん」

あれこれ意見せず聴くことに徹している牧師を見て、珠季は洗いざらい話そうと思った。

「私の母の話、したことありませんでしたよね？ 自殺し

「下心で、成立する、エロス。お互いの、信頼関係で、成立する、フィリア。これらは、条件が満たされないと、苦しみます。あのとき、アガペーの話を、少し、しました。見返りを求めない愛、自己犠牲の愛、です。キリスト教は、この愛の実行を、教えています」

牧師との対話を終えたあと、珠季は陽平に電話をした。

奏多を病院へ連れてきたことを打ち明ける。今日自宅へ戻り、ベッドに繋がれた奏多を放っておけなかったと言ったものの、敢えて責め立てたりはしなかった。堀込牧師と病院内で再会し、辛い気持ちを聴いてもらったと訥々と話す。病気は自分にとっても家族にとっても辛いことだから、キリスト教の教義によって、救われたいと思ったのだと。陽平は「タマちゃんだけズルいわ！」と駄々を捏ねるように言った。

「ズルい？ 何が？」と聞き返すと、『そっちに行くわ』と唐突に電話を切られた。陽平はそれから三十分後に病院へ現れた。珠季は自分の病床のある階の休憩所で、奏多と一緒に出迎えた。

「タマちゃんだけズルい」

陽平の目がキラキラと潤んでいる。はじめて珠季に好きだと告白してきたときの、無垢な少年のような表情だった。駄々っ子の体で来ることを想定していたので、珠季は拍子抜けした。

たんです。学校で問題ばかり起こしていた弟と無理心中しました。私が高校三年生のときです。私一人置いて逝くなんてと恨みがましく思ったり、私が悪かったのかと自責の念に駆られたり、しましたけど、働いて淡々と日々を過ごし続けて、心に硬い殻を作っていました」

「陽平さんが、その殻を、破ってこられたんですね」

「そうです。自分がそんな殻を作ったことがなかったら、陽平とは結婚しなかったと思います。まったくの子どもなんですよ。でもね、無邪気にタマちゃんタマちゃんって寄って来られて、やっぱり嬉しかった。心に血が通ったと思いました。あとで苦しくなりましたけど」

「珠季さんは、全部自分で、やろうとするから、苦しいのかも、しみません」

「そうですね。私はたぶん、人をどこかで信用しきれいません。この子にしたって、ものすごく生命力があつて、旦那にどんな育てられ方しても立派な大人になるかもしれないのに。この苦しみは、誰かのせいというより、私の内側から作り出しているんでしょうね」

「珠季さん、エロス、フィリア、アガペーの話を覚えておられますか？」

珠季は自信なさげにうなずく。結婚講座に出てきた教義だったことは覚えていたが、それぞれが何であったのかまで、すらすらと説明することはできなかった。

「何がズルいって言いたいのか？」

「この状況、タマちゃんもやけど、俺も奏多も救いがないやんか！ どうしたってタマちゃんがいなくなつてからの世界を想像してまうやんか！」

バギーのなかで奏多は首を左に傾けてすやすやと眠っている。

「俺もタマちゃんと一緒に牧師さんの話聴く。少しでも不安な気持ちを除いてもらって、穏やかになりたい。奏多にやさしくなりたい」

陽平は膝を折り、奏多の顔を覗き込んだ。手の甲を奏多の頬に当てて、「ごめん、ごめん」と呟いた。

翌日、堀込牧師によるキリスト教講座は、『ヨハネの福音書十四章一節』からはじまった。

あなたがたは心を騒がせてはなりません。神を信じ、またわたしを信じなさい。わたしの父の家には住む所がたくさんあります。そうでなかったら、あなたがたのために場所を用意しに行く、と言ったでしょう。わたしが行って、あなたがたに場所を用意したら、また来て、あなたがたをわたしのものと迎えます。わたしがいるところに、あなたがたもいるようにするためです。

堀込牧師が聖書を読みだすと、休憩所内の視線を一気に集める。牧師の人工声帯音はテレビからの笑い声を一蹴する。陽平の膝に座る奏多も、その声の独特な響きに吸い込まれるように、目をかつと見開いて牧師の口許を観察している。

「そのころマリアは、山地の、ユダの町に、急いで出発し」牧師はゼーゼーと息を切らせた。「陽平さん、続き、読んで」「あ、はい」陽平は背筋を伸ばし、聖書を机に立てた。

「ザカリヤの家に行つて、エリザベトにあいさつした。エリザベトがそのあいさつを聞いたとき、胎内の子はおどり、彼女は精霊に満たされて声高く言った、『あなたは女の中で祝福された方で、あなたの体内に実るものも祝福されています。主の御母が私を訪問してくださったのですか。これほどのことがどうして私に恵まれたのでしょうか。何としたことでしょうか、あなたのあいさつのみ声が私の耳に入ると、私の子は体内で喜びおどりました。ああ幸せなこと、主から言われたことの実現を信じた方は』」

「そっか、この子がイエスか!」

陽平が唐突に大声を出す。休憩所にいた人たちが怪訝そうに眉をひそめたが、珠季と目が合うとテレビへ視線を向け直した。堀込牧師は静かに首を振る。

牧師と別れたあと、珠季と陽平は奏多を連れて一階のカフェテラスへ向かった。その日受けた講義を振り返るためだ。バギーのポケットから三人分のミニパックのジュースを取り出し、テーブルに並べた。

「今日の講義はなんかモヤモヤした」

「そうなん?」

陽平はオレンジジュースにストローを挿し、奏多の口許へ運ぶ。

「エリザベトの表現がすごく嫌だった。(うまずめ)って言葉が特に。今の時代、完全に差別用語でしょ。老人ながら身ごもった、とかもね。私もそっちの人間やから」

「タマちゃんは全然ちゃうよ」

陽平は笑いながらも、奏多の口を注視している。奏多はストローの先を咥えた途端、勢いよく吸いはじめた。

「全然ちゃうって?」

「だってエリザベトは旦那とずっとやってきたけど、年取るまで子どもができひんかったんやろ? タマちゃんはちゃうやん。俺とやるまで処女やったやん」

陽平の声がぞんざいに大きいので、珠季は「ちよっと!」と手を振って制した。陽平は歯を見せて笑っている。

「タマちゃんは(うまずめ)やなくて(うめうめ)や」

珠季は慌てて周囲を見渡す。カフェテラスの隅に、同室の患者の身内がいた。カーテンを隔てた隣人・芝田の妻だっ

「この場面は、マリアが、親族のエリザベトに、会いに行ったというくだりで、エリザベトがマリアから、挨拶を受けて、胎内の子が喜んだと、言っています。その胎内の子が、ヨハネです」

「へー、そうなんだ」

陽平は口を尖らせながらうなずいている。珠季はエリザベトに対する表現に引つかかっていた。若くて美しいマリアが、神の子を宿したことをなかなか信じないので、天使から、神にできないことはない、うまずめの老人エリザベトだって身ごもったじゃないか、と説得されるのだ。そのあと、マリアがエリザベトを訪問するのだが、逆にエリザベトに祝福される。エリザベトは、あなたは神の寵愛を受けて神の子を身ごもった聖なるお母上、そんな方に挨拶されて私のお腹の子も喜んでいきますとマリアに言う。このくだりも珠季は引つかかる。エリザベトがそこまでへりくだる必要があるのだろうか? マリアは自分が選ばれた人間であることを自慢しに來たとしか思えない。現代まで受け継がれる若い女信仰は、この時代から確立されてきたのだ、きっと。

三日に一回のペースで開かれることになったキリスト教講座、場所は呼吸器内科がある東病棟の七階休憩所だ。車椅子生活になった牧師は体力の衰えも著しく、二十分の講義が精一杯だった。

た。ボブヘアの頭髪は、銀色のヘルメットを被っているかのようだ。あんなに白髪が多かったのだろうか。一瞬目が合ったので、珠季はさっと俯いた。

翌日、トイレへ行こうと病室を出るとき、隣のベッドのカーテンがすべて引かれ、掛け布団もなくなり、もぬけの殻になっていた。芝田が退院することを意味していた。芝田の退院は数日前から予兆はあったが、通院で抗がん剤治療を進める患者もいるので、そういうことだと思い、特に挨拶も交わさなかった。カフェテラスでの一件もあったので、芝田の妻と今朝顔を合わせたときにも、自分の存在など忘れて欲しいと思っていた。

トイレから引き返す途中、休憩所の前で、芝田の妻が挨拶してきた。「今日で退院するんです」と言って弱々しく微笑む彼女に、「通院に切り替えますか?」と珠季は尋ねた。「あ、いえ」芝田の妻は小さく首を振る。「ホスピスへ移るんです」

「そうなんですか」

この返しが正解かどうかはわからない。同室の患者なのだから、それが死に支度であることは暗黙の了解である。

「あなたに差し上げたい本があるんですけど」

「はあ」

「これなんですけど」

芝田の妻はトートバッグに手をつ込み、茶色いカバーの文庫本を一冊取り出した。「ローンウルフを生まないために」というタイトルで、啓発本の類いだと思われた。著者名が「芝田行雄」となっている。

「これを書かれたのはご主人？」と彼女の顔を覗き込む。

芝田の妻は「そうです」とうなずいた。「ルポライターなんです。これが遺作になりそうです」

「買いますよ」

本を裏向けて値段を見ようとすると、芝田の妻は「いいんです」と遮った。

「主人は自分の書いたもので救われる人がいればと、命を削って仕事してきました。だから何も言わずに貰ってください。そして読んでもらえたら、主人も救われます」

「わかりました。必ず読みます。感想も送ります」

「感想なんていいんです。押し付けがましくてごめんなさいね」

彼女は一礼するとナースセンターのほうへ行ってしまった。あまり面識のない人から本を貰うことははじめてだったが、これも病院という生死に関わる場所ならではだと珠季は真摯に受け止めた。

珠季の退院日が決まった。白血球の数値に異常は見られず、抗がん剤の副作用が想定範囲内だったので、二回目の

かりました。牧師にもあらかじめ伝えておきますね」と言った。珠季は夫人が病室へ戻るまで、小さく手を振って見送った。

その晩、退院していった芝田側のカーテンを見つめながら、自分の病状について考えた。入院するとき、一階のカフェの前でたまたま出会った堀込牧師。あのときはまだ車椅子ではなかったし、息苦しそうではなかった。あれから自分の抗がん剤治療がはじまって、三週間ほど寝込んでいるあいだに、牧師は一気に衰えた。がんという病はあんなふうに自分の身体も蝕んでいくのだろうか？

なかなか眠れず、枕元に置いていた芝田の妻からもらった文庫本を手にとってみる。目次には「O大学附属小学校での無差別殺傷事件」や「A駅前通り魔事件」など、過去の凄惨な事件名が上がっていて、思わず本を閉じてしまった。たしかに、それぞれの事件の背景を追ったルポルタージュであれば、命を削って書いたのだろう。しかし、未来の自分を想像している真っ只中で、こういう類いの本は読めなかった。芝田の妻も看病している人間なら、患者の心理状態がわかりそうなものなのに。

読書灯を消して、目を瞑った。読んでもらえたら、主人も救われます、と言った芝田の妻が儼に浮かんでくる。身体や気分が少しでも楽だと感じた日に、ちびちび読んでいこう、そう思い直した。

投与からは通院で治療が進められると診断が下りたのだ。

その報告もしようとキリスト教講座に臨んだが、いつもの場所待っていたのは堀込夫人だった。顔を合わせたのは結婚式以来だったが、夫人は陽平のことをよく覚えていて、姿を認めるなり両手を合わせて深々と頭を下げた。

「ごめんなさいね。牧師は今日、話すのが困難で」

「具合が良くないんですね？」

珠季の脳裏にゼーゼーと息を切らせながら話す牧師が蘇る。

「朝食のとき咽せちゃって、ちよつと大変だったんです。

今は落ち着いて眠っていますけど」

「私、明日退院することになったんです。でも、病院へはたびたび来ることになるので、よかったら携帯の連絡先を教えてもらえませんか？」

「では、私の連絡先を教えてください。牧師はメールを打つのが苦手ですし、声もアレですから」

バギーから「ぼくしさんはー？」と素っ頓狂な声がする。陽平が「今日は疲れてるんだって」と奏多の手を取ってぶらぶらと振った。夫人が教えてくれた番号に、珠季はその場でショートメールを打った。

「牧師にもしものことがあれば、すぐに連絡いただけないでしょうか？ さいごにお礼が言いたいのです。来栖珠季」

珠季からのショートメールを読んだあと、堀込夫人は「わ

退院してからの珠季は、お金のことばかり考えていた。退院の際に請求された額を見て、別の現実を突きつけられたのだった。

がんの初回発見でステージⅣだったため初回治療が百万円を超えていた。定期預金を解約して、その日のうちに支払うことはできたものの、自分の体調のことばかり気にしていられないと強く思ったのだった。がん保険は、契約が成立する前に入院したので結局加入できなかった。高額療養費制度を調べてみたのだが、医師から勧められている抗がん剤のなかには適用外もあって、がん保険に加入できなかったことは最先端医療ができないことを意味していた。

これまでの治療で使ったお金、これから出てゆくであろう医療費、育児手当、有給消化で得た丸源食品からの給与、日々の生活費など、預金からすべて足し引きし表にして陽平に示すと、彼は「新聞配達のパイト、しようと思う」と言い出した。それでもいいと珠季は思った。自宅療養しているあいだは自分が育児を担えるというものの、再入院

「文芸思潮」編集部員募集

有給 大卒以上／要編集経験・文章力
履歴書送付 編集部まで

bungeisc@
asiawave.co.jp
五十嵐まで

したり、歩けなくなるほど病状が進んでいくことを思うと、陽平にフルタイム労働を望んでも継続させられない。キリスト教に精神的な救いを求めてみたものの、生活面では機能不全を起こしている家族なのだった。思考が行き詰まったときには「アガベー、アガベー」と珠季は唱える。アルバイトとはいえ、陽平は働く気になつてくれた。これも神の思召しがあったからこそポジティブに考えようとした。

二回目の抗がん剤投与がはじまり、珠季は再び嘔吐に苦しんだ。その症状がやや落ち着いてきた頃、芝田の妻から貰った本を読みはじめた。ヘロンウルフを生まないために。ヘロンウルフとは一匹おおかみの意味で、芝田は過去の凄惨な無差別殺人事件を、社会から孤立した人たちの破れかぶれのテロだとし、それぞれの背景を一つ一つ取材していた。いくつかの実例をあげたあと、日本の資本主義社会のなかで、一九九〇年以降、生きていく最低限の賃金すら得られない非正規雇用労働者の実態を、ときにはグラフで示していた。

自分が「失われた世代」であると思ひ込んでいたけれども、この本によって、逆に自分の雇用はずっと護られてきたことを自覚した。ひたすら地味で潤いのない暮らしを続けていたが、ヘロンウルフではなかったのだと。それは高校在学中のあのときだったから、人間味のある担任がいた

からかもしれない。バブル崩壊直後のあのとき、社会から振り落とされたヘロンウルフは母の裕子だったのだ。それなのに、母を追い詰めるようなことを言ってしまった。弱い者を助ける正義ではなく、社会常識的な正義を振りかざして。そしてこのままいくと、陽平をヘロンウルフにしようと思った。キリスト教の教義に触れ、陽平は心が入れ替わったかのように働き者になった。夜明け前の朝刊配達、昼過ぎの夕刊配達を欠勤することなく続けているし、家にいるときは珠季に代わり、奏多の食事や入浴、排便の世話を積極的にやってくれている。しかし、お金にまつわる大事な書類を一人で対処できるほど、しっかりしてきたわけではない。芝田は著書のなかで、労働者階級にもなれないアンダークラスにシングルマザーをあげていたが、陽平だって幼い奏多を抱えていては、その場しのぎの労働で食いつないでいくことになるだろう。当然貰えるものを貰い損ねること、騙されて散財することもあるだろう。今はよくても、珠季が死んだあと、陽平は再び自暴自棄になるに違いない。

芝田は最終章に「ヘロンウルフを生まないために」と見出しをつけ、彼の考える理想の社会について提案をはじめた。その章を読んでいると、珠季は手の震えを抑えることができなかった。

主人は自分の書いたもので救われる人がいればと、命を

削って仕事してきました。

芝田の妻の言葉が蘇ってくる。私、救われています、あなたのご主人が書いたもので一筋の光を見たような気になつています、と彼女に語りかけるように読む。そして、自分も病に侵された人間だから、残された者に何ができるかを考えて、やるべきことをやって死にたいと共感した。

誰にも迷惑をかけたくなかったか、そんな意地は一切捨てよう。この病にかかっただけから、そんな意地はかなり捨ててきたけれど、それでも本質的に自分はそう思ひ続けてきた人間で、どこかいつもパンク寸前だった。そのパンク寸前の生き方を、陽平や奏多に押し付けてはいけない。愛しているんだ二人を。自分に愛する意味を教えてくださいました人、一生を振り返ってみても陽平と奏多しかいなかった。

二回目の抗がん剤の副作用が収まり、頭髮が二センチほど伸びた頃、珠季は陽平と奏多を連れて、北摂晴ヶ丘教会を訪れた。教会はコンクリートが黒ずんだりすることなく、珠季たちが結婚式を挙げたときと変わらない美しさを保っていた。隣に堀込牧師の自宅があるのだが、牧師は一週間前に退院し、自宅療養に切り替えていた。

今後の生き方について相談があると連絡を取って見たところ、堀込夫人からは夫はもう筆談しか出来ないが、それでもよければと返答があった。牧師はもう他人の相談に乗

れる身体ではないのだと珠季はいったん辞退したが、堀込夫人は夫は命尽きる直前まで誰かを救って差し上げたいと思ひ続けている人ですから、どうぞ遠慮なく来てください、ただ以前より弱っているの、そのことでどうか面食らわないで欲しいと言ってきた。堀込牧師は、自分だけでは力及ばぬこともあるだろうと、現在教会の代表を任せている若い牧師を同席させるつもりでいるらしい。それならばと珠季は陽平と何度も話し合い、意志をしっかりと固めてきたのだ。

堀込邸は玄関のたたきから手すりまで張り巡らされていて、バリアフリー化が進んでいた。家全体は洋風なのだが、牧師の寝室として案内されたのはトイレの前にある引き戸の和室だった。引き戸はずっと開放状態のようで、堀込夫人は部屋に入る前から「お父さん、来栖さんお見えになりましたよ」と声をかける。

堀込牧師は枕側を起こした状態で介護用ベッドの上にいた。鼻には吸引器を付けていた。苦しそうだが目を開いて、来栖一家を認めると、布団に乘せていた手を片方だけゆっくり浮上させた。陽平に抱えられた奏多が「ぼくしさん？」と尋ねる。堀込牧師は浮上させた手を軽く拳にして、宙を掻くように前後させた。珠季たちは手前に置いてある座布団を避けながら、おずおずと枕元に近づいた。

「牧師さん、もう一度お会いできてよかったです」

珠季は胸がいっぱいになり、用意してきた相談事などどうでもよくなっていた。陽平が奏多を牧師に近づけ、小さな手を握らせる。奏多は固まって、瞳を牧師の顔にロックオンしている。

戸口から黒い聖職服の男が入ってきた。男のうしろに堀込夫人がいて、「こちら、北摂晴ヶ丘教会代表の村尾牧師です」と紹介する。

村尾が「はじめまして来栖さん、ご相談は私が承ります。教会に何かお願いがあるのですよね？」と言うと、ベッドに横たわる堀込牧師から息を吐く音がした。この人を信用してください、と言いたげであった。

「私たちの相談なんて。えっと、今日は堀込牧師のお顔を拜見できるだけで十分です」

珠季は村尾と堀込夫人に深々と頭を下げた。

「何を恐縮しているの。そうやって欲しくなかったのよ、私たちは」堀込夫人は優しくしたしめる。「お父さんもあなたも次があるなんて悠長なこと言っていられない人なんだから、できるときにしましょうよ。今日はね、お父さん調子いいのよ。だからお話聴かせてくださいな。さ、こちらの座布団に座って」

突っ立っている訳にもいかず、珠季は座布団に正座した。陽平も隣に腰をおろし、奏多を膝に乗せる。

「はじめまして、村尾牧師。こちらにいるのが夫の陽平で、

最初は今後のことを話し合うなんて、とてもできる状態ではなかったのですが、堀込牧師のおかげで冷静にお互いを尊重しあえるようになりました。主が私たちをそのように導いたのだと思っています」

「我々が力になれたようで本当によかったです。堀込牧師もそのように仰っておりました」

「お願いというのは、この子、奏多のことです」珠季は奏多の手を取り、軽く振ってみせた。「今の日本の社会は、というか昔から、家庭の問題は家庭で解決すべし、そんな風潮になってますけど、それで孤立して苦しい生活から這い上がれないって人もたくさんいます。私の母はそれで自殺しました」

村尾は噛み締めるようにうなずいている。珠季は続けた。「夫と子どもにはそんなふうになって欲しくないんです。これは、先に死んでいく人間の願いでして」

堀込夫人が茶色の布張りされたアルバムを持ってきた。夫人は村尾の横に座ると、話を途中から聞いていたのか、手を珠季に向けて話の先を促した。

「夫は今、子どもを一人で養える状態ではありません」珠季は陽平に視線を向ける。陽平もその目を見て、一回うなずく。「でも、若くて健康な成人男子です。時代も変わってきましたし、這い上がれるチャンスはいくらでもあると思うんです。けれど、小さな奏多を抱えてでは、その場し

以前、この教会で結婚式を挙げさせてもらいました」

陽平がきよろきよろと天井や壁に視線を向ける。

「思い出しました。この部屋、一回入ったことがあります。結婚式のときに」

「そうそう。あなた、ここで着替えをなさったのよね」堀込夫人は何かを突然思い出したように、手を打った。「そうだ、お父さんの宝物をあとで一緒に見てちょうだいな」

堀込夫人が部屋を出ていくと、村尾も膝を折り、珠季たちと目線の高さを合わせた。珠季はここで無駄話をしていると、堀込牧師を疲れさせるだけだと思い直した。奏多もまだ人見知りしておとなしい。珠季は用意してきた話を切り出した。

「村尾牧師、私と夫は見ての通り、年はかなり離れていますが。おまけに私はがんを患ってまして、堀込牧師とは同じ病院で再会しました」

村尾は微笑をたたえながら、小さくうなずく。

「今は投薬治療でがんの進行を抑えられています。最初に病名がわかったときは、余命三カ月と診断されました。こちらにいる子はようやく二歳になったばかりで、夫は朝夕の新聞配達をしながら、子育てと私の闘病生活に付き合ってくれています。生活はとても苦しいです。私も夫も頼れる身内は一人もいません。今は夫と子どもに支えられ病と闘っていますが、それはいつまでも続かないでしょう。

のぎの労働で食いつないでいくことになります。夫がフルタイムで働いて、奏多も学校の行き帰りくらい一人で行ける年齢になるまで、福祉の力をお借りしたいんです。この子を捨てたいわけではありません。キリスト教にはいろいろな福祉施設があるのではないかと、今日はこちらにご相談にありました」

村尾はベッドの堀込牧師を一瞥し、「ありますよ。大阪にもいくつか、キリスト教団体の児童養護施設があります」と答える。

「こんなことは、私が死んでから、夫がやるべきなんでしょうけど、典型的な姉さん女房でして、金銭的なこと、事務的なこと、全部私がやってきたんですよ」珠季はバッグからティッシュペーパーを取り出して、鼻をかんだ。「だから心配で、まだ自分が動けるうちに味方を作っておかなきゃって、堀込牧師がしんどいときに図々しく押しかけて来ました」

ベッドからキュキュと音がした。堀込牧師がバインダーを抱えて、マジックペンで何か書いていた。青白く筋張った手がバインダーをベッドのゲージに載せる。堀込夫人がそれを受け取り、珠季にも見えるようにして村尾に渡す。ミミズが這うような字で大阪の二つの地名が書かれていた。

「ここに、我々と繋がりが深い児童養護施設があります」

珠季はまだ安心してしきれずに、おずおずと村尾の顔を見る。「私たち、まだ信徒とは言えない立場ですが、大丈夫なのでしょいか？」

「児童養護施設は困っている子どもを助けるためにあるもので、信徒であるかどうかは関係ありません。でも、それだけ我々を信用してくださるなら、信徒になられたらどうでしょうか」

「信徒に、なりません。なりたいです」

「では、まずは日曜礼拝に毎週足を運んでもらって、教義をもっと学んでもらう必要がありますかね」

珠季は心細げに「毎週」と繰り返した。

「そうして信徒になる準備ができたなら、教会で洗礼を受けて、教会籍をつくってもらいます。その教会に所属するようなものだと理解してください。毎月献金する教会もあります」

「は、献金」

「顔がこわばってしまいましたね」村尾はにつこり微笑んだ。

「その教会を維持したり運営していくお金だと思ってください。ハロウィンやクリスマスなどの準備も一緒にやりますし、結婚式のお手伝いなんかもします。来栖さん、ご自宅から当教会までどれくらいかかりますか？」

珠季は陽平と顔を見合わせて「電車とバスを乗り継いで一時間くらいかな？」と確認した。

「奥さんのご病気のことを考えたら、もっとご自宅に近い教会で洗礼を受けた方がいい気がします。プロテスタント系でも宗派はいくつかありますが、うちと同じがよければ、来栖さんの家から近そうな教会を紹介しますよ」

村尾が堀込牧師の字の横に、いくつか教会名を書きはじめた。その様子を見守っていると、堀込夫人が「そうだ。このアルバム、ご覧になって」と立ち上がった。堀込牧師の目の前で見せたいようだった。珠季たちも立ち上がる。夫人はベッドサイドテーブルを堀込牧師の上半身に寄せ、その上でアルバムの茶色い布表紙をめくった。

北摂晴ヶ丘教会の玄関前で撮った結婚式の集合写真が現れた。写真の下に、日付と新郎新婦の名前を書いた小さなメモが挟んである。二ページ目、三ページ目もほぼ同じアングルからの集合写真だった。

「お父さんね、このアルバムを宝物にしているの。うちの教会を有名建築士に頼んで一番よかったのが、このことだったってね。おかげさまで、建築の名前で全国から学生さんとかいろんな方が訪れますけど、結婚式だったらその方たちの人生の一番大切な時間に関われるでしょう？ キリスト教の教えが、その後の彼らの人生の何かのお役に立てれば、こんな嬉しいことはないですから」

ページのなかごろに、金髪の新郎の写真が現れた。新郎の隣には付添人の大塚がいて、金髪頭を上から指差してい

おったんやけどな。その子のクリスチャンネームはマリアやったけど」

「たいていは聖書に出てくる人の名前を付けるんやね」

「イエスでもええんかな？ 俺やったらイエスにする」

「大きく出たね」

「そうか？ だって、マリアって付けてる人もいるわけやろ？」

「そやね」

「タマちゃんは何て付けたい？ やっぱりマリア？」

冬枯れの街路樹のはるか向こうに目を向けると、手前のバス停で緑色のバスが停車していた。珠季は北摂晴ヶ丘教会の信徒たちに思いを馳せる。この地域に住んでいる信徒の誰かが、見ず知らずの男女の結婚式の手伝いをしてくれたのだと。それはエロスでもフィリアでもなく、アガペーでしか説明のつかない行為だった。これしかないと思えて思ふ。夫と息子をアガペーに包まれた場所へ連れていけば、自分は安心して死んでいける。

「私はあの人」と空を見上げる。よく晴れ渡り、筆を一回引いたような雲がうっすらと見えるだけだった。「エリザベトにするわ」

「陽平くん、アホやな。金髪、写真にずっと残ってしもたやんか」

珠季がそう言うのと、堀込牧師がセロセロと呼吸しながら身体を小刻みに揺らした。笑っているようだった。

一時間ほど滞在して、珠季たちは堀込邸をあとにした。アルバムを観ていた時間が穏やかで尊く感じられ、堀込牧師との面会はこれが最後になる気がした。バス停への足取りは重かった。陽平がバギーを押してくれていたが、彼も黙り込んでいた。

バスを待っているとき、陽平が不意に「洗礼受けたら、どんなクリスチャンネームがええ？」と言ひ出した。

「プロテスタントでもクリスチャンネームは付けるんやろか？」

「ないの？ つまらん。高校の同級生でそういう子が

蒼い馬書房の新刊案内



純朴な魂をもった「金田一少年」の切ない胸の内
が読者に迫り、成長して
ゆく少年の姿が活写され
ている。文芸思潮エッセ
イ賞最優秀受賞作収録。

Essay 追憶の旅人 金田一淳

【主な収録作品】

■植物園の穴蟬 ■定山溪はつ恋軌道 ■狸小路の福引
■入院病棟8号室 ■母の東京1964 ■べこ石の浜辺で
■寮生登山 ■二条市場とかくまきの道 ■最期の手紙
■兄と版画と中川商店

四六判 206 頁 1600 円 (税込)
*送料 180 円

崖から車ごと転落した瞬間、何故か自分の状況よ
りも中学の理科教師の驚鼻やスペイン南部の小さな
町で観た躍動する闘牛の背を思い浮かべていた。
しかし、かろうじて木の枝に車体が引っ掛かり、
まだ命があることが分かったとき、本当の恐怖に襲
われた。私は私の死に直面したのだ。(本文より)



小説集(5編収録)
崖 日本海文学大賞受賞
大島直次

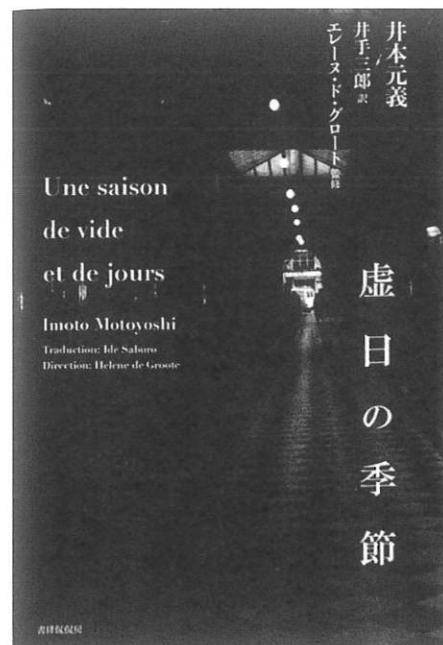
1540 円(税込)
*送料 180 円

句集**夕照**
自伝的句集338句を収録
勝呂睦男

1200 円(税
込)*送料
180 円

何はともあれ 時を駆ける
アフォーリズムと自伝的エッセイ
大島直次

1000 円(税
込)*送料
180 円



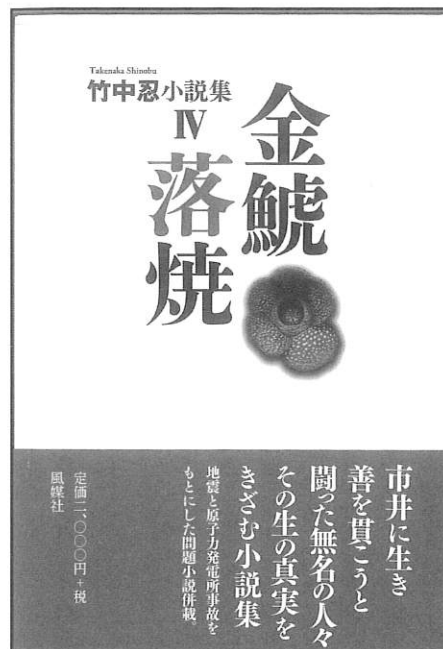
虚日の季節



蒔田あお

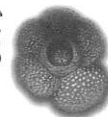
まきたあお

1973 大阪府吹田市生まれ
滋賀県大津市在住
2000 年京都市立芸術大学大学院修
了後、高校中学校などで美術科の講
師として教鞭を執る
大阪文学学校で小説の作法を習い、
2010 年頃から小説を書き始める
現在、同人誌『白鴉』会員 同人仲
間と切磋琢磨しながら執筆活動中



Tanaka Shinichi
竹中忍小説集

金鯢 IV 落焼



市井に生き
善を貫こうと
闘った無名の人々
その生の真実を
ささむ小説集
地震と原子力発電所事故を
もとにした問題小説併載
定価 2,000 円 + 税
風媒社

☆「文芸思潮」は下記の書店で店頭
販売されております。

〔東京〕
ジュンク堂池袋本店
紀伊國屋書店新宿本店
〔山梨〕
山梨朗月堂書店
〔大阪〕
MARUZEN&ジュンク堂梅田店
〔鹿児島〕
丸善ジュンク堂鹿児島天文館店
〔インターネット〕
アマゾン

申込み・問合せ ☎048(478)9215

aoi uma2022@outlook.jp

大阪文学学校から生まれる

「白鴉」は大阪文学学校で生まれた。大阪文学学校は一九五四年、小野十三郎、松岡昭宏らが発起人となって設立された。田辺聖子が一九六四年第五回芥川賞、玄月が二〇〇〇年第一二二回芥川賞、朝井まかてが二〇一四年第一五〇回直木賞を受賞するなど、現在に至るまで数々の詩人や小説家を誕生させてきた。

昼間と夜間部は詩・エッセイと小説のクラスに分かれ、さらにそれぞれ本科、専科、研究科と課程が進むようになっていく。週に一度、大阪メトロ谷町線谷町六丁目駅から徒歩数分、空堀商店街にほど近い新谷町第一ビルの三階の一室にて、生徒が提出した作品をだいたい二作品ずつ合評する。各クラスをまとめるチューターが合評を取り仕切り、各々の批評が出たあと総評を加えたり、作者に読むべき本を薦めたりする。この「組会」が終われば、昼は近所の喫茶店、夜は中華料理店や居酒屋でビールをかたむけつつ文学談義に興じたり、日頃の愚痴を吐露したりする。通信教育部もあり、年に四回作品を提出しチューター推薦で機関紙である『樹林』通教部作品集に生徒の作品が掲載さ

れ、スクーリングで合評される。また掲載されなかった作品はプレススクーリングに提出すれば他クラスの生徒の批評も受ける機会を得られる。コロナ禍により、大阪文学学校もオンラインでの合評会が可能となり、遠方からの参加者も多くなった。

生徒たちは各文学賞へ応募するほか、既存の同人誌に入ったり、仲間たちと同人や読書会を立ち上げたりして、文学活動続ける基盤を築いていく。

一九九七年、この文学学校の夜間専科秋吉クラスにて、チューターの秋吉好を中心とした少数精鋭により「白鴉文学の会」が結成された。設立時のメンバーに玄月がおり、

白鴉

2021.5 [CHAKUA] 32号
白鴉文学の会



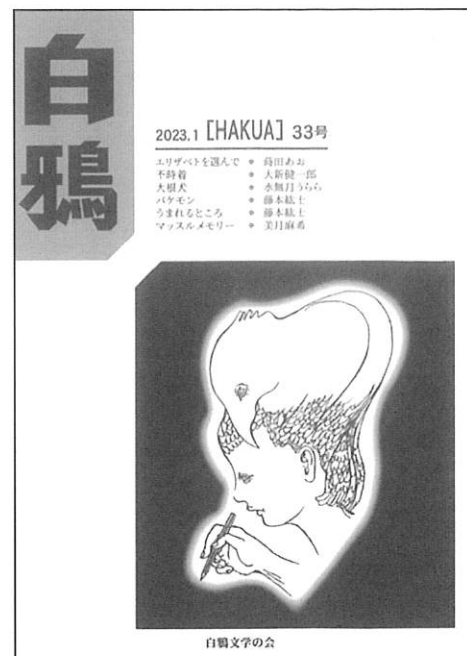
『異境の落とし児』で神戸ナビール文学賞、『舞台役者の孤独』で小谷剛文学賞を受賞するなど、二〇〇〇年に芥川賞を受賞することになる『蔭の棲みか』を発表するまでのあいだ、目覚ましい活躍を見せていたという。

私、美月麻希が現在も一緒に活動する藤本紘士氏に誘っていたとき「白鴉」に参加したのは二〇〇七年十一月発行の第二一号から。文学学校では通教部の専科が終わったばかりで、合評にも慣れておらず、大阪環状線の鶴橋駅構内にあった喫茶店「シェルブルー」の個室に足を踏み入れた瞬間から怖かった。批評するのもされるのも。おかしな批評をすれば、自分という人間の底の浅さが透けて見えてしまうんじゃないかと思った。実際にそうなのだ。批評はそ

の人の読書体験や感性を炙り出してしまふ。「白鴉」で鍛えられて、少しはわかる人間になれたのか、私は大阪文学学校の通教部本科のチューターに推薦していただけた。そのきっかけとなった作品は、二〇一四年「白鴉」二十八号に掲載された「鳩の血」で、「文芸思潮」の第八回まほろば賞優秀作に選んでいただき、五十嵐勉賞を受賞。同時に藤本紘士氏も「蟹」で優秀作に選ばれ、まほろば賞特別賞を受賞した。さらに私は同じ作品でエルマール文学賞の佳作を受賞できた。「白鴉」に参加していなければ、現在の自分はいなかったと断言できる。

私が「白鴉」に参加した当初は年二回の発行だったが、いつの間にか一年に一度、それも難しくなってきた。私が入ったときのような不定期刊行になってしまった。私が入ったときのメンバーも藤本氏以外全員退会した。例会会場にしていた鶴橋の「シェルブルー」が二〇一八年秋に閉店してしまい、阿波座の貸会議室で行うこととなったが、新型コロナの影響でオンライン合評になったり、様子を見ながら対面合評をしたり、と二〇二三年になるまで落ち着かなかった。最新号は二〇二三年一月発行の三十三号で、このたび掲載作の蒔田あお「エリザベトを選んで」がこの「文芸思潮」でまほろば賞の優秀作に選ばれて、私も受賞したころの気持ちを思い出して心新たにがんばりたいと思った。

今まで「代表」というものを置いていなかった「白鴉」



芸能人が本を薦めるコーナーで「人間の脳が考える最高の物語」として、中国のSF小説、劉慈欣の「三体」（大森望光吉訳、ワン・チャイ翻訳、立原透耶監修、早川書房）が紹介されていた。その話をしたら姉がハマってしまい、「小難しいから、寝る前に読むとよく眠れる」と、たちまち長大なシリーズを読破してしまった。

日本で翻訳が出た当初（二〇一九年）から、「三体」の存在は知っていた。三田文学新人賞作家で四国大学教授の佐々木義登さんがツイッターで購入ツイートをしていたし、施川ユウキの読書家あるある漫画「バーナード嬢曰く」（REXコミック、一迅社）でも大絶賛されていた。全世界で二千九百万部近く売れ、オバマ前大統領も任期中に愛読。Amazonも千五十億円もの予算をかけてドラマを製作中。現実の余波だけでも冗談の如き話だ。

実際に一作目を読んでみた。「人間の脳が考える最高の物語」はさすがに大袈裟ではあるものの、日本のエンタメ作家達が百人がかりでも勝てなさそうな、次元の違いは感じた。SF小説なので、「文芸思潮」読者からしたら、描写力には

人間の脳が考える最高の物語

高速道路にて車を運転中、TOKYO FMの番組だったと思う。

芸能人が本を薦めるコーナーで「人間の脳が考える最高の物語」として、中国のSF小説、劉慈欣の「三体」（大森望光吉訳、ワン・チャイ翻訳、立原透耶監修、早川書房）が紹介されていた。その話をしたら姉がハマってしまい、「小難しいから、寝る前に読むとよく眠れる」と、たちまち長大なシリーズを読破してしまった。

日本で翻訳が出た当初（二〇一九年）から、「三体」の存在は知っていた。

三田文学新人賞作家で四国大学教授の佐々木義登さんがツイッターで購入ツイートをしていたし、施川ユウキの読書家あるある漫画「バーナード嬢曰く」（REXコミック、一迅社）でも大絶賛されていた。全世界で二千九百万部近く売れ、オバマ前大統領も任期中に愛読。Amazonも千五十億円もの予算をかけてドラマを製作中。現実の余波だけでも冗談の如き話だ。

実際に一作目を読んでみた。「人間の脳が考える最高の物語」はさすがに大袈裟ではあるものの、日本のエンタメ作家達が百人がかりでも勝てなさそうな、次元の違いは感じた。SF小説なので、「文芸思潮」読者からしたら、描写力には

であるが、とりまとめ役がいたほうが便利ということもあって、私が代表を務めてはいる。だが「白鴉」の精神は何ら変わっていない。「白鴉」は書き手が寄り集まる場として機能することを目指している。来るものは拒まず、去るものは追わずが基本だ。加えて、せっかく新たに來てくれた人であっても、その作品批評にはいっさい手心というものには加えず辛辣ともいえる意見を遠慮会釈なく述べる。だが、その精神は変わってはいないつもりではあるものの、やはり私が参加した当初とはメンバーが藤本氏以外総入れ替えになっているので、些か変化したと思う。現在実働メンバー十二名で最近入ったメンバーは私のクラスだった人もいる。そのためか「育てたい」という気持ちも湧いてきているのだ。しかし、設立当初からのメンバーが「納得できるものしか掲載しない」という方針だけはこれからも死守していきたい。

（「白鴉」代表／美月麻希）

白鴉文学の会

〒661-0986

兵庫県尼崎市南清水一三・三

白鴉編集部 藤本絃士

Twitter: @chaku1997

同人名簿

■会員

玄月

碧井むく

秋尾葉里

大新健一郎

藤本絃士

蒔田あお

丸黄うりほ

美月麻希

水無月うらら

○準会員

宝田夜市

真名波田キリ

南水梨絵

三宅羊一

麦生 郁

新刊

文豪の死には、作品を超えて人生に深く問いかけるものがある。文豪が残した最後の言葉―それは生きることの深さとしての意味を投げかけてくる。文豪の素顔と魂に迫る貴重な遺言集。

文豪の遺言

木内是壽



坪内逍遙 尾崎紅葉 徳田一樹 森鷗外 山田花袋 泉鏡花 国木田独步 夏目漱石 島崎藤村 芥川龍之介 永井荷風 谷崎潤一郎 志賀直哉 有馬頼久 武者小路実篤 菊池寛 宮沢賢治 川端康成 小林秀雄 大佛次郎 岡本かの子 吉川英治 太宰治 井上靖 三島由紀夫 松本清張 遠藤周作 古川清之介 司馬遼太郎 寺山修司 向田邦子 中上健次

作家の遺言は、死に臨んで純粋に自己と向き合い、飾り気のない一人の人間として自己の意志を発露している。それは作家自身の素顔に迫るもので、死にざまは生きざまに通じる。

1728 円（税込／送料共）
御注文はアジア文化社まで

難ありかも知れない。ただ、壮大なスケールで展開される荒唐無稽な事件を、リアリティーの範囲内にセメダインが如く接着させる、膨大なまでの科学知識には感服させられた。作者の劉慈欣は発電所のエンジニアだったらしく、SF小説の乱読により、その知識を身につけたそう。

プラモデルの世界では、ウクライナとロシアの戦車や飛行機が売上でもライバル関係にあると、海洋堂の専務のユーチユーブチャンネルで学んだ。創作の世界に置き換え、我々はこの先、中国と競えるのだろうか、恐怖すら感じる大作であった。

そんな折、慶應義塾大学で三田文学新人賞の授賞式があり、十数年振りに評論部門の受賞作が二作も出た。文学新人賞で評論部門が残っているのは「三田文学」くらいなため、この国で久々に文芸評論家が誕生したことになる。特に現役慶大生である石橋直樹さんの「残存」の彼方へ折口信夫の『あたらずむ』から―は超難解な内容で、読みながら何度ウィキペディアを引いたか知れない。民俗学という共通趣味があったため、ご本人に話しかけたところ、言葉の端々に教養が溢れ、会話の二割ぐらいいは理解が及ばなかった。

日本の若き「知」も、まだまだ捨てたものではない。